と言つた時は、有繋にお島の目は「情無い事を言つて下さる」御母様の顔を斜に見たのである。

「貴方の方でもお使ひなさるのに氣が置けなくて、却つて可からう、ッてね。それは間に合ふことは、私よりはお島の方が餘程間に合ひますのさ。嚴君も今晩あたりは又些と氣分が悪いので、私に行かれては困るとお言ひなさるのを、直に歸つて來る約で出たのですから、其話旁今夜は行つて、明日早く歸つて參りますと云つて、無理に出て來ましたの、ですから、お島をね、私の代に遣いて參りますから、何分お頼み申しますよ。」

呆れて柳之助は何とも言ひかねた。此人を傍に附けて置かれるよりは、獨で寂しい方が遙に勝。設へば山道を行くのに、杖も欲いが、其が無いならば無いでも、無いからとて荷物を持たせられるのは迷惑。柳之助は幾と挨拶に窮つたのである、此儘にして置けば荷物を持たせられるし、折角好意で言つてくれるものを、無下に斥るのも氣の毒なり、如何したら可からう、と頻に考へてゐる側で、母親はお島に向つて、明日からの心得を諄々と説いてゐる。

（六）の一

折角の好意ではあるが、折角にも好意にも換へられぬので、柳之助は思切つて其折角を斥つたのである。斥りは斥つたが、隨分斥り難いのを、重くるしい口ではいと〻語が足りなかつたので、母親は此人がお島を所悪とは知らぬから、斥る理が解らなくて、唯例の變人から否むのであらうけれど、此人の爲から云はゞ、如何しても自分かお島が附いてゐるに越したことは無いと信じたから、設むば少々可厭がつても、是非附人は置いて行くと、藥を飲ませる了簡である。其も決して母親の一存ではない。お類が殺くなつてからの柳之助の樣子は、一部始終元から聞いてゐる。どうでも家内を些と賑にせねば、益〻鬱して了つて、彼分では病氣にもなりかねぬ、恁である、那である、と自分が見てゐて心配でならぬ通を話して、それには是非ともお孃樣を當分お貸し下さい、と懇々も陰で元から頼むだのである。自分の所見も然である所へ、元からも然言はれたので、母親は柳之助に話さぬ前から、肚の中では丁と其に極めてゐるのであるから、柳之助の遲々した謝絶は沸湯へ水を滴すやうなものであつた。一言云へば二言に返されて、柳之助は母親から浸々説得されて、終には言句も出なくなつて、話は其に極つて了ふ。

柳之助は頗る不平であつた。けれども常に不平のやうな顔をしてゐる人の事であるから、格別目には立たなか

つたが、此時ばかりは母親も憎くかつた、元は怪しからず生意氣であつた、お島は固より可厭な奴！

然し子供でもないものを、無遠慮に要らぬ世話を燒いて喜ぶやうな母親でもない。但お類に敎へられたことがある、「彼人は那云ふ人物だから、此方で善と思つたら侃々然う爲て了はなければ可けない。」實際お類は此主義で一家を支配してゐたのである。母親も始終其を見てゐて、又與つて力を盡した事も寡からぬので、今度の件に就いても其主義を執つて、「此方で善と思つた」から、「侃々然う爲て了つた」ので、敢て柳之助の孤立を侮つて阿母樣ぶるのでもなければ、變人を好い事にして攪亂したいのでもない。

其翌日柳之助の出勤を待つて、母親は自宅へ引き取つた、お島は早速木綿裏の衣類に着更へて、秩から友禪の澤さへ出る始末。それを見ると、

「如何な事でも、貴方、那樣物を。」　と元は笑つた。

「いゝえ、働きますよ。もう今日からはお客樣ぢやなくて。」

御手傳と云ふ資格で、二階掛と爲つたのである。

彼は金緣の眼鏡を掛けて、薄色縮緬の羽織を着て、お嬢樣として見たよりは、働きぶりの世話に變した娘形

の方が、愛に樣子が好く見えるので、同じ御同胞でも、殁くなられた奥樣は、召物の裙を曳いて、人の働くのを傍手して立つて見てゐらつしやるのが御好であつたし、又其が好く御似合なすつたが、と元は何方かと云へば、如才無いお島の方に惚れたのである、若し是で眼鏡さへ無つたら、と顔を見る度氣にしてはゐたが。左にも右にもお島は能く行屆いて柳之助の世話をした。總ての仕向が姉よりは親切で、而してなか〳〵實意もある。好く爲れるだけ柳之助は懊惱くて、三日四日と經つほど益怀へかねる。傍に居られたら、勿論の事、聲が聞えてさへ心地が快くないのに、否といふほど附絡はれるので、内には居禁らなくなつて、一日學校から歸ると直に飛出して、「類さんの所」へ行つた。

空は雪氣に曇つて、野廣い墓場に人兒一人見えぬ。高い木と赤土と、無數の墓石と凋れた花と、鳥の音と自分ばかり、其間をば悲い風が絶えず吹いてゐる。此に來ると胸が忽ち張裂けるやうになる。忘れてゐた事も並く憶出されて、我ながら怪しいまでに涙が出る。柳之助は隣の墓の臺石に腰を掛けて、森としてゐる四邊の閑寂を、もしや地の下に聲など爲はせぬか、と待つやうに聽澄しては泣いてゐた。吹募る日暮の風に落葉は雨の如く降被るを、頭から一杯に浴びても、仍動かずに復らぬ事を思窮めて、折々名殘惜しげに、傾く日

影を見返つては、起つにも起たれぬ氣色であつたが、今まで見えた其墓の高い碑さへ模糊となるまでに暮れて來たので、

「もう行かうか。」　とやう〳〵起上る。

落葉の中の二坪ばかり、是が頼さんの居間か。雨曬の標五寸角、是が頼さんの今の姿か。無情は世の習とは云ひながら、見れば見るほど、考へれば考へるほど、情無いやら、惨しいやらで、如何にも見捨てゝは歸りかねたのである。いつまで居た所で際が無い、歸ると決して、その墓標に寄つて浸々と別を告げた、驚見頼子之墓、其字は葉山が書いたのである。

「あゝ、葉山！には幾日會はんのだらう。爾來未だ會はんのだ。此方から行かんければ例も尋ねて來るのだけれど、慍つとるのか知らん。然も無ければ、道際に久しく來ん事は無い。或は慍つとるかも知れん、是は行かんけりや悪いな。」

葉山の所へ行けばお種と云ふものが控へてゐる。内へ歸れば、お島と云ふものが待つてゐる。柳之助は行くべき所に心を樂ませる方はない、而して行かねばならぬ所は何處も心を苦める所。從來然云ふ場合には内へ

歸つて慰められた頼さんの、今居る所は、折角來ても座る事さへならぬ墓場である。墓場でも可い、窖の中でも可い、已むなくば、慰められぬでも可い、せめて顔なりと見られるならば、其一時間の爲に柳之助は百人のお島とお種の中に十日の辛抱を爲るでもあらうに、その最も慰られるべきものに、最も悲まさるゝが上に、苦めらるゝのである。

柳之助は進まぬ足を曳いて谷中を出た。さてそこで、葉山の所へも餘り行きたくはなし、内へは猶更歸りたくはなし、師走の寒空に闇黒を彷徨いて、心の慰む由も無いから、早く暖い内へ入らねばならぬ。進まぬ足も寒に急がれて、彼は眞一文字に湯島の切通を上つたが、凡そ一時間の後には葉山の玄關に埃塗れの靴を脱いでゐた。

（六）の二

「あゝ、丁度好かつた。今君の家へ寄つて歸つて來た所だ。久しく見えなかつたぢやないか、帽子以來だ。」

葉山は可懐がる。然う言はれるほど面目無くて、柳之助は幾に苦笑をする。

「けれども君も些も來てくれんぢやないか。」

「彼翌々日急に名古屋の方へ出張して、昨夜歸つて來たばかりさ。」

「あゝ、然うか、居なかつたのか。」

「留守見舞ぐらゐには來てくれさうなものだ、と實は此方から恨んでゐたのだよ。」

「少しも知らんだつたものだから。」

「元に聞いたが、此頃は毎日學校へも出るさうだね。」

「あゝ、爲方が無いから出る。」

「何が爲方が無い奴があるものか、結構さ。其外に未だ變つたことがあるだらう。」

柳之助は首を傾げて、

「何も無いな。」

「否、有る理だ、能く考へて見給へ。」

指圖通り柳之助は改めて首を傾げて能く考へたが、

「何か知らん、どうも無いがな。」

「君の家に美しい人が居るぢやないか。」

之を聞くと柳之助は苦い、苦い顔をして、

「うむ彼か！」　と言つた限。

「獨で承知してゐたつて、私には解らない。彼は何處の人？。」

「彼は何でもない。」

「何でもないとは妙ぢやないか。何かだらう。」

「類の妹さ。」

「それ見給へな、お類さんの妹なら君にも義理の妹だ、それを何でもないとは怪しからん事だ。」

柳之助は是非に及ばず、

「それは然うさ。」

「あゝ、それぢや泊懸にお手傳に來てゐると云ふやうな事實かね。」

「然うさ。」

「始めて見たが、姉様には些とも肖てゐないね。」

「肖てるものか！」　と吐出すやうに言ふ。

「大相愛相の好い、氣が利いてゐさうだね。」

「如何だか僕は知らん。」

「何といふ名だい。」

「島。」

「お島さんか、婀娜な名だ。」

「君は女子さへ見りや誰でも賞める。」

「那樣に有仰らなくても可い、好いのを好いと言ふ分には差支はあるまいぢやないか。」

「ぢや彼は好いのかい。」

「まあ、一寸好いね。」

「僕は嫌ひだ。」

柳之助は此嫌ひなお島を何とか處置したい爲に、葉山の智恵を借りやうかの所存もあつたのであるのに、「好いね」と聞いては甚だ頼もしくなかつたが、問はるゝまゝに、泊懸に來てゐる來歴を一遍話して聞かせると、

「なるほど。それでは聞いて見るほど君は先方の好意を無にしてゐる理だ。第一お島さんが可哀さうぢやないか。」

柳之助は不懌な色をして、

「君は直にお島の事を言ふ。」

「言ふ理ぢやないが、親切に世話を爲に來てさ、嫌はれてさ、結局が逐還されては、隨分氣の毒な話ぢやないか。」

「氣の毒でも何でも嫌ひなものは爲方が無い。如何かして還して了いたいと思ふのだけれど、還つてくれども言へんしねえ、可厭で耐ちんのに、傍に附いとつて嘲みも爲ん事を爲で、實に煩惱〜つてね、僕は這麼弱つた事は無い。如何か、君、穏に還す方はあるまいかね、僕はもう彼が長〜泊つとるやうなら、内には居ちん這だ。」　と柳之助は思込むで言ふ。

「何を行らない事を言ふのだ。内には居ないと云つたつて、誰の家なのだ。」

「僕の家さ。」

「自分の家を駈出すのかい、不見識極るねえ。」と葉山は顔を顰める。

「それだから、何とか方はあるまいかと聞くのに、君はお島に惚れとるんだから……。」

「おい〳〵大概にしてくれ給へ、惚れてるとは餘りだよ。」

「けれども好いと言つたぢやないか。」

「好いと惚れたとは別さ。君はお島さんは嫌ひだらうけれど、惜いと云ふほどでは無からう、其と同し事さ。」

「まあ其は如何でも可いとして、如何か還したいのだね。」

「其程可厭なものならば還すが可いけれど、私の考でも、當分居てもらつて萬事の世話を頼むだ方が可からうと思ふ。有繋は阿母様の經營で、私も同意だがね。」

柳之助は舌鼓をして、

「不要だ！」と顔を背ける。

「那様に又可厭なものなら始から斷れば可のに。」

「今になつて那様事を言つたつて所爲が無い。」

「それは此方で言ふことだ。」

葉山も母親と同意といひ、且はお島を好いと云ふ人であるからは、智惠を借りたいにも、到底出來ない相談と思つたから、もう言出すまいと爲たが、是から還れば、又お島を見なければならぬ、と思ふと悚然とする。是ばかりは如何でも怺へることが出來ぬのであるから、其に就いて智惠を借りるには、此葉山より外に人は無いと考へて、

「何と云つても僕は可厭なのだから、助けると思つて工夫してくれ給へ、ねえ僕は頼むのだ。」

「君が然う言ふなら然う爲るも可いけれど、考へて見たまへ、誠に理屈の合はない話ぢやないか。」

葉山の聲は漸く鋭い調子を帶て來る。

「ねえ、他が折角深切に世話をしてくれるのを、嫌ひだと云つて斷る？人情として出來ないことだ。幾許嫌ひだと云つても、少しは其親切に絆されさうなものだがね、君のやうな變人は全く多度無いよ。」

時に困ると、葉山は其平生と打つて變つて、極めて率直に、極めて悃誠に、飽くまで痛切に言はねば止まぬ。其時には自から冒す可らざる氣力があつて、必ず人を動かすのである、柳之助は面目無げに熟と俯いた。

「君の目にも能く世話を爲てくれると見えるのだらう。見える？然うだらうとも。それで君は嬉しいとも何とも思はないか——如何だね。默つて居る所を見ると、嬉しくはないと見える、是は怪しからん！」と、君がお類さんの事を思つて類に零す涙、あれは空涙だね——あれは僞だね！」

「何故？」　と柳之助は凹むで了ふ。

「何故？僞に違無い！」　と葉山も劣らず意氣込む。

「何故？」　と柳之助の目は彌耀く。

「それぢや、他の深切も嬉しいと思はなければならない理だ。」

「思ふ！僕は思うとも。然しお島は僕は嫌ひなのだから爲方が無いぢやないか。君は無理な事を言ふよ。僕が類を愛して居るならば、お島をも愛さんければならんと謂ふけれど……。」

「誰が那樣言を云ふものか。」　と手酷く極付られて、

「然うかい。」　と柳之助は凹むで了ふ。

「私の言ふのは、細君に其程情があるならば、他にも相當の情が無ければならない、ねえ、忠臣は孝子の門に出づさ。一體君は妄に人を嫌ふけれど、嫌ひにも二樣あるよ。第一が不吃嫌ひさ、所謂虫の好かないと云ふ奴だね。第二は理由が有つて嫌ふのだ、恨が有るとか、說が合はないとか、善人が惡人を嫌ふとか。同じ嫌ひでも是は可いが、君のは第一の方で、極質の惡いのだよ。それも性分なら是非も無いけれど、其が爲に他の深切まで無にすると云ふに至つては、不都合だね。切めて深切にされたれば、今まで嫌いだつたものも、好きと云ふ迄には行かずとも、嫌ひでないくらゐには成つてもらひたいものだね、如何して然う行かないかい。」

「僕は怎云ふ人間なのだから。」

「さあ、然云ふ人間だから困ると云ふのだ。」　と葉山は稍喋り勞れた體で、息を繼ぎながら少時柳之助の樣子を眺めてゐたが、

「それともお島さんに内に居られては、大きに迷惑するやうな事情でもあるのかい。」

此は如何なる意味であるのか、柳之助には解りかねるのである。

「迷惑するのは、可厭なのだからさ。」

「可厭なのは？」

「嫌ひだからさ。」

「嫌ひなのは？」

「嫌なのは……可厭だから……。」

「それぢや逆戻だ。お島さんが君の世話を善く爲ると云つて、一體甚麽鹽梅に世話を爲るのだね。餘り世話を爲過ぎるので、それが可厭で、還して了ゐたいのかい。」

「其も有るさ。」

「はゝあ。」　と葉山は口を開いたまゝ考へてゐる。其「はゝあ」が極めて怪しげな「はゝあ」であつたので、柳之助は怪訝な目をして、其「はゝあ」の後に來るべき言を私に待構へてゐる。

「それぢや樣子が變なのだね。」

「別に變な事は無い。」

「無い？君が懊惱がるのは、お島さんが何か大いに女房氣取で世話を爲るからぢやないのかい。」

「女房氣取？然さな、然云つても可いかな。」

「然うだ！」　と膝を拍つて、

「確乎したまへ。」

「何が？」

「君は惚られてゐるのだよ。」

「馬鹿な！」　と柳之助は可恐い目をする。

「馬鹿なことがあるものか。女房氣取で君の世話を爲るのだらう、それが惚れてゐるからさ。」

「惚れてなんぞ居やせんよ。」　と鬱陶しさうに横を向く。

「惚れられてゐるか、ゐないか、其を感じない奴があるものか。」

「だから惚れてゐやせんと云ふのに。」

「惚れてゐないものが、何で女房氣取に世話をする？其が何よりの證據ぢやないか。」

「證據でも何でも、僕は可厭なのだ、嫌ひなのだから、如何してくれ給へ。」

「然う聞くと益々不便だね、可いぢやないか、最少し一所に居て遣つたつて。」

「可かん可かん！」　と膝を搖つて柳之助は其耐ふべからざるを示した。

葉山は柳之助が「女房氣取」と云ふ語を拒まぬ所から、切當お島は惚れてゐるものと早合點をしたのである。

如何にもお島が殆ど「女房氣取」に世話をするのは事實に違無いが、その「女房氣取」は決して柳之助の女房氣取ではなくて、女房の女房氣取で。お島の「女房氣取」の心の內には一點も柳之助に對する戀はない、畢竟は彼の能く氣の着くのと、世話好とが過ぎる爲に、女房的に傾いたまでの事である。柳之助も固よりお島が惚れてゐやうとは、假にも思はなかつた。然し言はれて見れば、成程その世話の行屆き方が「女房氣取」とでも謂ふべきであるから、「然云つても可いかなあ」と獨語ちたので。「女房氣取」なる語は世上の慣用に於て決して非戀ではない、三句は去らねばならぬ。さては葉山が一句で捨てなかつたのを、早合點と云ふのは寧ろ酷でもあらう。男の方では好かぬのに、女が片思で、執念く附絡ふと云ふ有る例の、それは義理にも人情にも換へられず可厭なものさうな、今柳之助のお島に於けるのは即ち其型である、と葉山は恁う考へ

たから、それでは柳之助の可厭がるのも萬更無理ではなからう、と彼は變人を賞める念も融けて、片思の人も不便ではあるが、男の性に合はぬのも、それまでの緣で致方がない、氣の毒ながら手に掛けずばなるまいかと覺に覺悟をした。覺悟はしたやうなものゝ、葉山も當面其手段には窮つて、姑くは唯「然さね〳〵。」と言ふより外は無かつた。種々に工夫を凝したが、何も柳之助あたりが思付きさうな眞元思案ばかりで、賴まれるほどの智惠は如何に振つても出ぬので、終局には匕を投げて、

「これは窮つた！」　と太息を吐く。

「君が窮つちや窮るよ。」　と柳之助は氣が氣でない。

「何しろ先方の感情を害しては拙しと云ふのだが、根が感情を害する事件なのだからね——最も其處が難しい所だから、他の智惠を借りるのだらうけれど——此智惠は一寸無いよ。」　と又熟と考込まれるほど柳之助は溢出して、

「甚麼のでも可いよ、僕には全で方案が無いのだから。」

「道具でも貸しは爲まいし、善のだの、惡いのだのと、別の箱に入れてあるのでもないやね。何しろお島さん

だけなら如何とも始末が付くが、阿母様と云ふものが控へてゐるからね、これが餘程面倒さ。左右親と云ふ奴は何かに就けて邪魔にされる、昔から割の合はない役だよ。」

と苦しい中で猶且贅辯を言ふ。

「僕は君、母親は所好なのだよ、少しも邪魔にしては居りはせんよ。」

と極眞面目で言へば、葉山は呆れもしないと云ふ顏で、

「漫然酒落も言へない！今のは酒落だよ。折角酒落を言つても、傍から註らなければならないやうぢや、酒落の効が無くなるわね。」

柳之助は目が覺めたやうな聲で、

「あゝ、酒落か。」

「あゝ、酒落かぢやないよ。」

憤たくもあり、可笑くもあり、横肚が奇痒たくなつて葉山は笑ふ。

「何處が酒落なのだ？」

柳之助は飽くまで眞面目である、

「酒落に番地があるものか。」　と今度は自分の酒落に感動して、葉山は大いに笑ふ。何故とも解らぬが、「酒落」に「番地」と云ふ配合が可笑いので、柳之助も一所に笑ふ。葉山は又直に他を向いて、少時考へてゐたが、

「どうも今急には出ないから、今夜寢ながらゆつくり趣向して置かう。」

「ぢや明日かい。」

「明日又學校の歸途に來るさ。」

「間違無いだらうな。」

「如何か考へて置くよ。」

「然うかい。」　と柳之助は茫然してゐる。

「何を又黙いでゐるのだ、一盃飲まう。」

「僕は何だ……飯の方が好い。」

聞取れなかつたか、葉山は聞正す。

「何が好いつて？」

「飯の方が。」

「飯？！まだ吃らないのかい。そんなら早く言へば可いのに、要らない我慢をしたものだ、ちや腹が空いたらう。」

「隨分空いた。内に歸りや有るけれど……。」　と極の悪いやら、氣の毒やらで口籠る。

「飯の無い家があるものか。」

葉山は早速手を拍たうとすれば、柳之助は慌てゝ止める。止めた所で急に言出しかねて頭を掻く。

「如何したのだね。」

思切つて柳之助は、

「給仕が付いちや困るな。誰を出て來んやうにしてくれたまへ。」

「お易い御用だ。宜しい〳〵。」　と葉山は手を鳴らす。

（七）の一

柳之助は翌日又葉山を尋ねて遂に一策を授かつて、歸ると直に机に向つて何やら書出した。お島は傍に居て見れば手紙。何の手紙で、何處への手紙であるか、それは問ふ必要も無ければ、見る必要も無し、又覗くべきでもなければ、柳之助が覗かせも爲ぬのであるから、お島は唯手紙を書いてゐると云ふだけを認めたのである。旋て筆を擱いて、こそ〳〵と卷收めて、狀袋に入れて、上書をした。何と書いたのか、其もお島は見なかつた。すると柳之助は其を持つて座を起つので、

「あら、兄樣、お手紙なら私が持つて參りますよ。」　とお島も遲れじと起てば、

「何、可いです。」　と振拂ふやうにして柳之助は座敷を出る。

手紙を出すに違無い。然ならば毎も他に出させるのを、秘すやうな氣勢は合點が行かぬ。然う思へば、書いてゐる中にも自分の方ばかり氣にしてゐたが、何の手紙で、何處へ遣るのだらう、と爰に始めてお島は「どうも變だ。」と直に後を追つて二階を下りたが、はや柳之助は見えなくて、表の格子の啓く音がする。元は居

「兄様は？」

「今お出掛になりましたよ。」

「何方へ？」

「郵便局とか へ行くと有仰つて。」

「あゝ然う。」　とお島も拍子抜がして、二階へ引返した。

彼は自分の邪推を悟つたのである。郵便局へ行かねばならぬ手紙とあつて見れば、元に投函させる理にはゆかぬ、自身に持つて行くのは是は當然。其をば變に思つたのは此方が早計つたのである。

手紙を書いてゐるのを、他に見られるのは誰しも不好なもの、強ち秘すではないが、見せたくはないもの、と益自分の非を悔いてゐると、表の格子の啓く音がする。おや？と思ふ所へ柳之助が入つ來る。

郵便局へ行つたと云ふのではないか。郵便局までは二町未滿もあるのではないか。駈けて行つたにしても、未だ行着かぬほどの時間に、歸つて來るとは是は異しい！

「何方へ行らしつたの？」　とお島は耐りかねて訊ねると、

「郵便を出しに。」

函なれば八九間先の角に在る。時間は其處へ行つたほどであるから、お島は其と察して餘は聞かずに、

「郵便を出しにいらつしやるなら、元が參りますのに。」

柳之助は默つて机の前に座つて了ふ。

「何故今日に限つて獨で……。」　とお島は艶然として、益劇しく流眄に挂けたが、柳之助は背面になつてゐたから、其は石に矢を射るやうなものである。然しお島は「立つ矢もあるものを」、と云はぬばかりに姑く見遣つてゐた。今日にも限らぬ、實に此頃は往々と然でない爲方が見える。自分に言ひさうな用をば元、に言ふやうな事がある。それも恁云ふ氣の人物であるから、と段々勘辨もして見たが、何やら然ばかりでもないらしい所もあるやうに想はれて、氣拙くないでも無かつた折から、此一條と二度まで挨拶を爲ぬ無愛相とが、酷くお島の心地を惡くしたのである。因で彼は自ら屑くして矢庭に二階を下りて了つた。其音を聞きながら柳之助は可恐ものを見るやうに振向いて、

「あ、慍つた！」

慍つたお島は其晩に遂に二度と机の傍に來なかつた。氣の毒な事をしたとは柳之助も思ひながら、又懊惱なくて可いと考へる。然う考へる中にも、氣の毒なと云ふ念は絶へず往來して、餘り好い心地ではなかつたが、明る朝になると、お島はゝや機嫌を直して、毎に變ることも無い。恁なつて見ると、昨夜の氣の毒は忽ち忘られて、寧そ又慍らして遣けたくなる。可厭で〳〵ならぬお島に三食とも給仕をされるのが、毎日の苦痛で、渴いて飲まうとする水から醋が起つやうな想で、お島の顏を見ると、柳之助は半分の食慾を減じざるを得ぬ。家内なるものゝ快樂が十とすれば、寡くとも其四は膳の上に無ければならぬ。外で錢を費はうでもない柳之助は況て人一倍家内で慰められてゐた。類さんの給仕でなければ、決して箸を把らなかつたものが、是では彌滿足の出來やう理が無い。彼は其樂を享くべき時に最も深く深く苦まされるのであるから、彼のお島に對する不快の念は一食毎に增長すると云つても、敢て差支は無い。

柳之助は近頃自分の羸れて、色澤の惡いのを見て、是は畢竟お島の爲に消化力を碍げられて、十分に飯が食はれぬからではあるまいかと疑つてゐる。けれども此朝は平生よりも食が進むだ、葉山に授けられた策も今

日中には行はれて、明日から光風霽月の天地に呼吸するのであると云ふ希望の爲に勵まされて。例刻に柳之助は出勤した。お島は食事をして、二階の掃除をして、浴に行つて歸つて、身仕舞をして、丁度了つた處へ車の音がして、客來の樣子であるから出て見れば、思も寄らぬ母親が來たのである。

傍に居られては煙たい母親でも、少し遣つて居て顏を見れば、飛立つほどに可懷い。早速二階へ案内して、

「よく來てねえ。」　とお島は珍らしさうに摩付いて坐る。母親は然ほど嬉くもなさゝうに、

「あゝ。」　と鈍い返事をして、お島の白粉の滿過るのを何か言ひたさうに見て、

「驚見さんは御出勤かい。」

「あゝ毎日御勉强よ、でも阿母樣能く出られてねえ。内も忙しいでせう。」

「あゝ。」

「何か御用なの？」

「あゝ。」　と母親は何やら屈托してゐる。その氣色でお島は屈托をしてゐるのは其用であらうと曉つた。

若しや自分に關つた事ではあるまいかと思へば、善かれ惡かれ氣になつて、

「何の用なの？」

「お前の事でさ。」　と母親は罪ある如くお島を見る。

「私の？」　と胸は悸々、

「何？」　と目を瞪る。

實は此方に來る一週間ほど前に薄々縁談があつた、それをお島は小耳に挾むでゐたから、多分は其が纏つたのではあるまいかと想つた。其外には自分の事で母親が飛で來るほどの用事は無い理、それほどにして叱られるやうな咎のある覺は無し、十が九までは縁談と合點したのであるが、其にしては母親の樣子が些と異しいので、然して見れば縁談でもあるまいし、何とも推測は着かぬけれど、「お前の事」とあるからは自分の事。さあ何であらうか、と切ない片唾を嚥むでゐると、母親は又お島を見向いて、前警の顚倒になつてゐるのを一寸正して、

「今朝此から手紙が來てね……。」

「兄樣から？」　とお島は覺ねず顏を突出す。

「あゝ。」

「然う？」　とお島は昨夜の事が思合される。彼の樣子と謂ひ、母親の氣振と謂ひ、何に爲ろ吉い耳ではあるまいと思へば、心弱くも胸は騷ぐ。

「而して兄樣から何と言つてあげて？」

「お前に還つてもらつて、私に來て居て欲いつて。」

お島は自分の耳を疑つた。

「何ですつて？」

其顏色を見ると、母親も二度言ふには忍びなかつたか、默つてゐれば、

「私に還れと云ふの？えゝ、還りませうとも！昨夜書いて居たのは那樣手紙……然う、それで阿母樣今日來たの？然う。」

何氣ない體を見せやうとするほど、お島の悚へかねる胸の内は猶顯れる。頰の邊は燃ゆるやうに赤くなつて、

「何云ふ理でせう。」　と聲の調子さへ變つて來る。

「何も那樣に慍らなくても可いぢやないか、異しな子だねえ。」　と母親は笑を作つて、

「畢竟お前では若いから何と無く氣が置けて窮屈だから、それで年寄の私の方が可いといふのさ。」

「然う手紙に書いてあつたの？」

「書いてはありはしないけれど。」

「それぢや如何だか判りはしない。阿母樣其處に手紙を持つてゐて？」

「置いて來たよ。」

「何と書いてありました。」

「お前では馴染が薄いから何も遠慮があつて、用が頼み難い——まあ謂へば、お客が來てゐるやうで氣屈でならないから、私と代つてもらひたいと云ふのさ。」

「何日私がお客のやうに爲てゐたらう。」

「然うは書いちやないけれど。」

お島は少時考へてゐたが、忽ち手巾を抛却けて、

「それぢや私は嫌はれたのね！」

「然云ふ事情ぢやないよ。」　と口には言ふものゝ母親も決して快い心地は爲ぬのである。お島は顏の熱氣で翳る目を襦袢の袖で二つ三つ拏つて、後は眼鏡を拭さ〳〵、

「然うに違無いのよ。」

或は然うに違無いと思ふのか、母親も姑く續く語は無くて居たが、旋て氣を變へた氣色で、

「何かい、不斷那樣やうな樣子が見えてゐたかい。」

「私が嫌はれてた樣子？」　とお島は悔しさうに故と言ふ。

「又那樣事を。嫌ふと云ふ事情ぢやないけれど、氣屈で迷惑さうな樣子でもさ。」

「えゝ、それは始終那樣樣子。」

どうせ嫌はれたからにはと云ふ氣で、お島は捨鉢な挨拶をする。

「お前は嫌はれた〳〵とお言ひだけれど、何ぞ嫌はれるやうな事でもお爲なのかい。」

是こそ母親の最も聽かむと欲する所で、始めお島を見て不興であつたのも、正に之ばかりを懸念したからで、

ある。と云ふのが、母親の胸中には別に深意のあるゆゑで、それは柳之助もお島も、恐くは阿父様さへ餘り深くは知らずに、唯母親一個で會得むでゐる一件の事がある。柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、實に其件とは根本的關繋があるのであるから、それで母親は然も無い手紙の一條も怪しからず苦になるので。

「私は別に嫌はれるやうな事をした覺も無ければ、お氣に入らうとも爲やしない。だから私は歸るわ、兄様に嫌はれたつて些も困らなくつてよ。」

思へば思ふほどお島は胸に据ゑかねて、

「私は這麼悔しい事は無いわ！」　と言ふより蚤く手巾を顏に掩てゝ飲泣を始める。

「何だね、お前は。」　と言つては見たものゝ、嫌はれたとしたらば、然ぞ娘氣には悔しからう、泣さたからうと、母親も不便の心の起らぬではない。まして可愛我子の事である、なるほど惡い所を惡いと言はれてさへ、親の情では快い氣持はせぬものを、嫌はれたと云ふ事情ではなからうけれど、自分と代つてくれは餘り嬉しくなかつた。自分は還されても娘に來てくれの方が、親の身にしては好ましい。

お島に泣かれる迄は、然までに深く母親は考へなかつた、唯一個で會得でゐる件にばかり屈托して、何ぞお

島が我儘な事でもして、柳之助に疎まれたのではないか、と寧ろお島に對する不興であつたが、さて此場に蒞むで見ると、我子は我子で、依様可愛い。然し柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、手紙の表にも無ければ、お島に聞いた所でも、別に恁と云ふほどの事は無い。その無愛相は性分で、變人なのも今更始つた理ではないから、何かに就けて打解けぬと云つて、其をば直に嫌はれた證據に取ることは出來ぬ。彼此考合せて見るに、嫌はれたと確に言斷るほどの目處は無い。因で母親も一時は疑つたやうなものゝ、全く例の偏屈から出た事と思直して、お島を慰めたが、本人は容易に得心は出來なかつた。

假令嫌はれたでないに爲よ、喜ばれたのではない。又嫌はれたならば嫌はれたで一向管はぬ、柳之助などに好かれなくても困らないとは思ふが、是までに氣を着けて世話もし、働きもしたのを、何が不足で中途から還されるのか、其がお島は悔しくて〳〵ならぬ。自分は從來何處へ出ても、必ず氣が着くと云はれた、如才無いとて持てた、顏さへ出せば、お島さんが來た！と他から嬉しがられぬ事は無かつた。それほどの自分とお島は私に信じてゐる。此度泊に來てゐるのも、何も自分の醉興ではない、種々母親にも頼まれたし、柳之助が寂しがつてゐる樣子を聞いて見れば、あゝ氣の毒なといふ心から、故々世話を爲にも來たのである。其

世話を爲るに就いても、姉様への回向と思ひ、兄様が可哀さうとも思ふから、有らむ限の力を盡した意なので。設是程の事を他で爲たならば、甚麼に喜ばるであらうと思ふのに、中途から還されるとは何事であらう。それほど自分は足はぬものであらうか、不束なものであらうかと、お島は這麼恥辱を掻された事は無いやうに、返すがへすも唯其が悔しいのである。

固より母親の知つた事ではない、母親に向つて怨を抒べる筋は無い、又餘り言過ぎると叱られるに極つてゐるから、もう母親には言ふまい、けれども、言はねば濟まぬ胸の内、言ふ人には屹と言はなければと、やうやう涙を拂つて、柳之助の歸來を晩しと待つた。母親は又外に苦勞があるので、是も浮かぬ顔をして、互に身に泌みぬ話をしてゐた。

（七）の二

三時少し轉ると柳之助は歸つて來た樣子。元と話す聲が聞えるので、母親は指圖をしてお島を出迎に起たせると、起ちは起つたが、階子を下りると殆ど柳之助と擦違に、すうと翥れて小座敷へ入つて了つたが、其姿を見れば「悔しい」が忽ち上衝げて、扉を閉てると與に、お島は潸々と涙を零した、その又胸の内は沸返る

やう。

阿母様さへ居なければ、追駈けて行つて言ふだけの事を言つて遣るのだ。而して理屈が違つてゐたらば、兄様も何も有るものか、謝罪せて遣る——端然と手を支いて御辭儀をさして、立派に謝罪せなければ承知しない。

勞頭、どうせ貴方の御細君ぢやありませんから、姉様のやうな理には參りません、と然う言つて遣らなければならない。然すれば彼人の事だから、必然忸怩して碌に口も利けはしない、喑々した聲をして、決して那樣理ぢやないとか何とか曖昧なことを言つて、狼狽するに違無い。然う爲れば猶言つて遣る、どうせお氣に入らないのですから、早速歸ります。長々どうもお世話樣になりました、然そ御迷惑でございましたらう。お氣に入らないものを、私の方でも切て置いて下さいましとはお頼み申しません、自分の家がありますから、自分の家へ歸ります。

家への土産に、又私の後學の爲にもなることですから、何處がお氣に召さないのですか、其を聞かして下さいましと、管ふ事は無い、思入れ諷詆を言つて遣る。管ふ事があるものか、甚麼事があらうとも、二度と再

び此家へ來るものか、死んだつて、殺されたつて來るものか。決して〳〵もう〳〵〳〵來ることではないから、何でも管はず言ふだけの事を言ふ。而して、今迄貴方の爲には是々恁々働いてあげましたが、貴方は其が判りますかと、少し酷いけれど言つて遣る。それくらゐの事を言はなくて償ふものぢやない。第一私の爲た事に何處に不足があるのでございますよう!!何處にでも不足があるなら、言つて御覽なさいまし。自分では不足の無い意でございますが、貴方のやうな萬事にお氣の着く、行屆いた方の目から御覽なすつたら、私のやうな不束者の爲る事は、然ぞお氣に召さないだらけでございませうから、何卒御遠慮無く有仰つて下さいまし。

宛然敵の柳之助が目の前に居る氣になつて、言ふだけの事を言つて去る其場の光景の想像が、終には事實であるやうに思做されて、

「えゝ、悔しい?」　とお島は我知らず片膝を疊に擊さつけて、手巾を咬裂いて身悶をして、悔し涙を零す。

えゝ、もう言つて遣りたい、言つて遣りたい、けれども、阿母さんが居るから、那樣事は言へない。彼人單

身なら屹度言つて遣る、然したら仂ない女だと思つて吃驚するだらう。那樣人に吃驚されたつて管ふものか、思入れ吃驚さして、可恐い女だと思はせて遣る方が可いとも。何ぼ女だつて這麼に恥を搔かされて、默つて引込むでゐるやふな、那樣意氣地の無い事があるものか。是非、是非!言はなければ承知しない、如何かして言つて遣らう。

考へれば考へるほど、お島は激して、衝と起つたが、

「あゝ、阿母樣が居る!」　と胥菜に沸湯を沃けたやうになつて、ぱつたりと又座る。座れば考へられる、考へれば我慢の爲されぬほど悔しい。到頭一枚の手巾を燒鰐のやうに裂いて了ふ。

（七）の三

此間二階では絶えず話聲がしてゐた。何を言ふとも聞取れぬけれど、折々柳之助の聲が能く聞える、其度にお島は憤悶する。

樣子は知れぬが、如何にも母親とは打解けてゐるらしい。變人だと云ふからは、誰にも無愛相かと思へば、母親とは那麼に親しく話をする癖に、自分には如何であらう!寄らず觸らぬやうにして始終遁げてゐる。變

人であるから誰にも那麼かと思へば、母親には然うでない、断然自分は嫌はれたに極つてゐる。那麼人物に嫌はれたかと思へば、我ながら餘り情無い、とは謂ふものゝ又能く考へて見れば、腹も立たない。那麼理の解らぬ人物に嫌はれたからとて、其が如何したのだ！可厭で幸ひ、好かれては迷惑。いつそ此儘無言で歸らうか、とお島は思つても見る。同時に又考へたのは、どうも阿母様の語氣では、私が這麼恥を掻かされても那様に悔しいとは思つてくれないらしい。而して何方かと云へば、少々誤つても私を置いてもらひたいやうな様子。先から何を話してゐるのか知れぬけれど、もしや彼人を宥めて、那云ふ不束なものでも我慢をして最少し置いてくれなどゝ、囑みでもしてゐるのではなからうか、噫、可厭な事、可厭な事！誰が？自分は幾ら其氣でも、阿母様が何と話をしてゐるのか知れない。那様事でもあつたら恥の上塗、私は未だそれほど耄碌はしない。甚麼話をしてゐるのだか、聞きに行かなければならない。もし那様話しであつたら、是から直に歸つて了はう。

恁う覺悟してお島は小座敷を出た。徐に階子を歴つて、次の間の障子を啓けるまでは、密々と聞えた聲が、俄に何か掩被せたやうにぱつたり歇むで、故とらしく煙管を擊く音がする。其は母親である。阿母様まで他を

袖にして、えゝ、水臭い、とお島は益々腹が立つ。

區分の紙門を啓けかけると、撞着るやうに顔を見合せた母親は、

「少し今お話があるのだから、お前さんは下へ行つておいで。」

お島は胸が塞つて言が出ぬ。此悔しさは退くにも退かれず、其儘熟と立つてゐると、

「よう、少し下へ。」　と言ふ母親の目は更に多くの言を含むで、お島の眉間を射る如く見る。

母の言には背かれぬ、が柳之助の姿を見て一言も云はずにのめ〳〵と往かれうか、又水臭い母親に向つて多少の恨の無い理にはゆかぬ。彼此默つて爰は引込みかねた。

散々怨を言ひたい柳之助は空々しく彼方を向いてゐる、頼に思ふ母親には逐立てられる、而して自分は四五寸紙門を啓けたばかりで、入ることもならず、然も間抜に立たされてゐる。その極の惡さと悔しさは何とも彼とも謂はれぬ。此胸を快くする爲には、如何なる目に遭はうとも決して苦しくないとまでに思つた。お島は上衝げる涙を咬むで、

「私は是から歸りますから！」　と言ふが否や紙門を確と閉てる。

「何の事です！」　と母親の聲のする頃には、階子を亂次に駈下る響がして、その中で何を落したのか、鏘然鏗然！――お島は眼鏡を破して了つたのである。物音の氣立しさに驚いて老婢は臺所から濡手を拭き拭き駈着ける。其途で破れた眼鏡を拾つたが、之に就けても尋常事ではあるまいと思ひながら小座敷の扉を啓ければ、這は抑、お島は泣伏してゐる。元はおろ〳〵聲で、

「まあ、お嬢さん如何なさいました。」

嬉しくも問はれるほどお島はいと〻悲しい。今までは忍音に泣いてゐたのが、堰きかねて衝と聲が出る。

「如何爲すたのでございます。まあ、お眼鏡まで這麼に爲すつて。」

眼鏡と涙とは其實何等の關係も無いのである。然し元は何ぞ關係の有るやうに思つた。三度聞返さるゝまで、涙を禁めかねたのであるが、やう〳〵歔欷げながら、

「私は悔しいわ。」　と辛くも言つて、後は又暫く泣入る。段々劬られて、竟に其「悔しい」事情を話せば、元は他人でありながら母親のやうに辛くはなくて、

「それはまあ飛でもない事を！」　と今更主人の變人に呆れ返つた。有繋に年の効は、其と口へ出して主

人の沒分曉を喚散すやうな事は爲ぬ、なるほど飽くまでも主人の曲つてゐる事、お島の腹を立るのは理の筋を言つたのである。然し彼は主人に成代つて重々其心得違を詫びて、お島の心を和げやうと努めた。而して今往かれては自分一人で何程困るか知れぬから、此年寄を助けると思つて、最少しの所胸を撫つて辛抱をしてくれるやうにと、お島が來てから家の爲になつた次第を陳べて、

「御存の通り旦那は那云ふ一國者でおらしやるけれど、お肚にはもう少しの毒も無い、宛然子供のやうな方なのですから、何卒まあ惡からず、決してお氣にはお留めなさらないやうに。」

と元は幾度も頭を低げて詫るやら、宥めるやら、語に語を盡した。お島も今は氣の毒になつて、元の手前泣くに泣かれず、涙は拂つて見せたが、柳之助に對する「悔しい」の念は、之が爲に一厘でも減じたのではない。寧ろ、他人の元さへ這麼に思ふものを、其世話をされた當人が難有いとも思はぬのみか、こつそり母親へ手紙を出して、體好く逐拂はうとは何事であらうと、なほ〳〵〳〵其所置が然でない、其了簡が憎いと執念は益深くなる。

この元が柳之助の母親であつて、此樣に手甲厚つて詫びたにしても、お島は決して恨みを忘れやうとは思は

ぬ。彼が奉公人であるからは猶の事、那まで言つてくれる志は嬉しい、無に爲たくはないけれども、誤られる筋が違ふからには、勘辨の爲やうも無ければ、又勘辨を爲べきでもない。元の謝罪は元の謝罪、柳之助への恨は柳之助への恨、とお島は其二件の胸の納所を別にして、元の前は體好く作へて左も右も濟した。

程無く夕飯の膳立が始まる。お島はもう〳〵這麼家の用は火箸一本持つまいと覺悟はしたけれど、年寄の元を一人動かすのも劬しく、先の種々言つてくれた深切も忘れられぬ、彼との馴染も今日が別と思へば、義理からも情合からも手傳はずには在られなくなつて、此家の爲めに働くのではない、元の手傳をして遣るのと極めて、お島は小座敷を出たのである。施て座敷に膳が並べば、元は二階へ知らせに行く、續いて二人の徐々と下りて來るのを合圖に、お島は飄然と其處を出て、又小座敷へ入つて了つた。

柳之助も母親も席に着いた、――お島は出て來ぬ。二人は箸を取つた、――未だ出て來ぬ。因で元は迎に行つたが、姑くすると悄々還つて來て、

「お嬢さんは御飯は召上らないと有仰います。」

（八）の一

翌日の午前お島母子は二挺の車を揃へて柳之助の門を出たが、それぎり母親も還つて來ず、鶯見の家内は再び其寂しい主人と老婢の二人になつて了つた。柳之助は引續いて出勤を忘らず、朝々例のステッキを挈げて蹣跚と出て行つては、蹣跚と歸つて來る。生徒の受は不相變善い。授業に於ては決してお島を取扱ふやうに不深切なものではないのである。彼を「妻が」先生と呼ぶ同僚も、其「妻が」を失つて後の柳之助を見て、別に變つた樣子も無いのを酷く怪むだ。休憩の間も人とは話を爲ぬやうにして、毎も窓の側に立つて、兩手を背後にして外を眺めてゐる。折には書を見てもゐれば、莫も吃ふ、それらは皆舊の通で、唯一事變つたのは、「妻が」と云ふ言を口に爲ぬやうになつたのである。或人は之を或人に不審した、すると、乙の或人は笑つて、

「當然ぢやないか、無は指す事は出來ない。」

「然でないよ。」　と甲の或人の曰く、

「無の現在は無ぢやけれど、過去よ、過去を言出さんのが餘程不思議ぢやないか。」

誰も誰も此疑問に對して確答を與へる者は無かつた。「妻が」先生とまで仇名を取つたほどの柳之助が、那と

其「妻が」何であつたとも、恁ざあつたちばとも言はなくなつた。

外に異常の點を覓めたなら、顏色が憔悴して、何となく氣力が衰へたが、始終惘然と窓の外ばかり眺めてゐるやうな風であつたから、彼等の目には、平生も彼の顏色は憔悴して、氣力は衰耗して見えたので、今更際立も爲せぬのが、舊の仇名をそのまゝに彼は「妻が」先生と呼れてゐる。或人は此名の今は妥當でないことを說いて、プロフエッサア ホンドウ(窓)と改めるが可からうと言出したが、行はれずに了つた。

學校に出ては此有樣、家に歸つては全く二階に閉籠つて、寢てゐるのか起きてゐるのか知れぬほど閑寂にしてゐる。せめて食事の時には、元が類に話を爲るやうに仕向ければ、懊惱がつて他の言は能くも聞かずに、思出しては、

「元、寂しいなあ！」 とばかり。言はれる元の身も隨分寂しい、お島に歸られて落膽してゐるさへあるに、主を見ればいと〻氣が滅入る。四十九日も過ぎた此頃でも、未だ〳〵悲歎は少しも薄らがぬ樣子で、折々目を泣腫してゐるのを見る。其當座のやうに取亂してこそゐないが、思窮めてばかりゐる體は、始終惘然として居る。此分では如何なるであらう、病氣でも出なければ可いが、と元は其も亦苦勞になる。何程傍から氣を

揉むだ所で、別に爲む方も無い。自分も配耦を喪して、經驗がある、まして稼人の夫に先立たれたのであるから、其悲歎は可愛い奧樣に別れたやうなものではない、それでも日子の經つに就けて、終には何か恁か忘れられるもの。半年も一年も然う〳〵思弱めてゐられるものではないから今に、と思直しても、氣の滅入ることは猶且滅入る。

柳之助は近頃遲に甚しく思頽れて、間さへあれば太息を吐いてゐやうと云ふので。有繋に學校に出てゐる間は、氣の浮かぬながらも左にか右にか紛らされてゐるが、內へ歸るとなると、其途から漸く次爵出して、門を入ると俱に胸は塞つて、座敷へ入る、二階へ昇る、机の前に座ると、今まで辛くも紛らしてゐた思が一時に紛と寄せて來て、埒も無くお類の事を考へさせる。其が爲に柳之助は悲み、悔み、嘆き、慕ひ、恨み、傷み、而して遂には泣かされる。漸く其涙を抑へたかと思へば、又追懸けて泣かされるまでの順序を反覆される。愁環端無で、如此く同じ事を反覆し反覆しても、涙は飽くことを知らず毎も新しく催される。

但之を幾度と無く反覆す心は遂に勞れて、其苦に堪へかねると、忽ち机の傍を起つて例の室の內を類に運動する。

其最能く愁環の廻るのは夕暮である。四邊の次第に黯くなるにつれて凄寥は逼つて來る、哀は頻に誘はれる、其時こそ胸も張裂けるばかりに切思めて、在るべき心地も爲ぬやうに覺える。或夕暮特に耐りかねて、戸外へ飛出して、近邊を行遍つて見たのであるが、氷を擦したやうな寒い〳〵風の中でも、家の内よりは其思を紛らす便は有つたが、翌日からは黄昏になれば必ず戸外へ出なければ憾はぬやうになつて、其時刻には六七町も歩いて歸つて來るのが、毎日の習慣となつた。恁して歸つて來ると、恐るべき夕暮は過ぎて燈が點いてゐる、夜になつてからは一時机に向つて勉強を爲る。柳之助は聞ゆる勉強家である。悲の爲に久しく其勉強を廢してゐたのが、學校へ出るやうになつてから氣を取直して又始めたのも、究竟は己の好む所で憂を忘れやうと云ふ氣。彼は世間の狹い身であるから平生他よりは机の上に多く友を求めて、心を慰むる所は其專門學の研究である。

宵の内は暫く無理にも其で紛らされるが、到底長く思出さずにはゐられぬ、一二時間の後には必ず不覺心になる。其時は又夕暮に惱まされるやうなものではない、常に彼が學理の研究にも、晝間よりは夜中こそなか〳〵深く思を凝し得るやうに、生憎其事も亦鋭く考へられる。彼が最愛の妻に就いて考へるのは、失望に

就いて考へるも同じことで、深く考へるのは則ち深く失望するのであつた。人は渴くと理不盡に水を欲がる、柳之助の戀しさも其の理不盡で、幾と身も世も爲に忘られるまで悶へても苦むでも、仍放されず苛まれるに堪へかねては、寧ろ快く死なうかと、弗と迷の出ることさへある。

或夕暮から遽に甚しく凄寥に惱まされたやうに、又或夜から遽に此失望の苦痛を劇しく感じた。固よりその凄寥もこの失望も今に始つたのではない、切なる悲を覺えた日から引續いて、日毎に夜毎に其が爲に苦められてゐるのではあるが、此頃になつて遽に一層甚しく感じられるのである。夕暮の凄寥は左も右も例の散歩で漸く凌いで、夜の更に此悶々に洗〻に一合の酒を以てして、醉を藉りて無理に睡る、――睡つて纔に忘れるのである。恁して酒の力で忘れるのが夜毎の例である如く、彼は一時から二時までの間に必ず目を覺すが癖となつた。覺めると興に戀しさの念は再發する、謂ふに謂はれず侘しくなる、忽ち全身の血は氷りつつ、或所へ曳入れられるやうに覺える、耐りかねて寒さも何も忘れて寢床から蹶起さる、而して劇しく室の内を運動する。其間も絶にず胸の内では悶へ〳〵てゐるので、此時彼の眼は全く乾いて、慄の有る如く瞪きながら、或ものに逐はれるやうに慌忙しく往さつ復りつして、我と我胸を抱竦めて、焚ゆる如き呼吸で嗤

いでゐる。稍一時間も此體で、漸く疲れて寢床に倒れると、それから朝までは一息に寢る。是が夜毎なので、柳之助は苦しさも苦しゝ、不思議にも思つて、後には病ではあるまいかと考へた。

夕方の微昏くなる時の其の身に泌みて凄寥！夜になつて憶出す時の其の味氣無さ！酒が醒めて眞夜中に目を開く時の其の侘しさ！尋常ではない、と自分も熟思つて、

何故近頃急に這麼になつたのであらう？此有樣で一個月も續いたら、病氣にならずには措かぬ。或は既に病氣なのかも知れぬ、一種の精神病かも知れぬ。幸に病氣でないにしても、普通の病氣よりは覔に苦しい。或病人が發熱するやうに、時を限つて始る所は、如何しても一種の病のやうだ、噫、精神病にでもなつたのか！と柳之助は途に疑を抱いたのである。

畢竟恁云ふ事になるのも餘り類さんの事を思ふからだ。類さんの事ばかりは然し忘れられん。忘れられんけれど、毎日毎晩のやうに苦い想をして、それで類さんが復つてくれるなら可いが、唯苦しむばかりで何の効も無いのだ。此後彌那が劇しくなれば、必ず體を傷める、體を傷めれば彌那痛苦を益さんければならぬ。自分が此上病氣になつた日には、其心細さは如何であらう。看護をしてもらう類さんは居らぬ、傍から

慰めてくれる類さんは居らぬ、此二階に唯獨痩衰へて臥て居る？嗟、思出しても悚然とする。病氣にはなるまい、病氣になつては困るから、今後は類さんの事を忘れるやうに努めやう、類さんの事さへ忘るれば病氣にはならぬ。何とかして忘れやう、今日から斷然忘れやう、と固く心に誓つた其夕暮も、昨日に同じく凄寥くて、其夜も同じく味氣無くて、其夜中も同じく目が覺めたので、翌日は其に懲りて、一層固く心に誓つたのである。

誓つても誓つても仍日毎夜毎に苦しめられることは變らぬので、柳之助も有繋に我ながら可恐しいやうな氣がして。

如何したのだらう。我は如何しても如何かしてゐる。固よりそれは類さんの事は忘れられん。自分では忘れやう、忘れやうと爲るけれど、猶且始終考へてゐる。その通り戀しいことは戀しいけれど、十分もう諦めては居るのだ。是程諦めてをるのに、如何いふものだらう、解らん！して見ると病氣かなあ、醫者に係ちうかなあ。

彼も今は幾と其辛さに堪へかねて、此上は人手を藉りて苦艱を脱けるより外は無いと思つて、一體恁云ふ事

が有るものであらうか、其を先づ質ねやうと、葉山に會つて仔細を話したのである。

一々聞いて見ると、葉山も心穩でない。

「それは成程病氣と云つても可からう、まあ〳〵病氣だね。然し藥を飲むだから直に復ると云ふ理には行かない、腹の痛いのや、便通の無いのとは大分違ふから。何しろ子然獨で居るのが、其が大毒なのだよ、病は其處に在るのだ。學校へ出てゐる間は那麼事は無からう？然だらうとも。君は思込が深いから、獨で居るとお類さんの事ばかり考へてゐるのだらう。それほど戀しい人だ、その人が居なくなつたのだから、世の中が面白くないのも無理ぢやない、それは察しる。萬々察してゐるが、その戀しいを棄却にしなけりや迚も可けないね。成程忘れやうとしてゐる？それは可い。如何しても忘れられ……ない？それが可けないぢやないか。

然言ふと又惱られるかも知れないけれど、忘れる方は幾多もあるのだ。然し君は強て忘れやうと爲ないのだから困る。甚麼にしても忘れやうと思へば……あゝ有る段じやない、大有さ。唯内に打坐つてゐて、忘れたい、忘れたいと言つてゐたつて、それは不可だよ。君は其種だらう。笑つてゐる所を見ると手の筋だね。

それぢや可けません、依樣木に緣つて魚を求めるのだ。因だから、此間のお島さんの件なぞは好かつたのだけれど、君が變屈だから困るよ。其後音信は無しかい、阿母樣も內々惱つてゐるのだらう。其頃然やつて苦しまされるのも、一はお島さんの怨念だあね。で、阿母樣は君の今後に就いて何と言つてゐるい。別に何とも言はない？因でだ、君の意見は如何いふの？あの所帶はあのまゝ長く持つてゐやうと云ふのかね。別に考はない？最一つ因でだ、女片の無い所帶と云ふ奴は不都合なものだ、何、元が居る？元なんぞは女片の部ぢやありません！那は棒切か、襤褸切さ。もつと好い女片さ。

細君と云ふものが無ければ、所帶を持つ必用はまあ無いのだ、然うだらう。それでは如何だい、彼所帶を疊む氣は無しかい。而して如何する？まさか廻國に出るのぢやないよ、一先世帶を疊むで、小綺麗に下宿でもして、呑氣に勉强を爲たら如何。

然しね、又惱られるかも知れないけれど」　と一服付けながら柳之助の氣色を見れば、

「何を、僕は何も惱りはせんよ。君の忠告に對して僕は惱る方は無い。」

「巧く言つてるよ。」　と葉山は煙管を落して笑ふ。

「善、屹と慍らないね、請合つたね？實は外でもないが、君だつて長い間には何れ繼聘を迎ふのだらう。まあ聞き給へ、唯話だから。何、迎はない？一生迎はない？それなら猶の事、所帶を持つてゐるには當らない理だ。直に繼聘が來ると云ふのなら、折角持つた所帶を壐むで了ふ事は無いけれど、君の今の樣子では、なか〳〵急には迎ひさうもないから、それなら……。」

「急にも晩くも僕はもう一生妻は有たんと言ふのに。」

と柳之助は忽ち機嫌を損じる。

「うむ、是は惡かつた。一生有たない！然うだ。然うだが、是は話だからまあ聞き給へ。有つにした所で急な事ぢやない。あれさ、話だと言ふのに、可いかい、斷つて置くよ、話だよ。急なことぢやないと、而するとだ、君は彼家に獨法師で居る間は、必ずお類さんの事を思出さずにはゐられないよ。如何して、如何して忘れられるものか、忘れなくつても管はないのさ、始終思つてゐるのも可いやね、唯其だけの事で濟みさへすれば。いや、所が濟まない！然だらうね、現在病氣にもならうとしてゐる始末ぢやないか。ねね、體を傷して了はなけりやならない。然して見れば、不實なことを言ふやうだけれど、是は如何あつても公然忘れなければなるまい。其處だて、忘れやうと云ふには獨で居るのは極惡い、――紛れると云ふ事があるまい、何でも紛らさなけりや可けないのだ。幾らお類さんの事だから好いと云つたつて、忘れられずに怏々してゐるのは隨分辛からう。苦しい？然だらうとも。體に障るよ。今の分で打遣らかして措いて一月も續いて見給へ、立派な發狂になつて了う。今更所帶を壐むで下宿をすると云ふのも變なものだから、飛日も言つた通り、まあ〳〵當分私の家へ來てゐたら如何だい。下宿から見れば遙に上等さ。座敷料は戴かず、炭錢は御附にして、それで浴が立つて、洗濯もしてあげてさ、第一食物が好いよ。少々滯つたつて可厭な顔を爲るぢやなし。高いから減けろと言へば無料までには減けやうと想ふ。何と如何だらう！觀音樣が店を出したつて恁うは行くものか。實の有つたものだらうが、これで惚れなきや先方が無理です。」

柳之助は少く所思があるので、即答しかねて熟と考へてゐると、

「强ひて勸める譯ぢやないが、君の病氣に對する國手葉山の處方はまづ此外には無いてね。左も右も獨で子然内に引籠むで居るのは何より毒だよ。」

太息交りに柳之助は、

「實際然うだね、僕も然う思つとる。」

「それぢや別に那樣に考へることは無いぢやないか。折角持つた所帶だから、疊むで了ふのも面白くないと云ふのかい。」

「何有、那麼所帶なぞ！君の言ふ通りだ、妻が居なけりや無用なものだ。妻が居なくなつてからはね、自分の家も自分の家のやうな心地は爲やせんもの。唯飯を食つて活きて居るだけなら、別に所帶を持つとる必要は無いさ。」

「然う思ふなら疊むが可いのさ。」

「然うだね。」

彼は葉山の忠告を容れて、我家とは思はれぬ所帶は疊むで了つて、身輕になつて勉强爲やう氣にはなつたのである。然し、深切に再三言つてくれる同居の件に就いては、左か右か言を濁して、全で諾否は言はずに別れて了つた。

（八）の二

一日二日は切に其事ばかりを考へてゐたが、さて分別は容易に着かぬ。葉山へ同居はしたいが、お種と云ふものがゐる、これが必ず第二のお島となつて、自分を苦めるに違無い。また獨で子然と内に居るのは、正しく病氣の根であるのみならず、可厭なことは日毎夜毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出來ぬ。

葉山の所へ行かぬまでも、此所帶は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？相當の下宿を探すか、葉山へ同居をするか、何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帶に越したことは無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直し〳〵した末、如何あつても所帶は仕舞つて、傳居をして、氣を變へるが何よりであると決した。

斷然其氣になつて見ると、何處と目標は無いが、或所へ轉居したと假定めて、其處の生活が極めて愉快で面白く勉强が出來て、お類の事も忘られて、世話をしてくれる者が無くても更に不自由ではなくて、日曜毎に谷中へ墓詣をして、それが何よりの樂事で、獨身はなか〳〵呑氣で、學問には適當であるなどの善い事ばかりが、手に取るやうに胸に浮ぶ。勿論其は空想である、空想にしても隨分愉快を感じる。之が實際であつた

らば、甚麽に愉快であらうと思ふほど、益此家が厭はしくなつて。

「轉居、轉居、轉居に限る！」　と是非の考慮も無く、はや明日から家内を片附けやう、と氣ばかり立つて、何處へ轉居するのやら、其邊は未だ一向雲を摑むやうでありながら、此家を出れば、眺望のある、閑靜な、日向の好い小綺麗な、二間ほどの二階が借りてあつて、掃除も整然と出來て、何時でも御入來を待つばかりの仕掛になつてゐるやうに想はれる。盛に其空想に驅られてゐる爲に、殆ど類さんの事を思ふのも忘れて了つて、夕暮も氣になるほどは淒寥を感じず、夜になつても引續いて忘れ通してゐた。催眠劑として毎夜買せる一合の酒も、例に因つて机の側に備へてありながら、其には手をも觸れずに、柳之助は寢床へ入つて了つたのである。

明朝になつて目が覺めると、斬られた夢の假であつたやうなものではない、吽と安堵の息を吐いて、

「おゝ！昨夜は無事であつた。」　と心の動悸の姑くは止まぬほど、彼は近頃に此程の歡喜は絶えて覺えなかつた。陷穽の底からやう〳〵這出て、始めて蒼々した廣野を見たやうの想で、枕を擧げて四邊を眴してゐたが、岸破と床を起きて、

「轉居だ、轉居だ！」　と大聲に呟けば、折から階子下を通る元は何と聞違へたか、

「はい。」　と直に昇つて來て、

「御用でございますか。」

「呼びはせんよ。」

「おや〳〵然やうで。」

さて轉居を爲るに就いては、第一に厄介になるのが荷物である。一所帶抱へては下宿も出來なければ、同居も出來ぬ。まづ此始末から着けねばならぬ、類さんの持つて來たものは一式之を生家へ返して、所帶道具は長年好〳〵勤めた元へ與れやう。然して了へば自分の持物は本箱に机、夜具に衣類、目欲いところは那樣もので、それで大分身輕になる。所帶を疊むと云へば、と處置をするより外は無い、と自分は思ふが、甚麽ものであらうか、と彼は再び之を葉山に詢ると、

「臺灣へでも之〳〵やうだね。」　と直に例の洒落であつたが、

「それぢや如何するかね。」　と意見を聞けば、

「可い、大出來だ。お類さんの物を全然返すのは、これは至極好い立案だ。然し、先方でも然やうでこいますかと應それとは受けまいぜ。それよりは、當分預つて置いてくれと云ふので……箪笥が一棹に葛籠に長持だね、其外夜具に然うだ細々した道具類か、手も無く釣臺三荷だけ返す理なのだ。那樣に舁込まれちや一寸窮るね、倉庫でも無ければ。然すると預つてくれも異しなものだし、俠樣君の事だから、いつそ端的に、此方に在つても不用なものだから、お島さんへ形見にと云ふやうなことで、屆けたが可いだらう。」

「あのお島へ遣るのは可厭だ。君は妙にお島が好きだよ。」

心から恨めしさうに柳之助は言ふので、葉山は怀へかれて噴出す。

「何ぼ好きだつて、他の形見頑で義理を爲る奴があるものか。お島さんへと言へば、それで丁と阿母樣も阿父樣も喜ぶのだと云ふことさ。其は可いがね、所帶を疊むと云ふ日には、姻家へも相談を爲なければなるまい。爲れば止められるね、何故でも止められるよ、止められます！

それに一昨日私も漫然話はしたけれど、未だ百箇日經たないのだね。百箇日も經たないのに家を仕舞ふのは餘り世間體が善くない。はあ、來月の十一日が？もう然なるかね。それは君も知つてゐれば、百箇日も一週

忌もありはしない、今度所帶を疊むのも、其人の事が忘れられないから起つた事なのだけれど、那が所謂世間體だ、姻家の人たちの手前もあるわね。當今家を仕舞ふのは些と費生流過ぎる。因で恁したら如何。最少しの所家はあのまゝにして措くのだ、而して私の家へ遊びに來るさ——夕方から泊に來ると云ふやうな事にするのだ。甚だ億劫な話だけれど、外に爲やうも無いでね。主が一人に奉公人一人と云ふ家内で、主が毎晩泊に出かけるのも、條理の合はない譯で、實は隨分拙い智惠だけれど。是が姻家の方へ一所になると云ふのなら、それで又可いさ、仔細は無い。何しろ百箇日經たないと云ふのが氣になるね。」

葉山も之には大きに窮つて、我ながら拙い智惠より外には出ぬのである。柳之助も氣を挫かれて、言はれて見れば一々理がある。百箇日も經たぬ内に住居を移すさへ、成程如何はしく思はれるのに、其人と始めて持つた所帶を崩すのは、情に於て忍びざるのが當然であらう。姻家の方でも感情を害するに違無い、類さんも然ぞや怨に思ふであらう。切めては百箇日の法事を此で爲て、それからの事に、と又了簡を變へは變へたが、それと興に彼の失望は太甚しい。

（九）

一日でも早く退きたい家に、未だ此先凡そ六週間も居なければならぬと思へば、如何して暮されるであらう、と柳之助は途方に暮れたが、思返されぬ所を是非も無いと思返して、左も右も百箇日過ぎるまで待つ！とした所で、轉居は爲る、就いては其用意を爲ねばならぬ。今から六週間といふ日があれば、寧ろ十分に用意を爲るとせう。明日にも引越すやうに騒いでは見たが、實は何の用意も無いので。此暇に徐々と支度を爲るも可からう、と所爲事無しに氣を取直して、轉居の前に於ける始末と、後に於ける處置とに就いて、彼は百方考へたのである。

下宿に爲うか、葉山へ同居を爲うかの二事、是こそ第一着の問題でありながら、未だに決定してないのは迂濶であると、先之から極める事にして、考へたが、依然分別は着き切らぬ。十の八までは葉山に同居がしたいのであるが、唯お種と云ふものが可厭さに、好ましからぬ下宿と秤に懸けてゐるので、此は既に幾度も考へては、毎も分別が着かず仕舞で、其時になつたらば如何にかなるだらうで、抛却してあるので、實は今日に至るまで未だ行先は定らぬのである、それは定らぬが、轉居をするだけは確としてゐる。因で、彼は遡に定めかねる分別は後にして、容易に手の着けられる始末からと思付いて、一日元の針仕事をして

居る所へ出掛けて、

「お前急に一つ裁縫をしてくれんか。」

見苦しく取散した所へ恐多いと云ふ風で老婢は慌てゝ座側を片付けながら、

「甚麼な仕事でございます。」

「夜具だ。」

「お夜具？縫直すのでございますか。」

「いや、新しく縫ふのだ。」

老婢は「へえ」とばかりで、異しな事をと思つた。

「縮緬の夜衣と云ふのはあるかなあ。」

いよ〳〵異しいと思ひながら、

「へい御座います。」

「紋付は異しいかなあ。」

「へえ？」　と元は彼の問よりも未だ異い顔をして、縮緬の紋付か、夜衣の紋附か、其意が解り難て居る。

「紋の付いた夜衣だ。」

「如何な事でも……。」　と元は笑出した。此に葉山が居たらば、然でや呼吸の續くまで洒落のめした事であらう。柳之助は眉さへ動さず、

「然うかなあ。」　と老婢の笑ひ止むのを待つて、

「夜衣だから、紋が付いとつても誰も見やせんから管はんぢやないか。」

老婢は又可笑がる、

「私は又わざ〳〵御紋付の夜衣をお拵へなさるのかと存じたのでございますよ。」

「それは可笑いさ。」　と柳之助も始めて少しばかり笑つて、

「俺の言ふのは、夜衣の紋付よ。お前は紋付の夜衣だと思つたか。」

夜衣の紋付に紋付の夜衣、何方でも同じ事でありさうなものを、と老婢は又其が可笑〳〵て健か笑ふ。

「那樣に可笑いか。」

「旦那樣は本當に面白いことを有仰います、而してまあ何をお拵へになるのでございます。」

「紋付で夜衣を拵へるのだ。」

「へえ？」　と老婢は又解らなくなる。

「尋常の衣服で夜衣は出來るのかな。」

「何と有仰います。」

「一反あれば夜衣は出來るか。」

「然やうでございますよ。」

「然すると、尋布の衣服を解して、それで夜衣は出來るのだな。」

「然やうでございますよ。」

「それぢや拵へてくれ。」

「へえ。」　と元には未だ全然と會得めぬ。

「蒲團は如何だ。蒲團も出來るかな。」

「やつぱり御服でゞございますか。」

「然うだ、やつぱり衣服で拵へるのだ。」

「而して其は旦那様が御召になるのでございますか。」

「然う俺が着るのだ。」

元は慄然として、さあ大變！、旦那様は到頭お氣が觸れたさうなと、然う思へば此五六日別けて色澤の惡い柳之助の顏を、其と無く打目戍つては、眼色に氣を着けたが、變つた所も無いらしい。幸ひに未だ然ほど劇しくはないが、些少は確に違つてゐると見て取つた。

彼が二十年も前深川に所帶を持つてゐた頃、隣の長屋に髮結が住むでゐて、それの夫は蕊の者であつたが、是が不圖發狂した。その病の初發は、或日外から歸つて來ると、唐突に妙なことを言つて、氣味が惡いから一寸來てくれと呼れたので、直に行つて見ると、手拭を挈げて藥罐の中を覗き散して、もう少しだ〳〵と言つてゐる、容體に恁うと變つた所は無いが、唯眼色が可恐くなつて 戞々してゐた。狂人は何でも眼色で知れると云ふことを、其時人に敎へられたのである。

紋服を解いて夜衣を拵へる！藥罐を覗いて、もう少しと、餘り相違は無いと思ふほど、柳之助の顏を視る元の目は多少か常ならぬ色を顯して來る。

「何を俺の顏を那樣に視るのだ。夜衣は出來るとして蒲團は如何だ。」

「で旦那樣が其を召すのでございますか。」　と稍聲も顫へる。柳之助は一向無貪着に、

「然うだと言ふのに。」

「わざ〳〵御紋服を暴殄になさいませんでも、旦那樣のが那麼して歷然とお在なさるぢやございませんか。それから未だ奧樣のもお綺麗になつて御座いますよ。那樣に貴方御夜具なんぞは多度ございましたつて爲方がございませんよ。」

柳之助は耳聒しいと云ふ體で、

「可いよ。別に要るのだ。いづれお前にも話を爲るけれど、少し事情があるのだからまあ拵へてくれ。」

「へえ、それは拵へは致しますが、如何遊ばすので。」

「如何しても可いぢやないか。」　と少し〳〵聲が暴くなつたので、

「へい。」　と老婢は默つて了ふ。

此問答の末柳之助は佛間の小座敷へ老婢を連れて、押入の單笥からお類が大事の縮緬の紋附を出させたが、其は亡人が祝言に用ゐた、鳩羽鼠の被模樣で、質な更紗縮緬の二枚下着が附いてゐる。其更紗の質なのも、裾模樣でないのも、長く着られるやうにと、母親の心を籠めたのであるものを、未だ〳〵裾模樣も着られる齡で、其主は亡き數に入つたと思へば、形見こそ今は仇なれで、元は不覺に鼻を塞らせる。花橘の其ではないが、單笥を啓けると芬然と起つ麝香の香に、柳之助は胸迫つて、少時は主從とも言は無かつた。

「もう一枚、能く着とつた縞の衣服があるだらう、那を見せて〳〵れ。」

と柳之助は單笥の傍を離れて、座敷の内を歩き始める。

「あの絲織のでございますか。」

「絲織だか何だか知らんが、ぴか〳〵光るのさ。」

細い矢絣崩の、「おさすり」に着た絲織の小袖を出して見せると、其だと言ふ。さて縮緬の紋服は夜衣にして、絲織を浦團に爲る。出來るだけ早く仕立てるやうに、と重ねて誂へたが、爲を思つて飽くまで元は不

承知であつた。なるほど主の命であるからは、而して主の物であるからは、煮て食はうと、炙いて食はうと、おのれの横出る所でないとは知つてゐるが、當初に疑つた如く、此所作は如何しても正氣ではないと思ふから、如何に奉公人でも齡の手前唯諾々とばかり言つてはゐられぬ。まして姻家の母親などに對しても、這麼無法な事を爲しては合はす顏も無いわけと、口を極めて此思立を止めたのである。然し彼は既に止める時迚も止るまいとは覺悟した。何故となれば、恁云ふ無法を思立つほどに氣が狂つて居るからは、理非を聞分ける耳は得持つまいと思つて。が、左も右も止めるだけは止めて見て、聞分けたらば幸ひ、聽かぬやうならば、陽は畏まつて置いて、此始末を姻家の方へ知らせやう、と胸を定めて、さて止めて見たのである。

案の定言へば言ふほど氣色を損じて、

「お前が拵へるのが可厭なら賴まん、仕立屋へ遣る、俺が持つて行く。」

と例に無く息卷く具合、元は斷然其の正氣でない事を確めたのである。因で、然やうならば私が致しますから、と御意次第になつて、件の二枚を風呂敷に包んで、其を抱へて茶の間へ退ると、なほ跟いて來て、直に取掛れと逼る。元も之には弱つて、種々に言飾へたが、柳之助は傍に坐つて桿でも動かぬ氣色。又此で

運々してゐたら、引攫つて飛出しさうに見えるので、爲む方無さに澁々膝の上に紋服を披げて、鋏を持ちは持つたが、燃立つやうな紅絹の色と、好もしい染の香氣とに、目も眩れ心も消ゆるばかり、「勿體ない」で胸も張裂けるやう。餘り切無さの一寸通に、元は鋏を委いて、用ありさうに又紋服を把玩引廻して、襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限忸怩してゐると、其氣も知らず柳之助は、

「好い夜衣が出來るだらう。」

其尾に附いて元は再び懇々と掻口説いた、恁した立派な紋服をば夜衣などに爲て了ふことの暴殄と、姻家の親御樣に對しても辯疏の無さに、如何も鋏の刄が當てられぬゆゑ、之ばかりは思止るやうにと。

誠は面に顯れて、命乞でもするやうに、如何に老婆心とは謂ひながら、餘りの事々しさに柳之助も驚かされた。實に元は此を先途と面を犯して諫めたのである。爲に彼の心も動いて、なるほど年寄の身にもなつたら、傍に附いてゐて恁云ふ無法な事を爲せるには忍びぬのであらう、其とても究竟は此方の益を思ふから。左も右も事情を話さぬのが惡かつた、藪から棒に註文したゆゑに、如何するのかと吃驚したのであらう、とやうやう心着いたので、百箇日の後は此所帶を疊む事から、荷物は姻家へ還す一條、彼への形見頃まで具に聞

かせると、元の驚愕は益太甚しい。それでこそ紋服の一枚くらゐは引裂くのさへ無理は無いと思つた。事情を聞くほど、如何かしてゐるのではあるまいかの疑團は彌解けぬ。

なか〳〵紋服を暴殄にするくらゐな事ではない、もつと〳〵大きく氣が觸れてゐるらしい。其大きさは到底倔婆風情の手も口も出せる所ではない、いづれ姻家の親御樣も何とか言はれるであらうし、葉山樣も其曉には又何とか爲さるであらうからと、まづ〳〵手拭を掣げて藥鑵を覗くやうな取留らぬ所作の無いのを、元は其身の厄免にして、左か右か柳之助の言ふことが會得めたのである。然う思つて見れば、始から深川の隣のキ印のやうに眼色が變つてゐたでもなし、變な調子も無かつたし、世間で謂ふ發狂とは違ふ、女に溺つて譯もなく家藏を潰したり、慾に牽されて見す〳〵大損を爲る例と同しやうな、一時の迷とでも云ふのである、と其は其で釋然解つたとして、さて此を仕舞つて其から如何爲るのやら、有繋に其も聞きたい。

「それで、何でございますか、一先此をお引拂ひ遊ばして、暫く御勉强を爲さいまして、又何頃御家をお持ち遊すので？」

「それは今から解らん。」

「いづれお持ち遊ばすのでございませう。」

「もう面倒臭いから持つまいかとも思つとる。」

「それでも貴方、又奥様が御出になりましたら然うは……。」

と言ふのを柳之助は引手繰つて、

「奥様なんぞ來るものか！俺は死だ奥様の外に奥様は有りはせん。」

元も或物を引手繰られた心地で、柳之助の顏をば探すやうに眄して、

「では、もう奥様はお有ちになりませんので？」

「有つものか、一生有たんのよ。」

「一生お有ちになりませんので？」

「もし俺が先に死んで、奥さんが殘つて居つたら、元、猶且奥さんは一生寡で居るよ。然云ふ約束だもの、俺も一生獨で居るのだ。それだから一生忘れん爲に是で夜具を拵へて置くのぢやないか。」

彼の語氣は漸く沈んで、後は氣の腐つた太息をして、

「つまらんよなあ、世の中は。」と絲織の小袖を引寄せて、それを丸めて枕に仆れる。

元も其胸中を察して見れば、お可憐と思はぬではないが、男の口からは餘な言分で、樣子を知らぬ目には、同然手拭を挈げて藥鑵を覗くやうに見ゆるであらう。何處までも情の深いのには違無いが、深過るのも變なものと考へた。

「それは然うでもございませうけれど、女子は女子、殿方は殿方で別でございます。一生お獨では、それこそ御不自由で、迚も續くものではございません。昔から女子は操を立通しますが、殿方の然うまおりませんのは、女子の寡居で不自由なのは左か右かなりますけれど、殿方では其辛抱が出來ないのでございます。ですから、殿方は奥樣を二人有たうが、三人もたうが、誰も何とも申しは致しません。女子の方は爲れば辛抱の出來るものを、又外の男を有つては濟まない義でございますから、操を立てるが道としてあるのは、其處なのでございませう。」

之を聞くと柳之助は遽に起回つて、

「やあ、元はなか〳〵學者だね、こりや感心した、感心したよ。」

「あれ、可厭でございますね。」

「然う言ふ、世間では然う言ふのだ。然し、男だつて女だつて人間に差は無からう。男は不自由しては困る、女は不自由しても困らんと云ふ理窟は無いぢやないか、誰の不自由も同じ事だ。

世間の人はね、能く話をする時自分の細君の事を「嚊」などゝ言ふよ、ね、然う言ふ人が能く有る。それがお前、紳士とも謂はるゝ人がだよ。俺には如何いふ理だか那が解らんね。何ぼ自分の妻だからと云つて、「嚊」とは失敬ぢやないか。何で那樣に輕蔑するのだらう。俺は他が「嚊」などゝ言ふのを聞くと、「畜生」と言つとるやうに思はれて、不愉快で耐らんね。「畜生」と言ふのも同じぢやないか、那樣に輕蔑しとる細君なら、有たんが可いのだ。其等の人は一體如何云ふ精神で妻を有つとるのだらう。妻と云ふものを下女か何かのやうに考へとるのだ、それだから其細君が類さんのやうに歿なりでもすると、下女が出て行つたやうに直に代を迎ふ。而して其を當然のやうに考へとる、世間一般に。那樣方が有るものか！俺は然うぢやない、俺は妻君は朋友だと思つとるのだ、深切な朋友だと。實際然うぢやないか。」

直には後を續けぬので、元は間を合せて、

「然やうでございますとも。」

「然うだらう、然うさ、無論然うさ、二人と無い朋友だ。朋友が死んだと云つて、直に代が出來るかい、出來やせんだらう。下女なら幾多も代がある、其だつて、是は好と思つた下女の代は滅多にあるものか。猶更細君ぢやないか、其代が容易に……所が、全く有りはせんよ。」

「それでは有りましたならばお迎ひ遊ばしませう。」

柳之助は殿に頭を掉る。

「有つても迎はん！又有る理は無い。」

「それは御座いませんか存じませんが、若や御座いましても、お迎ひ遊ばしませんので？」

「うむ、迎はん！決して迎はんよ。それは不自由な事も知つとる、男は女と違つて、操を守らんでも可い事も知つとるさ、然し俺は他の者を奥さんに有つ氣は無いのだ。類さんの事は如何しても忘れられんもの、忘れられん間に有つことは出來ん、然うだらう。然し俺は一生忘れられんから、一生有たんと極めたのだ。」

既往の事を考へて見ると類さんには、非常に世話になつたのに、生きとる時ばかり大騒をして、其人が死ん

で了ふと直に忘れるなどゝ云ふ、那樣薄情な事があるものか。死んでも死なくつても、世話になつたのは世話になつたのだし、可愛いのは依然可愛いのだ、死んで了つたから如何でも可いと云ふ氣になるやうでは、本當の夫婦の情ではない。だから、俺は類さんは死んでも猶且生きとる時のやうに思つとる、一日だつて類さんの事を思はん日は無いよ。類さんが生きとる内俺が他の女を可愛がつたら、類さんは甚麽に慍るだらう。慍る慍らんは措いて、類さんは俺一人の事を思つとるのに、俺の方では他の者を可愛がると云つては實に濟まん義だ。那樣事が人情としゝ出來るものではないさ。可いかい、生きとる内でさへ那樣事が出來んものを、死で了つて居らんからと云つて出來るかい、死んだらば猶更氣の毒で出來んぢやないか。既に死ぬと云ふ事が可哀さうなのだ、親や夫やね、又那したい、怎したいと思ふ事を遺して、未だ二十二や約で死ぬ！這麽可哀さうな事があるものか。何爲に世の中に生れて來たのだ、唯だ悲い思を爲に來たやうなものぢやないか。其だけでもう十分可哀さうなのだ。」

ぽつたりと涙を零した、

「其上に俺が又他の者を嫁に迎つて、今まで類さんと一暮して居つたやうに面白さうに一所に居つたら、類さんの心地は甚麽だらう！屍に鞭つと云ふ語がある、死んだものを打のだ、酷い事の譬に能く言ふ。幾許怨が有つても、死んだものを敵手にするのは卑怯だ。死んで了へば怨は消へる、ねえ、怨が有つてさへ、死ねば線香の一本ぐらゐは上げて遣るべきだ。まして睦しくした夫婦ぢやないか、那樣氣の毒な事が出來るものか。如何なる不自由にも換へられんから、俺は一生獨身で暮す。死んだ上に夫は他に奪られる！這麽可哀さうな事があるものか。死んだのは如何も爲方が無いから、せめて俺れだけは他の者と夫婦にはならん、是が類さんへの寸志だ。類さんの死んだのに較べれば、俺が不自由するくらゐは何でもない。類さんが死んだから、俺も不自由する！」

元に話をしてゐながら、思迫る餘に半は獨語になつて、覺えず悲を漏すのである。元は挨拶に窮つて、

「御尤でございますとも。」

餘りと思ひながらも、理極めて哀さに、その意に悖ふことは折から言出されもせず、縮緬の紋服を暴殄にするぐらゐに止立を爲るも氣毒になつて、彼の鋏は惜氣もなく竟に小袖の襟の絲を弗と斷る。

（十）

お種はふと目を覺した。枕頭のランプの光は幻のやうに、添寢の保は餘念も無い顏をして小い鼾を立てゝゐる。何氣無く隣の寢床を見れば、安火を入れた夜着は人の膝を立てたやうな形をしてゐるが、枕ばかりで夫の姿は無い。はつと思つたが、居ない理、未だ歸らぬのであつた、晩い歸來であるが、それとも未だ時が早いのか、と起回つて枕時計を見れば、二時十分過。

二時過ぎたのに歸來の無いのは、今夜はもう歸らぬのであらうか。會社の方達と小飲に行くと夜の更けぬことはないが、理事の百瀨樣が御一所では、又大藝藝者などを呼散して、擧句は何處かへ……に違無い。交際も可し、問には御外宿も可いけれど、此頃は近所に能く火事があるし、又方々へ偷兒が入つて物騷だと云ふのに、恁云ふ時には可成早く歸るやうにして下されば可いのに、猶且醉うと面白くなつて、後では何も百瀨が所好だから敵はないなどゝ、好いことばかり言つて、御自分もお嫌ひでないのだから爲やうが無い。

外は風が凄じく吹捲る。

あゝ可厭だ、劇い風だ。

邊所の方でぴしり〳〵と柱などの干割れる音がする。何だか氣味の惡いと思ふ矢先に、ばたりと紙門に打當る物音。お種は慄然として息を凝したが、傳婢が轉側を打つたのらしい。

今は全く目も覺めて了つて、火事でも無ければ可いがなどゝ、案じ過して耿々してゐると、風の隙を潜つて遙に狸囃子が聞える。庭の軒端を颯々と風が何かに觸るのであるけれど、人などが忍むで屋根へ昇るやうにも想はれる。地虫の鳴くやうにランプはちい〳〵、時計は軋々、或は遠くに或は近くに、何とも付かぬ響が絶間なく耳に入つて、睡らうとしても落着かれぬ鼻頭へ、床の梅が香が芬々と來る。

睡られぬに就けて夫の歸來が待たれる。二時は過ぎたが、三時頃に歸つたことも無いではない。お歸來が有るか知らぬ、有れば可いが、賴に思はるゝ車の音さへ聞えぬ、巡査も巡らぬ、誰も通らぬ、卒然に二三羽の月夜鴉が啼立てる。

忌はしさに目を瞑つて凝然として居ると、忽ち戶外に跫音がしたのである。もしやとお種は蹶きまで被つた夜着の襟を寬げて、聽耳を欹てれば、其音は駒下駄で、はた〳〵と我門に近く樣子、さてはお歸來か、と胸を動悸させて、猶能く聽けば、夫の跫音ではない。夫の跫音でもないものが、益々近いて、遂に門口と覺しい邊ではたと停つたので、お種は背筋を氷で摩でられるやうに悚然として震へる。

停つたまゝで待ども〳〵動かぬ。

胸は早鐘を撞くように騒ぐのを、熱と怺へて益耳を澄してゐれば、やう〳〵動いて、其跫音は後戻をした、かと思へば又立返つて門口の邊に停る、放火か、賊か、二つの内！とお種は耐りかねて起きて見やうとしたが、其も可恐し、何か爲るまで打遣つても措かれず、如何したら可かう、と首を擡げて四邊を眺すと、夫の枕頭に煙草盆がある、煙管がある、是屈竟と引寄せて、氣立ましく唾壺を連打にして、

「えへ、えへん、おほん。」

後に又二つ擊いて、外の樣子を聞澄せば、何處から嗅付けて來たのか、はや二三頭の犬が必死と吠立てる。其聲に保が目を覺して泣出すのを、賺しながら氣を配つてゐると、最も善く吠へる犬は、一聲高く叫むで、健か打据ゑられた音、お種は寢んねんようも震聲で、斷然奥の阿爺樣を起さうと覺悟した、もう呼ばうか、さあ起たうか、と躊躇してゐる間に、外の曲者は聲を揚げた。

「葉山、葉山！」

是はと思ふ間も無く、徐に門の戸を丁々。犬は猶連に吠付くのを、逐ひながら又丁々。

「おい、葉山、此を啓けてくれんか。」

まづは怪い者でもなかつたか、とお種は吽と息を吐いたが、さて誰の聲やら記憶が有るやうでも、急には心當が付かぬ。左も右も寢間を出て、出窓の戸を一枚啓けると、外は眞晝のやうな月で、眩さに顔も向けられぬ。颼と吹込む風は折角の寢温を餘さず搔攫つて、殆ど絶えも入りさうな寒さ。格子の間から斜に覗けば、踏張つて唸る犬、退歩しつゝ吠ゆる犬、餘り吠えて勞れたらしい犬、見えるのは犬ばかりで、人の姿は隱れて、但其影法師が長く地に曳いて眼前に横はつてゐる。

「何方でございます。」　と聲を懸れば、其影は動いて、

「あゝ、驚見です。」

記憶のある聲と思つたお種は、と聞いて少も疑はぬ。

「おや、大相お遲く」　と言ひさま閑然と戸を閉てる。

犬は未だ慊かずに吠切る。柳之助は例のステッキを揮つて又一つ吃はせると、見事に外されて、發矢と大地を撲たされる、戛然と落して、

「あ、痛……っ、」　と手を振るやら、嘘〳〵やらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」　とお種が顔を出す。

「今犬を撲失つて、手を撲つたです。」

列々にステッキを拾つて、門を入りながら、

「遲く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしまして。」　と閉鎖をするお種の横顔をば、身近に置いてあるランプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側に突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！その無愛想が艶然としてゐるやう。その艶然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顔をしてゐた。

閉鎖をして了ふと、お種はランプを把つて前に玄關を上りながら、

「此方へ入らつしやいまし。」　までが、一向入らつしやいではなくて、逐出すやうに聞える。其後に跟いで、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて。お種は直に次の間の閨へ入つたので、外套を着たまま寒さうに立つてゐたが、此時氣が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん〳〵沸いてゐる。もう三時

だと云ふのに、恁して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は隨分種々な事を識つて居つて、種々な事を爲る男だから、是も亦自ら用ゐる所が有るのであらう。今に聞いて見やう、と自分は燈をさへ消して寢るのに、湯を沸してあるには、何の爲かは知らねど、その用意に驚きながら、冷たいと痛いで痺れる手を鐵瓶の胴に摩擦けて、葉山の起きて來るのを待つてゐたのである。お種の寢間へ行つたのは、葉山を起しに行つたのとのみ柳之助は想つてゐる。旋てお種は寢衣の上に銘撰の不斷羽織を引被けて出て來る。

「大相お遲く、何方の御歸で。」　とお種は火鉢の前に坐ると、直に鐵瓶を下して、馳走ぶりに火を撥げる。

「家から來たです。」　とばかりで柳之助は寢間の方へ氣を奪られて、一向葉山の起出でる氣勢のせぬを待遠うがつてゐる。

「おや、然うで。」　とお種は炭を加いで、側に布巾を被げた盆の在るのを引寄せながら、

「何ぞ急な御用でも？」

「いや、別に……。」　と可成く話を避けるやうに過ひながら、葉山の起きて來るのを待つたが、寢間

はいつまでも閑寂として、誰の起さたらしい音もせぬので、

「葉山君は未だ起きませんか。」

「今晩は留守でございます。」

「えゝ、留守？」

柳之助は失望する前に先づ一番吃驚した。

「未だ歸りませんので。」

柳之助は目を圓くして

「はあ。」　と言つた口を塞ぎかねた。

「今晩は歸るまいかと思ひますが。」

「はあ、然うですか。」　と姑く茫然としてゐて、氣の抜けた時分に、

「何方へ？」

急に旅行でもした事と思つたのである。

「會社の方達と會飲のだと申して、下谷の方へ廻つたのでございます。今まで歸りませんから、今晩はもう歸りますまいと思ひます。」

「はあ、然うですか。」　と未だ呆れた顏をしてゐたが、

「何方へ泊られたのですか。」

隨分尋ねても行きかねまじき柳之助の景色、行かうと行くまいと、其は別にして、此答にはお種も窮つた。言へば妬くやうでもあるし、第一褒めた話でもない事を聞かせるも耻かしい譯、是まで言つたらば大概解りさうなものを、解らぬほどの人に聞かせるのは、猶の事好くないと考へて、其近處の朋友の家へ醉つて轉込むだのであらうと云ふやうに話して置くと、柳之助は渡に舟を失つた心地で、

「はあ、然うですか。」　と言ひは言つたものゝ、歸らうか、待つて見やうか、何と爲う、

「窮つたな！」　と頭を搔いて、又少し思案して、

「窮つたな！」　と太息を吐く。

「急な御用でございますか。」

「いや、別に何ですけれど……。」　と言ふ傍から兩手で頭を犇と抑へて、

「窮つたな！」

それほど窮るならば用の有りさうなものを、今に始つたではないが、變な人だと思ひながら、此夜深に來たのは切迫の事であらうに、と折惡い留守が如何にも氣毒で、せめては何とか歓待をしたいと切に考へながら、先づ出來たので新煎を出す。

柳之助は心を空にしてゐる體であつたが、出された茶をがぶりと飲むで、

「それぢや歸りませう。」　と外套の釦を一つ繫けて、未だ十分躊躇してゐるのは、如何にも用有りげに見えたので、お種は又推して訊ねると、彼の答は前の如く「いや、別に。」であつた。それならば直に歸りさうなものを、自分を對手に爲るでもなく、其事でも思案してゐるらしい樣子で、いつまでも遲々してゐる。

次の間の枕時計が四時を打つのを聞いて、柳之助は持つた帽子を側へ投出して、

「貴方もうお寢み下さい。」　と仕舞つた卷莨入を出しかける。お種は寢衣に羽織で、肌淵の寒いこと黙しい、幾度と無く緊々と襟を掻合せては、身頭の出るのを怯へ〳〵てゐたが、

「いゝえ、どうせ目が覺めて居りましたのですから。」

「然うですか。」　と柳之助は其氣で莨を吃してゐる。話は無し、所在は無し、唯惡寒いばかりはお種も辛くて、

「もうお遲うございますから、お泊りなすつていらつしやいまし。丁度拙夫の床が暖まつて居ますから、那を此方へ持つて參りますから。」

好いた人は居ずに、好かぬ人ばかりの内に泊る氣は無い。然うかと云つて、是から家へ歸る元氣は猶無い、家に居るのが可厭に此夜深に飛出して來たのである。然し當にして來た人が不在であるからは、歸るより外は無いが、わざ〳〵此寒さに歸つた所で、甚麽ものであらうと思ふに就けて、今のお種の言が身に沁みる。

「どうせ目が覺めて居る」と言つた。夫の歸を待つて目を覺して居たのであらう。「拙夫の床が暖まつて居る」と言つた。氷のやうになつて歸つて來るであらうからと、其支度をして待つて居たのである。此に火の熾してあるのも、湯の沸いてゐるのも、皆夫の歸を待つてゞある。恁して十分に用意のある所ならば、歸るにも歸へ榮がある。自分は歸ると、元が寢惚けて戸を啓ける、臺所ラムプを假りて眞暗な座敷を通つて、微寒い

階子を昇る、二階はランプが陰々點いてゐて、火も無ければ湯も無い、座敷の眞中に茫然と床が一つ敷いてある、煖まつてゐるどころか、鐵の板のやうに冷たくなつてゐる。此寒いのに那麼處へ歸つて行かれるものか。

類さんが居たらば、恁云ふやうに支度をして待つて居るであらう。其を想ふと柳之助は忽ち恍然として姑く心の樂まされて居る間は、我前に人の脛を忍んで縮に寒に震へてゐるのも忘れてゐたが、ふと氣が着けば、待つ人は無い！待つてくれる人には死なれたのである！自分を待つ人は亡くなつて、他のは恁して無事に居ると思へば、可羨しいのか、憎いのか、好かぬお種の姿も不覺に見られる。

彼は長年此家に往來してゐる事であるから、可成會はぬやうくとは爲てゐたものゝ、主の妻であつて見れば、萬更會はずにも濟されなかつた。會ふことは數知れぬほど會つたが、傍に出て居られても、早く行けかしと思ふばかりで、目を着けて浸々視るほどのことは無い。又他から見るやうなれば見られぬやうにして了ふので、可恐いものは見たさであるが、可厭なものには誰しも傍目も轉らぬ。見ることも見られる事も、柳之助は快しと爲ぬのである。今夜ばかりは不思議に例の可厭でもなく、然かと云つて別に如何と云ふ氣のあ

るでもなく、究竟お種なる虫の好かぬ妻君ではなしに、或一個の女子に對する心地で、其顏なら容なら樣子なら、思はず識らず目を留めて視た。今夜見るお種は彼の平生考へた葉山の妻ではない、葉山の妻は昂然として、憐憫の無さゝうな、何處かに圭角のある、男らしい理窟でも言ひさうな、一から十まで彼の氣に適はぬものであつたが、今夜のお種は信に靜淑に、弱々とした所も見えて、不相變愛嬌も世事も無いが、更に憎むべしとも覺えぬ迄に、女らしく可憐であつた。其所爲か又美しくも見にた。固より醜い容色ではない、人に依つたら輕々しく美人と言ふかも知れぬ、色も白し、目鼻立も揃つてはゐる、が、自分は決して美しいなどゝは思はなかつたのが、今夜は左も右も美しいと可されたのである。何故に然うまで變つて見えたのかは、柳之助も自分ながら解らぬので。洗晒した小豆色のフランネルの單衣に襟を懸けた柳條の布子を重ねて、紫太織の細帶を緊めて、寢亂れた襟は寛け勝に胸の白いのが覗かれる。天神の鬢が少しく縺れて、萎えたやうな肩狀をして、何處と無く取締無く、寒さうにしてゐる姿に、夜闌の燈の射した所は、格別好く見えたのである。

柳之助がお種を見る時は、毎も神々しく髪を結つて、服裝を整然として、一寸座るにも勿體臭く、專ら奥樣

として見識を取つてゐる最中のみであつたから、此人に這麼柔い樣子の有らうとは實に想も着かず、之が大きに柳之助の目には美しく見えたのである。

猶彼の心を動したのは、夫を待佗びて目を覺してゐたのと、床を煖めて、湯まで沸して待つてゐるのと、其までに爲てゐながら夫の今に歸らぬとで。其胸の中を思遣れば、明日は知らず今夜の所は不便の人でならぬ。自分は歸つても誰待つものは無い人、お種は待つても歸られぬ人、大小の差こそあるが、心細さは似たものである。自分は一度たりともお類さんに怎云ふ思を爲せたことは無いが、之が類さんであつたら如何するであらう。

柳之助は獨りで考へて獨で益不便にして了つて、何とか慰めて遣らなければ心が濟まぬやうに覺えて、

「どうも居るものが居らんと寂しいですなあ。」　と取着も無く言出した。

「然うでございますよ。貴方も然ぞ種々御不自由で在つしやいませう。未だ些の昨日のやうに思ひますけれど、もう廿日許で百箇日にお成なさるのでございますねえ。」

「然うです。」

「然ぞ御不自由でおらつしやるだらうと思ひましてね……。」

「不自由は可いです、唯寂しくて、寂しくて、それが如何も敵はんですね。葉山君は何ですか、今夜のやうに他で泊られる事が折々あるですか。」

お種は寂しげに笑を洩して、指環を拈りながら微に俯いた。

極の惡い時、言出し難い時、指環を拈りながら其を瞞めるのは、お類の癖であつた。其の謂はれぬ可愛らしい樣子をば、葉山の妻に見せられやうとは、甚麼事にも思設けなかつたから、柳之助は殆ど其人のお種であることも、恐くは自分の柳之助なることも忘れて、心のみ怪しげに衝跳いた。

偶には内を空けるが、其は交際で如何も爲方が無い、とばかりでお種も深くは言はぬ。因で話は切れて了つたが、四時も半となるのに、柳之助の歸る氣色は無い。お種は益寒くはなるし、少しは睡くもなるに、假初にも客であれば、一人置放にして御免を蒙る譯にも行かず、泊れと言へば、今にも歸るやうなことを言ふし、如何にも手を着けかねて困じ果てた。

柳之助は又、午前と午後とを取違へてゞもゐるやうに優々と坐り込むで、それで怎と話のあるでもなく、睡

くもないから不如此儘夜の明けるを待たう、と云ふ了簡でゝもあるらしく唯兀然としてゐる。

此寒いに歸りたくもないとならば、泊りさうなもの、泊るが好ましくないならば、面白くも無さゝうに惘然としてゐずとも、列々と歸りさうなものを、行きたくもなければ、泊りたいでもない鹽梅で氣の重さうにしてゐるのは、何で心の落着かぬ事が有るに違無い。其でこそ此夜更に故々尋ねても來たのであらう。左も右も葉山に逢つて歸らねば氣が濟まぬので、恁して何方付かずに遲々してゐるのとお種は考へたから、切めて話でも無くては彌敵手をしてゐられぬので、又其事を訊ねて見る。

二度まで柳之助は「いや、別に。」で紛らして了つたが、今度はやう〳〵褻みかねた體で、

「用ではないです。用ではないですけれど、……實に僕は弱つたです。」

と泣出しも爲さうに見えたので、お種も驚かされて膝を前めると、折から鷄が啼立てる、其にも管はず柳之助は家を飛出した仔細を話し始める。

成程彼の言ふ如く、用事ではない、然し尋常一樣の用事よりは未だ厄介な、久しく打絶えてゐた夜半の寢覺が今夜卒に再發して、而も其が從來ついに覺にぬほど、寂しくて、心細くて、抑へても〳〵曳入れられるやうで如何にしても内には居耐らなくなつて、寒いも夜深も考へる遑無く、寢衣の上に外套を引被けたまゝで颯然と飛出して、實は來る氣も無しに來たのであると。

お種は唯呆れるばかり！一體那樣事が有るべきものだか、何だか、皆無腑には落ちぬので。餘程變な人もあれば有るものと、却つて念にも懸けず輕く聽いてゐたが、柳之助は尋常ならぬ氣色で、その心細い家へ還る氣力は無いらしく見えたから、いつそ泊めたが可からう、とお種は獨斷にして、夫の寢床をば此方に移して、須曳夜も明けるゆゑ、暫く横になるやうに勸めたのである。すると柳之助は何と思つたか、衝と起つて、

「いや、歸りませう、僕は歸ります。」

（十一）

翌日の點燈頃柳之助は又尋ねて來た。葉山は此から一盃飲まうと云ふ所で、茶の間の火鉢の傍に膳を控へて、鯛の澆乳羹を沸々いはせながら、柔かい褓を引被けて、全然冬籠の支度の出來た所を、今更起たせられるのも辛いと、奥へ通されるのは嫌ひの柳之助とは知りながら、幸ひ誰も居らぬから此へ、と婢に案内をさせると、可恐可驚と云ふ態で入つて來たが、葉山一人で妻君は見えず、燗の世話なども自分で爲てゐるのを、

希しげに眺して、

「お寒う。」

「いや、お寒う。今旨い物が出來る所さ、まあお坐んなさい。」

「遊びに來たよ。」　と柳之助は外套のまゝ火鉢の前面に跌坐を掻く

「昨夜も來たさうだつたけれど、生憎留守で。」

「君は何處へ泊つたのだ、」

「好い所さ。」　と葉山は片笑みながら鐵瓶から德利を引出す。

「何處だい、好い所と云ふのは。」

毒見をしたのを柳之助へ差して、

「情人の所さ。」

「情人?!」　と稍愕然とした體で、

「怪しからん！虚だらう。」

「虚な事があるものか。」　と葉山は眞顏になつて見せる。

「怪しからんね！其は何處だ。」

「聞いて何に爲る。」

柳之助は呷と塞つて、

「何にも爲やせんけれど、唯聞くのさ。」

「漫然情人の所なんぞが敎へられるものか。」

「何故？」

「財の在所を云ふのも同し事で、物騷だからね。」

「馬鹿な！」　と柳之助は苦り切つて、然も衝付けるやうに盃を返して、

「虚なのだらう、君、ねえ、本當の事を言ひたまへよ。」

「で、もし本當なら如何する氣だね。」

「那樣事を！無論僕は默つては措かん。怪しからんぢやないか、情人なんて何か。君は妻君が有るぢやないか。

妻君を何と思つとるのだ。」

眉を昂げて詰りかければ、

「是は難しくなつた。ぢや情人は虚で、實はと行かう、實は、欲過ぎて朋友の所へ踏り込むで了つたのさ。」

「それぢや可いけれど、家を空けるのは止し給へよ。」

葉山は笑ひながら頭を抑へて、

「畜生め、昨夜細君から頼まれたな。」

「何を？僕は何も頼まれやせんよ。」

「お種が宜しく申しましたよ。」

逸早く柳之助は勘違をして、

「妻君何所かへ行つたの。」

「何所へ行くものか。今朝から奥に寢て居る。」

「寢てゐる？如何してね。」　と少しく慌てれば、葉山は故と萎れながら、

「病氣でねえ、困つたよ。」

「病氣？本當かい、君、風でも引いたのかい。」

「なか〳〵。」　と葉山は苦々しさうに首を掉る。

「甚麽病氣だよ。」

「なか〳〵。」

「だから甚麽だと言ふに。」

「大病！どつと寢に就いてゐるのさ。」

有繋に柳之助は眞僞を疑つて、葉山の顔を眺めたが、其額には何と書いてもなかつた。

葉山は鍋の物を椀に取分けながら、

「而も其大病は君ゆゑさ。」

「君は何を言ふ？僕が知るものか。」

「君は知らない？然うかい、それぢや君の所爲ぢやないのだらう。して見ると誰だらうな、昨夜遲く來た客

は？今朝の天明まで居たのは。」

と諷詆られて、柳之助は躍起となる。

「僕さ、それは僕だらう。」

「あ、君かい、それぢや依然君だ。」

「僕は妻君を如何も爲やせんよ、怪しからん！」

「何ぼ阿多福でも、豈敢に君が今戸燒の火入と間違へて、蹴付けてお出額を打毀いた義ぢやないさ。けれども君のお合手を爲てゐたらう、ねえ、それで到頭風を引いて、今朝から頭痛で、眩暈がして、惡寒がして、鼻が塞つて、苦しがつて唸つてゐるだらうぢやないか。成る程風を引いたのは自分の洒落さ、然し引かせたのは驚見柳之助君だよ。さあ、それだから切めて見舞にでも行つて遣り給へ。這麼苦しい思を爲るのも驚見さんの御陰だと、今朝から言續にして君を怨むでゐるから、浸然飛込まうものなら啖ひつかれる、用心をして行き給へ。」

僞を八分に聞いても少しは懸念の氣味で、

「那樣馬鹿なことを！」

「僞と思ふなら、行つて啖ひつかれてお出なさいな、手前は知らないから。」

啖ひ付くは、葉山が例の滑稽にしても、風を引いたのは、何やら信らしいので、柳之助は氣を變へて弱く出る。

「それは濟まん事を爲た。實は僕もね、那麼夜深に來ては迷惑だらうとは思つたけれど、實際内に居られんだつたものだから……惡かつたね。君が居ると思つたから來たのだけれど……。」

「知れた事さ、丑の時詣の行く時分に亭主の留守を覗つて來れば……。」

「何時僕が覗つて來たよ、失敬な！」　と柳之助は眞に成る。

「何時僕が覗つて來たと言つたよ。他の妻君を病氣にして置きながら、逆捻を吃せるのは手嚴しいぢやないか。」

と聞けば又氣の毒になつて、

「本當かい、君。」

「偽だと思ふなら奥に寢てゐるから行つて見るが可い。」

「それは僕は濟まん事をしたなあ。」

「君は誠に濟まん事を爲たよ。」

と不知しく爲れるほど、傍に居るのも奇痒いやうで、何と挨拶を爲たものであらうか、と大きに柳之助は氣にしてゐるのを葉山は其と横目に見ながら、ちびり〳〵と飲みかける。

「君、濟まん事を爲たね、僕は。風邪は氣を着けんと可かんよ、妻も初發は風邪だつた。風邪は一寸した事のやうに誰も思つとるけれど、多くの病氣は風邪からだよ。それは早く藥を飲まんと可かんね。」

彼は意を留めなかつた浴後の風邪が因で、最愛の頬さんを亡つたのであるから、今お種が風邪と聞いたのは心の痛と聞いたよりも、膀加答兒と聞いたよりも、なか〳〵死に近い病であるやうに、忽せならず可恐しく覺えたのである。

「體は大事に爲んと可かんよ　人間と云ふものは割合に脆いものだ。」

と後は何か物の見えるやうに柳之助は眤と壁を瞶めてゐれば、葉山は一寸振向いて、

「旦那、お吸物が冷めます。」　と言ふのを現に聞きながら柳之助は超然と座を起つて、

「一寸僕は行つて來やう。」

「何所へ行くのさ。」

「妻君の所だ、僕は見て來る。」

「御見舞かい、それは御奇特な事だ、……は可いが啖ひ付かれるよ。」

「可い、もう那樣言。何處に臥とるのかね。」

「本當に行くのかい、是は不思議だ。君は始終來ても家人に會ふのを可厭がつてゐるぢやないか。二十九歳になつて人見識を爲る人ぢやないか、その驚見君が如何したものだ、寒いから雪でも降らなけりや可いが。」

「行つちや異しいかな。」　と葉山の膳を見下して杉立に立つてゐる。

「何が異しい事があるものか。それが禮なので、從來の方が餘程異しくて御在なさる。」

「然うだらう、だから行くのだ。それに君は僕の爲に妻君は風を引いたと言ふぢやないか。」

「いや、それぢや自分が風を引かせたから見舞に行くので、然も無ければ死ぬほどの大病でも訪ねてほくれ

ない氣かい、不實なものだ。」

と横を向いて飲むでゐる。

「決して那……那樣事は無いさ。まあ行つて來やう、何所だか敎へてくれ給へ。」

葉山は婢を呼むで、案内を吩咐ける。其に續いて出たかと思ふと、直に柳之助は入つて來て、慌忙しく外套を脫捨てゝ行く。

奥の六疊へ伴れられて、婢の紙間を啓ける途端に内を覗くと、絹中形の大夜着を山のやうにして、お種は腹這になつて、枕頭に保を据ゑて、襁子の面を被つて首を掉つてゐると、保は千菓子の松葉を面の口へ擬つて面白さうに遊むでゐたが、

「奥さん、お客樣が。」　と婢が通じると、お種は屹と振向いて、思懸けぬ面色で黯い紙門の外を見込む目前へ、柳之助が衝と顯れたので、

「まあ是は。」　と夜着を撥斥けて、早速襟の上に居直ると、保は呆れた顏で、盱々した目をいと〻圓くして、知らない小父さんでもないが、無氣味さうに視てゐるのを、婢が紙門の外から手招を爲れば、彼面と菓

子を容れた紙の鞄を手早く引抱へて、壁を蹴立てゝ逃げて行く。

「どうも這麽に取亂して居りまして、大變失禮でございます。」

「はあ。」　と應けた限で、莫は外套の衣兜に入れて置いたも忘れて、有るたけの衣兜を捜廻して、やうやう手に觸つた手巾をば切めて曳張出して、出たくもない洟を去む。

「昨晩は又失禮を。」　と實は此方から言ふべき所をお種に先を越されて、彌引込むでゐられず、

「いや、私こそ失禮しました、御病氣ださうですな。」

「いゝえ、何有ちよいと風を引きまして。」

「昨晩お引きに成なつたのださうで、どうも實に僕は失禮しました。」

「いゝえ、貴方、お午後にお湯に參つて、一寸寒いと思ひましたら、それから頭痛が爲出しまして。」

とお種は取繕つて言ふ。

「はあ、然し御氣分は如何ですか。今葉山君に聞きましたら、大變そのお惡いのださうで、僕は心配しました、ですから一寸お見舞に。」

と又手を背廣の衣兜に入れたが、莫は依然無い。お種は帶の緩さに前の直に亂次なるのを、氣にして正しながら、

「それは如何も恐入りました。何有もう些の鼻風なのでございますよ。葉山が那樣事を申しましたか。」

「はあ、昨夜僕が晩く來た爲に貴方が風を引いて、今朝から唸つて居る、と然う言ふのです。」

お種は笑つて、

「偽でございますよ。」

「偽ですか、あ、偽ですか！」

「もう始終冗談ばかり言つて居ります。」

「然し、風邪は注意せんと可かんですな、藥は？はあ、飲みましたか、それは一番可いです。死んだ妻は藥は大嫌でした、究竟其が爲に死んだと謂つても可いでせう。初發は風邪でした。實際風邪は總ての疾病を誘ふですね、それだから注意せんと可かんですよ。一寸した風邪なので僕も那麼には思はんでした、それに妻は能く不斷風を引いたですから、自分は勿論、僕も大した事は無からう、と平氣で居つたのです。」

忽ち打つて變つて柳之助の喋るのにお種は驚いた。

「其が失でした！輕い内に滔々藥を飲ましたら、何でもなかつたです。貴方は善い、貴方は善い！藥をお飲みなさるから善い、妻は其藥が嫌なのだから爲やうが無いじやありませんか。ですから僕は喧しく言つたです、然すると直に慍るです……から好加減に爲て措いたですけれど、僕も不注意でした。本當に貴方も注意を爲さいよ、體は大事に爲なければ成ならんです。死んぢや可けません、死んぢや大變です。もし明日になつても癒らんやうだつたら、醫者に診せるが可いですね。

葉山君は平氣で酒なんど飲んで居るけれど、僕は心配でならんですよ。妻も同然風邪からですからね、而して同然湯に行つてからです。那樣事が似とるですから、僕は何と無く不愉快です。」

未だ何か言ひたいことが有り氣に、柳之助は熟と首を傾げて居る。お種は遂から努めて起きて居た爲に少し頭痛がするので、柳之助の手前其とはなしに片手で額際を揉みながら、

「いろ〳〵御深切に難有うございます。」

柳之助は忽ち見着けて、

「あ、頭痛がしますか。お寢みなさい。」

「いゝえ、何有。」

「お寢みなさい、え、お寢みなさい。」　と起つと跌けて、茶托ぐるみ茶碗を蹴飛して、傚々とお種の褥の裾へ廻つたので、何を爲るのか、と逃身になつて見てゐれば、夜衣を扛げて、

「お寢みなさい。お寢みなさい。」

「あれ、まあ飛でもない！貴方何卒……。」　とお種は身を揉むのに、柳之助は獨會得むで、

「何有、可いです、お寢みなさい、被けてあげます。」

「では御免を蒙つて、私は横になりますから、何卒貴方それだけは……折角でございますけれど。」

とお種はやう〳〵の思で彼の手から夜衣を引放す。

「はあ、然ですか、それぢや……。」　と調子の外れた顏をして、柳之助は悄々座に復つたが、座るか座らぬに、

「ぢや又、……お大事に爲さい。」

と魚膠無く起上るのを、お種は機嫌を損じたと見て、實は頭痛がして早く行つてもらひたいのではあるが、義理にも留めずには居られぬ所で、膝の上に引附けてゐた夜衣を拂戾けて、

「貴方、まあ宜しいではございませんか。」　と孽の端まで身を進める。

「はあ、難有う。又……。」　と逃げるやうに柳之助は此を出て、茶の間に還つて見れば、盃盤狼籍として葉山は既に櫻色の機嫌。

「如何したい、啖付かれも爲なかつたかい。」

「那樣事はない。」

「そりや、まあ結構だつた。餘り長いから如何したかと、實は今君の御見舞に出掛けやうと思つた所さ。でも能く這麼に長く居られたね、捉まつて話込まれたのかい。」

「いんや。」

「默然で唯だ睨競かい、あゝ氣の利かない！」

「いんや。」

「然うでもない？ぢや甚麼だらう。」

「病氣の事に就いて種々忠告をして居つたのだ。」

「君が？」　と葉山は眉を皺めたが、

「ふむ、不思議だ。何しろ、女と應待を爲るのは、どうも照れて可かんものだ。私などは極臆面の無い方だが猶且窮るね。それを君が今まで繋いだのは感心したものだ。

いや、毎も言ふことだが、恁してお互に兄弟のやうに爲してゐながら、細君には他人行儀なのは面白くない、是非殿様同様にお見識り置かれて、末長く御懇意に願はなければ非さ。能く世間に在るぢやないか、獨者の内は仲を善くしてゐたものが、所帶を持つと妙に違かつて、毎日のやうに往來をしてゐたのが、段々と御無沙汰になつて、結局には年始だけの顏出になるよ。それから其先が、到頭一錢の郵便はがき一枚とまでなるのは酷からう。お互に何かまあ端書にはなりたくないぢやないか。

それに、甚だ意氣地の無いやうだが、他が妻君を持つと、何と無く其家へ行難くなる奴さね。と云つて、持

參附でもなければ、御臺所を持つて來て居るのでもないのだよ、それなら別に妻君に對して遠慮も糸瓜も無さゝうなものだけれど、其處が妙さ、道は生きながら山の神とも崇められる德が有ると見えて、十七八の可愛らしい娘でも、頭に圓い髷を載せて火鉢の前に端然としてさへゐれば、さあ諸の出入る惡黨輩は戰慄いて私のやうな益友までが自と氣兼を爲るよ。そこへ行つて長尻をしたり、夜を更したりさ、就中時分時に落着拂つて、其擧句が引張出しの、其晩が旦那樣晩歸などゝ來た日には、神罰は忽ちだね。

君などは然云ふ事は御心得はあるまいけれど、妻君と云ふものは何處のでも必ず一册づゝ、親にも見せないと云ふ、それはなか〳〵嚴しい帳面を皆須むでゐるものだよ。にゝ、妄ぢやないとも、搜して見給へ、お類さんのもあるから。その帳面と云ふのが、名を聞いてさへ凄然とするね。」

葉山は我面白に調子付いて、

「何と書いてあるかと思ふと、可いぢやないか、「屹度覺帳」！「屹度」が面白い。此二字の裏に、伸上つて、えゝ悔いといふ妻君の顏が見えるやうだ。」

柳之助は一向氣の乘らぬ顏で、

「その帳面は何だい、君。」

「おゝ、その帳面、その帳面には第一に、内の亭主を引張出す遊蕩友達、來ると飯を食つて行く客ね、一寸貸せを言つて來る奴、其外亭主の醉つて歸つた晩、内を空けた日、怪しい手紙の來た日、などゝ云ふ所を一一記けるのさ。別して、家の不爲になる友達の名は、洩無く留めて置く爲の帳面だから可恐からう。何の爲に留めて置くかと云ふと、それ、そこが「屹度覺帳」だ。此御帳面に留められた奴が、其次に踽々行かうものなら慘憺！輕い所で、異う諷詆られの、少し重いと、顏色を爲れます。一遍お帳面に留められたが最期、もうそれからは行く度に冷遇を蒙るのだから、有繋に誰も行く氣は無くなるわね。因で自然と足が遠くなる、すると、其奴が屹と他へ行つて吹聽します、誰某の家へ行くも可いが、あの嗅が左衞門尉胸惡だから面白くないとか、見たくでもない不見識な面を爲てゐるとか、是が又亭主の名折にもならうと云ふ一件だ。那樣評判でも立つと、來て差支の無い人までが自と來なくなる態。然かと云つて、是が何も、女慧うして牛の肉と馬肉と間違へた義ではない、お帳面に記けられる奴の方が重々惡いのだけれど、一寸聞くと妻君の爲方が善くないやうに言はれるのは、そこが女子の損、罪の深い所なのさ。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、所帶を持つた日には、から意氣地は無いのさね。幾許才子だの色男だのと頤を撫でゝも、それは阿爺のソップを啜つてゐる時分の太平樂で、筍と笹折を挈げて親睦會を拔けて歸ると、貴方また差配が來ましたよ、などゝ脅迫されるやうな始末ぢや、萎縮ずには居られないよ。何と云つたつて、獨身の内のやうに氣散は無いのさ。割前で蕎麥を食つて、歸りがけに、一寸その時計を貸し給へ、などゝ云ふ鹽梅に物事が手輕に行きません。それが一つは交際の疎くなる發端で、お互に育つて、いつか鼻の下に髭でも生れば、何か紳士のやうな面にも見える、いや又銘々も一廉の紳士の氣さ。因で種々外飾もあつたり、言はれない内情も出來たり、彼此生活が複雜になるに就けて、隔離の出來るのは、實は致方が無いのだ。然し今の「覺帳」の一件でね、牝鷄の禍を爲る所も大きに有るのさ。其が又所帶の方から謂へば、爲筋にもなる所だから、帶になれば褌には長しだ。だから考へたね、家に女房あるはさ、恰も庭續に畑の有るが如しだらう。それ、畑には培養をしなければ物は生りません、培養をすれば庭の方が臭くて耐りません。此理窟だよ、女房は庭續の畑さ。臭いからと云つて、それで畑を棄てられもしまい。どうで匂ふものと諦らめて、芋と來たら鼻を撮むまでの事さ。

所が君などは臭いのに恐れて、全で寄付かないから拙いよ。珍しさうに吹聽するまでの事は無いが、夫婦の間は魚と水との如しさ。君などは別して睦しかつたから、穴と鰻との如しだつたよ。亭主は動き廻るから魚だ、内君は澄してゐるから水だらう。その魚を求めるのだよ、人と交際を爲やうと云ふのは、魚を求めるのに水を恐れて如何なる。何處までも水理を會得むでゐて、因で始めて魚も獲れるのぢやないか。

噫、息が切れる。」　と忙しさうに茶を一杯飲むで、

「さあ魚が水を得たから勢を增したぞ。因でだ、君も是からは、冷たからうけれど水にも入りさ、臭かつたらば鼻も撮むでもらはなければならない。と言ふと、何だか私が酷く細君に恐入つてゐて、君が常住來るのを細君が陰で可厭な顏でも爲る所から、その禁厭に些と胡麻を摺つて置いてくれ、と頼むやうに聞にるけれど、那樣不見識なのぢやないよ。實は從來度々言つた、けれども君が聽いてくれないから諦めて居たのだけれど、昨夜と云ひ、又今見舞に出掛けた手際と云ひ、如何して隅へは置けません。不斷其呼吸で遣つてもらへば何の事は無いのだ。遣れば其だけに行くものを、變に疎むで居なくても可いぢやないか。その呼吸さ、その呼吸で是非一番今日から改めて始めてもらはう。それに、いづれ君は彼所の所帶を仕舞ふと、内へ來るのだらう。」

應答が無いので、葉山は聞直す、

「來る意なのだらう。」

其顏を柳之助は眩しさうに見て、ほやけた聲で、

「未だ極らんのだよ。」

「未だ極らない？それぢや此方ばかりで極めてゐたのか、大失敗だ。來たら可いぢやないか、それとも何處か外に所期があるのかい。」

「有りは爲んけれど。」

「それぢや如何するのだ。」

柳之助は曖々してゐる。

「もう何とか極めてなけりや、間際になつて狼狽だらうぢやないか。」

深切にも言ひ、推しても了簡を聞いたけれど、漠然として挨拶ばかりで、竟に要領を得ずに了つた。

旋て十時の時計を聞くと、柳之助は急に身仕度を爲るので還るのかと思ふと、

「今晩泊つて行つても可いかい。」

「泊る？」　と葉山は餘りの思懸なさに念を推す。

「不都合かい。」

「不都合な事は些とも無いが希しいことを言ふからさ。」

「又此二三日寢られんで窮る。還らうと思つたら可厭な心地になつたから、泊めてくれたまへ。」

「可哀さうに元は一人で寂しからう。」

(十二)の一

所帶を疊むのは姻家の母親は大の不同意で、男たるものが一家を構へたのは一人前になつた證と云ふもの、それでこそ始めて男の數に入つたのである。世間にはやれ政治家だ、學者だと、高慢ちきな顏をして、滿足に一軒の所帶さへ張切れぬ人が幾多もある。甚麼に可重人か知らぬけれど、高が自分の身始末、それが出來ぬやうで、何が出來やう。私に謂はせれば、三文の價値も無い人士、昔の武士は幾許貧乏しても皆武具の用意はしておたと云ふ。紳士とも謂はれやうものが、家を一軒持たずに居て濟むであらうか。世間へ對しても誠に愧しい譯——腑効の無いことである。それとても意氣地が無くて持つて持てない所帶なら爲方も無いが、然でもないものを、醉興にも程が有つたもの、今更下宿住とは何事であらう、と云ふのが母親の了簡。そこへ話をしたから以ての外で、柳之助は太く意見を爲れたのである。而して、一旦歸いた娘は、身體さへ差上げて貴方の物になつておるものを、離緣を爲れたではなし、その荷物を復される理は無い、私方では請取りませぬと云ふ口上。母親は辯舌爽快、柳之助は口不調法と云ふのであるから、烈しく言捲られて、ぐうの音も出なかつた。

然し、如何やつても不愉快の所帶は疊むで了はうと思込むだ柳之助は、辯解がましく反復して、その不愉快の事情を抒べたのである。すると母親の言ふには、其不愉快も當座の事で、長くて半年も經たうなら、左か右か忘れられる。一旦所帶を持つたものが、下宿住や同居などをして、その不自由の辛抱が出來るものではないから、一圖の了簡で那樣事を爲やうより、年寄の言ふ事は聞かうもの、那麼にも類をば可愛いものに思つて下さる貴方の事を、悪いやうには思はぬのであるから、まあ〳〵騙された氣で、もう二月三月あのまゝ

で辛抱を爲るやうに、と理を分けての意見、と云ふよりは頼むやうにして言聞かせたのである。

段々談話の裏に、柳之助も「はてな」と氣の着くことがあつた、其は正しく後妻の事に就いて母親が謎を懸けたので。此謎を懸ける前には微見したので、微見す前には匂はしたので。實は匂はしても利かなかつたから微見し、微見しても通ぜぬやうであつたから、到頭謎を懸けて見たので。柳之助も有繋に「はてな」と思つたのは其時で。是は長く話をして居る所ではないと心着いたから、

「それでは最一度考へて見ます。」　と草々に切揚げて別れたが。因で思合せると、母親の不同意なのは、お島を後に直さうと云ふ肚に違無い。それでは愈彼所帶を持つては居られぬ。母親が不同意なら不同意でも管はぬから、此方は此方で斷行するより外は無い、と柳之助の決心は益固くなる。

「考へて見ませう。」　と言つて別れた限、七日經つても十日經つても、考へて見た挨拶が無いので、母親は氣にして、百箇日の法事の打合旁柳之助を訪ねたのである。

その日は日曜で、彼人の事であるから休日だとて出懸は爲まいけれど、然し朝の間にと、十が十まで在宅と見込むで、好物の菓子を土產に喜ばれる氣で來て見れば、案外の留守！

「何からお話し申さうやら。」　と云ふ顏で、可懷さうに元が欵待をするのも、餘り嬉くはなかつたが、之から樣子を聞いて見れば、昨夜から歸來の無いのは葉山へ泊つたのであらうとの事。と言置いて出たのかと聞けば、然うでもないが、近頃は毎晩のやうに食事を了ふと葉山へ遊に出かけて、內は寂しくて寢られぬと言つては泊つて來る。それから直と出勤して四時に歸る、日暮までは內で、又葉山へ出向く。

「內は私一人のやうなもので、もう〳〵寂しくて敵ひません。」

と怨言がましい元の口氣。

「それでもまあ〳〵旦那樣の御爲には、葉山樣が誠に洒脫なお面白い方でございますから。お遊びに御出になるのは、御氣霧になつてお宜しうございませう。其所爲か、此頃は一時のやうに薊切つて御在なさるやうでもございませんから、其がまあ何よりでございます。眞に一時の御樣子では、御病氣にでもお成なさりはしまいか、と私は悚々いたして居りました。」

段々聞くほど母親は腑に落しかねる。近頃は夜泊を爲る、而して一時のやうに薊いでは居らぬ、百箇日が經つと所帶を疊む、而して此間も言ふには、もう一生妻は持たぬと決心した。如何も言ふ事爲す事が變だと思

つたが、それでやう〳〵解めた。一生妻を持たぬのも、所帶を疊むのも、近頃は機嫌の好いのも、皆其の夜泊が爲す業？何處の葉山か知らぬが、はて困つた事になつた、と母親は遽に投首をして熟と考へ始めた。元は其體を見て、是は何でも逢はねば濟まぬ用があるのであらうと察して、

「遠くもない所でございますから、車を持たしてお迎にあげませう。」

と氣輕に起つのを、母親は力無げに頭を掉つて、

「まあ止しませうよ。」

「でも貴方、折角御出あそばしたものを、もう一服あがつて在らつしやいまし、雜作はございません、直でございますから。」

「いゝえ、葉山さんには居りますまいよ、いづれ百箇日には會ひますから……。」

思案蔓に雁首の熱くなつた煙草をば、思切つたやうに筒に容れて、母親は窃と長吁を吐く。

「日曜でございますから葉山樣と御一所に御出遊になつたかも知れませんけれど、まあ左も右使を遣りませうでございます。」

強ひては母親も止めぬので。元は早速迎の車を誘へて來る。

程經つて門の外に車の音がして、

「へい、唯今。」　と車夫が格子を啓ける。元は飛び出る、母親は耳を欹てる。

「えゝ、今朝ほど彼方の旦那樣と龜井戸へ梅見に御出になりましたさうで。えゝ、御歸來は晩方だらうと有仰いました。」

「おや、然でしたか、御苦勞樣。」　と元の言ひ切らぬ間に、奥から聲が懸かる。

「其車で直に私は歸りませうよ。」

（十二）の二

梅見とは虚妄、宿から使の來た時柳之助は確に葉山の二階に居たのである。思懸けぬ母親の訪ねて來たは、恐らくお島の事。會つては大變と、用捨も無く居留守を遣つたことは遣つたが、さあ後になつて胸の安からぬこと太甚しい。彼の率直の了簡では大罪でも犯したやうに、居ても起つても在られぬ樣子で、默つて考へてゆては、時々堪へかねて、

「僕は悪い事をしたなあ。」　と餘り煩く言ふのが、到頭葉山の耳に障つて、

「それほど悪いと思ふ事なら、初發から遣らないが可いぢやないか。後で又悪いと氣が着つたのなら、此で喧々言つて居ずと、先方へ行つて悔つて來るのが早手廻だ。高が居留守を遣つたのぢやないか、それしきの事に憂慮するやうな事ぢや、君とは漫然と同乘も出來ないよ。何故も無いものだ、車の底が拔けはしないかと、輪が一つ轉がる度に聞くだらう、弱虫！」

呵られると、それで落着いたが、依然内々は氣にしてゐるので、葉山は竟に咬むで哺めるやうに、慙ひ歸つて會つたらば、徒足をさせたくらゐには換へられぬ氣の毒の想を爲ねばならぬ次第を說いて、漸く安堵を爲せたが、之に就けても、旋て所帶を疊む大事件の斷行が此人に出來やうか、と危いものに思つて、其始末方を試に訊ねたものである。

如何いふ方寸の内か、と葉山は片唾を嚥むでゐると、柳之助は平然としたもので、荷を積むだ車の後から鏡物の標本とラムプを兩手に持つて、宰領して行くくらゐに、いと易く考へてゐる。葉山は呆返つて洒落も出ぬ、恁云ふ場合には如何する、此所置は何と着けると、先づ姻家への掛合、老婢の始末、差配への挨拶、荷

物の世話も有らうし、道具屋も呼ばうし、第一に引越先の算段、恁も爲なければ成らず、那も爲なければなるまい、と一人の才覺で八天狗を働かねば成らぬ面倒を、一々並べ立てゝ責めて見たが、それでも自若として、

「那麼事は勿論僕には出來ん。」

「御大名の引越ぢやあるまいし、殿樣にも御家來にも一人限の癖に、悪く大束なことを言つて落着いてゐるよ。殿が御手を下して遊ばさなければ、誰が參つて仕るのさ。」

柳之助は莞爾とも爲ず、

「僕は無論始から那麼事は君に遣つてもらふ意で居るのだもの。」

「えゝ！」　と葉山は故と目を瞪つて、

「恐れながら御前へ申上げますが、只今君と仰の有りましたのは、葉山誠哉の義でござりまするか。」

「何故さ？」

「何故とは酷い。いや此義ばかりは葉山誠太夫平に御免を蒙りませう。」

「何故、何故、何故！」　と柳之助は遽に狼狽へて、

「そりや可かんよ、可かんよ。」

「何方が可かんか知れるものか。」

「可かんとも、もう然う極つとるのだもの。」

「誰が極めたのだ！」　と澄した顔を柳之助は打目戍つて、

「そりや窮る、僕は窮る。」

一切其邊の相談は無かつたから、如何爲るのであらう、と葉山も實は思つてゐたのであるが、いづれ事の有る日には舁込むで來やうと、其肚では居たものゝ、「無論」であるの「極めてゐる」のと、何の話も無い先から役割が付いて、萬端委せられてゐるには、少しばかり肝を潰した。然し大方這麼事であらうと思つた、と快く引承げる事は引承けたが、爰に甚だ迷惑至極の一條が有ると言つて、葉山は頻に首を傾けた。それは外でもない、姻家の思はく、是が極めて辛い。如何あつても由無い恨を受ける人にならねばならぬので。話の樣子では、母親は飽くまで所帶を壓むのは不得心で、柳之助が一生獨身も胡亂で、と云ふのが妹

のお島を後へ直さう下心であるから。其を柳之助が嫌つて、所帶を崩して、行先はと云へば自分の家。此自分なる葉山が日頃兄分であることは、母親は能く知つてゐる。して見れば、是は柳之助の智惠ではあるまいと來る。何でも葉山の差金に違無いと來る。餘計な事を爲る憎い奴だと來る。然う來られるのが誠に嬉くない、と葉山は此の所を考へたのである。

因で、此事情を柳之助に話して、萬端の世話を爲ぬではないが、此を何とか一つ稜立たぬやうに、巧く片附けたいもの。君も從來散々世話になつた岳母の事、又此後とても末長く親類の往來を爲なければ義理が濟まぬから、事を手暴に遣過ぎて、此限喧嘩面になつて了ふのも甚だ好ましからぬ。又自分にしても、親類盃の席に列つて、不束な娘を何分とも願ひまする、と開き直つて賴まれた兄樣であつて見れば、姻家の阿母さんに睨まれたからとて何の可恐いことは無いが、それでは如何も寢覺が好くない。彼方も立てば此方も立つて、九尺二間に戸が三枚ばかりも實は欲いくらゐの所であるから、此は例の變人で遣られては。本人は其で可かうけれど、哀を留めるのが萬端の引承人、是が皆打被らねばならぬから、君たるものゝ所作は、「大立者の役で難しいね。」と葉山の腕組は容易に釋けぬ。

成程然うでもなからうけれど、素より自分が組立てた所帶、其を自分が毀すのに、然まで他に氣兼を爲ずとも可さゝうなものである、と柳之助は甚だ其意を得ぬのみならず、母親も亦故障などを言ふべき理ではない。

然るに今度の件に就いて不服なのは、畢竟お島を妻に與れたいが爲、其を此方が否むだからとて、それで感情を害するのは手前勝手と謂はねばならぬ。手前勝手に對して會釋を爲る必要は無い、と柳之助は獨で業を沸すばかりで、一向件の始末に就いて智惠を絞らうとも爲なかつた。實は其智惠も葉山に委せた萬端の内の一つに勘定して、那麼思想は全く自分には無いからと高楊枝でゐる。そこは宜しく葉山が引承けて、工夫をしたが、さて思はしい智惠は出ぬものので。

此夜も柳之助は泊つて、翌日學校の歸途に直と姻家を訪ねたのは、無論葉山の指圖で、其から二週間の後が百箇日の法事、葉山誠哉も親類の格で其席に招かれたが、此が聊か兄分の技倆と、手藥煉を引いてゐた効に姻家の兩親と懇談數刻に渉つて、左やら右やら例の件は落着した狀。此上は別して親しく末々まで不相變などゝ嘈く中に、母親も頻に滿足らしく爲てゐたが、時々忘れたやうに可恐い目を爲る、苦い口角を爲る、氣が着いては溫容にしてゐるのを、絶えず見てゐたのは座中に葉山一人。

（前編終）

紅葉集

（一）

後編

さて一所になつて見ると、お種の想つたほど、柳之助は其事を苦に病むのでもないらしい。夫から聞いた所では、間がな隙がな思窮めて、食べるものも食べずに泣いてゐるのかとも考へられたのである。猶夫は懇々も言つた、驚見はまるで病人なのだから、其心得で取扱はなければならぬ。何でも看病を爲る意で、深切に、優しくと、聞いた時はお種も自失した。

抑も家内に人一個殖えるといふは、思の外面倒なもの。それが、奉公人でもなく、厄介でもなく、泊客でもなければ、萬更預りものでもない、同居と謂へば謂ふやうなものゝ尋常の同居とは少し理が違ふ。第一主の親友であつて、此方から言出して世話を爲るのであつて見れば、勿論大事に爲なければならぬ、次には看病も爲なければならぬ。總て主同樣に扱はなければならぬ。究竟二人の夫に册かなければならぬのである。

夫一人、その一人に册くさへが手一杯の大役である。一日の務はそれでもう〳〵澤山なに、四歳になる保といふ子もあれば、七十に近い舅もある。或時は最一人お種の欲い場合も有るのに、同し厄介ながらも偶には

何かに手助になる人物でゝも有る事か、目に見えて手の掛る、相應に氣苦勞も爲ねばならぬ所謂二人の夫を有つやうなものと思へば、有繋に悚然としたが、案ずるよりは產むが易しで、まづ柳之助が一日の生活は、朝の八時に學校へ出て、午後の四時に退けて來る。それから二階へ昇つて燈の點く頃迄机に向つてゐる。其內には夫も退けて來る。一所に夕飯となる。二階を鶯見に貸してから、夫は大方茶の間にゐる。夜になれば其處へ話に來ることもあり、又此方から二階に遊びに行くこともある。やがて寢る、それで仕舞なので。別に何の事も無い。言出しては泣き、思出しては鬱ぐでもなかつた。夜は寢られぬからとて、過日のやうに鷄の鳴く迄御伽に座らせられるでもなかつた。お一人で御寂しからうと、茶を煎れて持つて行つて、合手を爲なければ濟まぬのでもなかつた。然し柳之助は無口で、無愛相で、世話になりながら氣毒さうな顏も爲ずで、構つてもらはなくても困らぬといつたやうな風で、始終不足らしい、折角世話をしても効の無い、居られて面白くない御客ではあるが、其處が正是手の掛らぬ所と、お種は少しも可厭な顏を爲ずに、彼此と陰ながら心着ける。

葉山は又、自分が押張つて同居をさせたのであるから、如何でも爰で柳之助の氣が引立つてくれなければ面

目の惡いやうな所もあるので、昨日は怎う、今日は如何と、日々の樣子に注意して、殆ど其一嚬一笑にも心を動すばかりであつたが、幾分の歡喜は、學校へ出るにも、話をするにも、乃至は机に向ふにも、大分元氣が出たやう。——假其までゝなくとも、漸く諦は付いた鹽梅。

「もう一息だ。」　と葉山は賴しく思つた。

成程一時から見れば、元氣も出たやうではあるが、未だ〳〵顏の色は雨晒にされたやうに、光澤も脂も脫けて、頰の邊は凄いほど羸れて、何を見るにも勢の無い眼色で、其さへ直に伏目になる。身體の疲勞した爲か、不相變思徹めてゐる所爲か、何と無く起居が弱けてゐる。

お種の注意で怠らず滋養物を薦めてゐるが、引移つてから未だ漸く二週間許と云ふので、然したる驗も見えぬ。それをお種は頻に溢立つて、如何か最少し發揮しさうなものであるが、と折に觸れては言出すと、一日葉山は擽つたいやうに笑ひながら、

「尋常の病氣擧句ぢやなし、牛乳やソップのやうな物で貴立てたつて、然う着々肥立つて耐るものか。那云ふ病氣には又別に結構な適藥が有るのさ。」

「何でございます。」　とお種が眞に承ければ、

「お前たちの嫌ひな藥よ。」　と益操つたさうに笑ふ。

「私が飲むのぢやございませんから私が嫌ひだつて管はないぢやございませんか。甚麽藥なのです？」

葉山は天を仰いで徐に頤を撫でた。

「甚麽藥と云つて、一寸申難いのさ。」

判然は解らぬが、大方那樣事であらう、とお種も稍勘付いて、

「貴方又驚見樣のやうな方に悪い事をお誨へなすつては可けませんよ——本當でございますよ。」

葉山は衝と横を向いて、鼻の心で笑つてゐる。

「昨晩も大層お遲うございました。」

「然やう、然やう、彼此一時過でしたかな。」

言へば冷かされるか、醜弄されるに極つてゐるので、お種は其なり默つて了つて、暫く無言でゐる内に、葉山は直に我を折つて又話出す。

「實に不思議な事も有るものぢやないか、昨夜俺は吃驚した。」

お種は應答もせずに精々と縫仕事をしてゐる。

「えゝ、おい、吃驚したと言ふのに。」

「然でございますか。」

「もう止さう、張合の無い。」　と葉山は座を起たうとすれば、

「はい、伺ひますよ。」

「心身に聽くなら話すけれど、……昨夜まあ社の員と行つたと思ひな。」

「行らしつたのですか。」　とお種は顔を擧げる。

「まあ行つたのよ。」

「それ御覽なさいまし。」

「餘計な事を言はずに話の要領を聽きなよ。行つたのだ、すると顯れたのが、四五日前に披露をしたと云ふ藝者だ、可いかね、それが料らず俺の乳母の娘で、「やゝ貴方は」と云ふ事實でも何でも無かつたけれど、吃

驚したね。其藝者が十八九だ、十八九は少しも驚かなかつたが、お類さんに生寫！」

「へゝえ。」　とお種も有繋に針の手を停める。

「それ、聞いてさへ吃驚するだらう。まして正の物を見たのだから、驚いたらうぢやないか。」

「本當でございますか。」

「背恰好から體度、聲は全然で違ふがね、それは目鼻立から額際、頬の具合、いやもう肖たとは未だ。

そこで俺は反復思つたね、嗚呼之を驚見に見せたら、甚麽に喜ぶだらう——驚見は吃度泣出すよ。で、調子が又馬鹿にお類さんに似てゐるのだから耐らない、何處か恁う女學生染みた、それは餘程似てゐる。那は是非驚見に見せたい、見せなくちや謬だ。那は全く驚見の爲に出來てゐる藝者だよ。」

業々しいにも程が有ると言ひたさうに、お種は獨り面白さうな夫の顏を視るばかり。

「何と不思議ぢやないか。」

「然ですねえ。」　と不承々々。

「然ですねえ處かい、這麽結構な藥が亦と有るものか、ソップや鷄子で那の蔚の虫が治りッこ無し、所謂氣保養と云ふ奴でなけりや。疾から其は考へてゐたのだけれど、何しろ精進中の體だ、そいつを曳張出して茶屋小屋這入は第一佛の前へ對しても濟まずさ、俺も亦餘り無分別のやうで、そこらが何と無く具合が惡かつたから、實は今日迄控へてゐたのだ。

それで、日增に驚見の樣子が好ければ、酷く譽めた話でもないのだから、那樣事はお舍諸に爲やうと思つたのだけれど、何しろ那してお前が切と盡力してくれるけれど、牛乳やソップぢや迚も可けませんよ。其處へ持つて來て、今の瓜二つと云ふ藝者を見たものだから、もう耐らなくなつて了つた。如何だい、右の藥を少々ばかり用ゐるのは。」

法界悋氣でも何でも無しに、細君は徹頭徹尾の不賛成。

「まあ那樣事はお舍諸なさいましよ。」

極めて冷々に言つて退ける。

「何故？」

「何故でもお舍諸なさいましよ。」

「家暮は困る！解らな過るぢやないか。」

お種は色を正して、

「私も家暮ですし、鷲見さんも家暮です。」

「成程。」　と夫は餘所々々しく言ふ。

「ですから那樣意氣な藥は症に適ひはしません。」

「適つたら如何する？」　と葉山は意氣込めば、

「それですから、適つたら猶大變ぢやございませんか。貴方は、もう……。」

と後は言はぬほどお種は眞に〳〵呆れたのである。夫は夫で又別に呆れて、

「困つたものだ、辨らない人だ。如何すればお前のやうに家暮で塊るのだ。一寸洒落に藝者を揚げると言へば、もう直に其場で帶か何かの無心を言はれて、翌日は芝居へ連れさせられて。三日目には起請の取替でもして、……。」

「もう可うございます、解りましたよ。」　と列々と針箱を仕舞つて、取散したものを片附ける。

「おや〳〵絲日商人が夕立を吃つたやうに、無闇に片附けるよ。如何したのだ。」

「もうお夕飯の支度を爲ければなりません。あれ、あれ、其を踏むで居らしつちや困るぢやありませんか。」

見れば膝の下に裁片の端を敷いてゐたので、葉山は其を取つて投付けながら、

「食だ〳〵と、嚇しなさんな、腹なんぞは空いてゐるものか。」

「それでももう支度を爲なければ。」

「私と鷲見のは御無用になさいよ。」

「晩く上るのですか。」

「いゝや、是から。」

「では直に上りますか。」

「直に行くのよ。」

「何方へ。」

「へん、家暮め！」

（二）

湯島切通を暫地に下りて一直線に走らせる二臺の人力車は、三町許も行くと、唯有る横町の角に停つた。

上野の彼岸櫻も昨日今日咲初めたとはいひながら、未だ薄寒い夜風が砂を捲いて來る。此風さへ無かつたらばと想れるのは、さすがに春めかしい月の色、朧に霞む向側を、古風に辻占や花輪糖が呼むで行けば、此方側では何處とも知らず媚かしい三味線の音が幾所に聞える。

車を下りた二人は、霜降の二重外套を着て、挽付の低いのを蹈いたのゝ後から、洋服の一人は蹣跚と案内されて行くやうな樣子、――葉山は到頭柳之助を連出したのである。

旋て其横町を曲ると、忽ち一廓の別天地、狹い兩側に軒ラムプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音色は行くほど緊く、通過る格子の内から突然に太鼓を擊つて、黄色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて、「あゝッ」と言つたが、其聲を返して、

「おい、おい、何處へ行くのだよ。」

「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」

「僕は西洋料理が可いな。」

「西洋料理でも何でも御好次第。」

柳之助は不安心な顏をして、前後を眴しながら葉山に追付いて。

「非常な藝者屋だね。」

うんともすんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。

「えゝ、葉山、僕が出る時妻君がね、今晩は早くお歸んなさいと言つたよ。而して何だか心配さうな顏をしとつたが、如何云ふのだらう。」

「さあ、如何云ふものかね。」　と葉山の目は笑つてゐる。

「だから早く歸るが可からう、飯を食つたら直に歸らう。」

「勿論さ。」　と言ふより早く葉山は磨硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案内が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。

門の内は奥深く御影石で甃むだ露地の正面が秩然とした式臺造で、障子が一枚啓いて、銀地の衝立が電燈に反射してゐる、其陰を隱顯忙しさうに走る人影も見える。

玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顏を見るより空々しく可懷さうに、

「おや！入らつしやいまし。」

何と無く間の惡い狀で、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並むで、車夫は雜然と火鉢に聚つて酒を飲むでゐる。

何といふ家か知らぬが繁昌する店、と柳之助は思つた。奥まつた一間へ案内される途次、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頻に藝者の徘徊ふのを見掛けたが、大分二階の賑かな樣子。二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した椽の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐたが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」　と障子を閉てゝどつかり座ると、此狹い間を電燈の光は耐らぬほど眩く照して、未だ火鉢も出ねば、婢も來ず、唯明くばかりあつて閑寂した中に、葉山が床柱に凭れて、象牙の煙管

筒の頭を閉さうに拔差する音がスポン〳〵と鳴る。柳之助は又更紗紬の褥の上に我張つて貧乏動をしながら、黑部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢庭に、

「腹が空いた。」

「これから飲まうといふ前に立つて、どうも賴もしくないね。」

「けれども腹が空いとるのだから爲方が無い。實際此は西洋料理も出來るのか。」

「何でも。」

「ふむ、然うか、成程。」

「何だい、酷く感心するぢやないか。」

「どうも僕は恁云ふ座敷に電氣燈は可笑いと思つたが、其所爲だな。」

葉山は怪訝な目をして、

「どの所爲だい。」

「和洋を兼ねるからだらう。」　と大いに發明したとやうに言ふ。

「何だ、愚にも付かない。」

所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子を運ぶ。

「あゝ腹が減つた。」　と又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いでゐたが、

「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飢饉は、貴方、何方？」

「えゝ。」　とばかりに柳之助は荒膽を挫がれた。虚さぬ葉山は、

「今朝の火事は番町だよ。」

「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよう。」

と悪身をしながら甘忘れて言ふのを、柳之助は愕然と打目戍つてゐたが、やがて眉を皺めて横を向いた。

「いや、然うだつけね。はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」

餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込まれて、

「おや　何故、貴方。」

「軍夫の話だらう。」

「おふざけなさいよう！貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」

「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」

「大知り！」　と圖に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、

「早く何か食はうぢやないか。」

正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家暮であるか、後學の爲に見て置きたいといふ顏で、彼の面を眺めながら、

「貴方は餘程殷しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣殷しい事を爲る所ぢやないの。」

是も亦柳之助には霹靂一聲で、

「や、此は待合茶屋か。」

「はい、待合茶屋でございます。」

柳之助は慌て氣味で、

「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」

「何爲、和洋兼帶の料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何ぞ旨さうなものを、大急でね。」

「何に致しませう。」

「西洋料理だ！」　と柳之助は獨で主張する。

「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」

「貴方も？」

「俺は謝る。」

「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御肴は？」

と御肴の二字に惡く力を入れて、頗る調する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、

「それには今日は些と注文が有るのさ。」

「でせう？」　と全然心得てゐるのは、更に葉山には心得られなかつた。恁して又彼此と手間取るのを、柳之助は可悶がつて、

「早くしてくれ、もう耐らん。」

急立てられて婢も耐らず、好い話は後にして、

「よろしい、汽車の綱曳！」　と忙々出て行つたが、直に入つて來て、「でせう？」の談を續ける。

「本當に貴方は罪が深いよ。ですが彼妓も流石だと思ひましたね。貴方とは感心！全く目が高い。一昨日も來て、「先方樣は御存無しの片思だからつまらないわ、姉さん。」か何か言つてるから、及ばずながら私も不便になつて、よろしい、今度入らしつたら私が是非一本買つていたゞいてあげるからなんぞは、今考へて見ると、お若さん馬鹿だつたね。片思とは世を忍ぶ假の名で、實は貴方の方にもトンと胸に應があるのは、こりや凄い！」

何を履違へたのか、獨合點してお若の辯じつけるを、葉山は一向不案内さうに聽いてゐたが、

「おや、それは又部類が違ふやうだ。誰だい。」

「誰だいもないぢやないかね、かね、かね。」　とお若は嘯く。

「私の今晩の注文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、姫松といふのね……。」

言ひも訖らぬにお若の猿臂は早くも延びて、葉山の鼻頭でぴしやりと一つ拍子を打つた。

「お頼申しますよ。」

「はて、心得ぬ。」　と思入がある。

「怪しやなあでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」

「ぢやお前の話は姫松かい。」

「はあ。」

「そいつは大失敗だ。」　と葉山は頭を圓める。

「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」

「何さ、其は嘘だけれど、……困つたねえ。」

葉山は少し〳〵困つたのである。お若の説に據れば、今晩呼ばうとする藝者は嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら困るどころではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、例のやうにわい〳〵で推掛けて來た今夜ではない、不思議にも驚見の類さんに生寫の其藝者が、柳之助に見せたいばかり、見せての上の分別も隨分無きにしもあらざる矢先へ、意外の門違は有難迷惑とも、不都合とも、お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極内で、功德になるから呼むで遣つてくれなどゝ頻に懇願する。考へた所で葉山も今更爲方が無い。

「看板に詐があつたら代は戴くまいね。」

「貴方でもない、お目が第一壓らぬ鏡でせう。」

「ぢや掛て見やう。」

「飛で來ますよ。」　とお若も嬉々起つ。

「羽の生へた猫ぢやいよ〳〵看板に詐がありさうだ。」

「なんぞと言つて置いて、後で面倒が勃起つたつて私は知りませんよ。」

と出て行く。

柳之助は漸く夢の覺めたやうな顏をして、

「何の話を爲とるのだか、更に解らんぢやないか。而して誰が來るのか。えゝ、何が來るのだ。」

「誰も來やしないよ。」

「羽の生へた猫と云ふのは何だい。唯猫なら藝者だらう、けれども羽の生へた猫と云ふのは？」

「うむ、あれは洒落を言つたのさ。」

「何の洒落だい。」

益貴められて、葉山も少し塞つたが、

「今に持つて來るから見給へ。」　と拙いながらも遁げて見れば、柳之助はそれで得心して、

「うむ、料理だね。何か變つた料理か何かだらう。」

「愛嬌があるねえ。」　と葉山は下肚の痛いのを怀へながら。

旋て酒は出たが、食ふものとては、ちよつぴりと燒海苔に裂鰹、氣取つた香の物ぐらゐ、柳之助は到底空腹を癒しかねて悶々してゐると、襖の外で艶なる聲が、

「姉さん、此方？」

「はあ、直と。」

とお若の案内に應じて顯れたのが藝者である。髮はど豐の髮を潰島田にして、白粉が濃いのかと見えるほど色白の、豐頬の、眉の好い、目元の涼しい、左に泣黑子のある、仇氣の無い、芝居の姫形を摸したやうな風なのが、閾際で挨拶をして顔を擧げると、はつとした鹽梅で、お若の傍へ匐るやうに坐つて、

「貴方、先日は如何も。熱いのね、姉さん。」

と菫色の絹ハンケチを顔へ加てれば、お若は横目で、

「御尤！」

「あら、姉さん來早々苛めなくつても可いぢやありませんか。」

「苛められても可いぢやありませんか。」

「知らない！」　と姫松は一轉と背後を向けて、

「貴方、お酌！」　と葉山に銚子を出す。

爾時お若は障子も響けるばかりに、

「えへ、えへ、えへん。」

唯驚いたのは柳之助。待ちに待つた西洋料理は來ずに、羽の生へてゐるとか謂ふ猫が顯れたので。事有りげに葉山は自分を誘出して、晩餐でもといふから其氣でゐたれば、料理屋へは來ずに待合茶屋へ來た。何の爲に待合茶屋へ來たのであらう、而して何の爲に藝者などを揚げたのであらう。其も此も可いが、何の爲に始から恁々だと明さなかつたのであらう。彼は元來洒落の好きな男であるから、是も例の手で、自分を驚かす爲に故と秘してゐたのであらうか。其にしても此場の樣子は、五里霧中を徘徊するやうで一向合點が行かぬ。成程好んで這麼所へ遊びに來るほど有つて、葉山は誠に面白さうに見える。けれども自分は更に面白くない、のみか、不愉快である、寧ろ苦痛を感ずる。お若とかいふ彼赧面の婢、彼は何者である、客を客とも思はず、無禮極ることを言つたり、厭ふべき擧動をしたり、殆ど我々を侮蔑してゐるのである。實に見るも汚はしい。

それから次には藝者！那も大會などの場合には、興も佐ける、席上の周旋もする、必要の道具で、賑かな、好いものであると思はれる。然し、恁云ふ人の少い場合には、何の必要が有るのか。凡そ女子は彼等の年齢では、人の前を怯れて、物をさへ得言はぬ、手を一つ動すにも淑しくしてをる、其が處女の美德とも謂ふ

のであるに、彼は男の如く大膽に物を言つたり、物馴れた老者のやうに差出た振舞を爲る。實に其憎さは、面に唾しても遣りたい。

而して彼等は仲間同士で勝手に喋つたり、笑つたり、戯れたり、怪しからぬ我儘を働くばかりで、全く眼中に客といふものを置かぬではないか。我々は何の爲に這麼所へ來たのか、而して何の爲に藝者を揚げたのか。這麼中で物を食つたとて決して旨からう道理が無い。恁してる居る中も絶えず一種の苦痛を感ずる。

自分の家で自分の膳で、その方が幾何樂か知れぬ。彼等は我々の一擧一動一言一句に卑むべき注意をして、少しでも見出す所が有れば、忽ち捉へて笑草に爲うと、那樣事ばかりを始終念懸けてゐるのであらう。

從來は厭ふべき人としてお種さんを遠けてゐた。今度一家の人となつて見れば、能く世話をしてくれる。それでも未だ何と無く隔てられて、十分には打解けられぬ、何處までも他人のやうな氣がして。彼赭面、彼藝者、思へば彼等とそ他人の、厭ふべき奴なので、家に居てお種さんと話をする時、或は給仕をしてくれる時、決して此に今居るやうな苦痛は感ぜぬ。

西洋料理が來たら、早く食つて、安樂な我家へ還らう、と柳之助は熟と考込むで、葉山の洒落も、姫松の味

な文句も、お若のお喋舌も耳には入らず、兀々と苦い顔をしてゐた。すると姫松は思出したやうに、

「貴方や、大層お眞面目ぢやございませんか。お一盃召上れよ。」

と柳之助の前へ向直れば、其顔を尻目に掛けて、

「俺は要らん。」

「あら、餘り御挨拶ぢやありませんか。」

其處へ葉山は身替の盃を出して、

「此人はお肚が空いてゐるので機嫌が悪いのだ。お若さん、御誂は如何したよ。」

「那樣にお邪魔になさらなくつも參りますよ。」

と空の銚子を擡つて起つて行く。

「驚見、ちつとも飲まないぢやないか。今日は君への御馳走なのだよ。これほど御馳走してゐるのに、一言も挨拶をしてくれないのは酷いぢやないか。何とか言つてくれ給へ、此御馳走に就いてさ。」

心有りげな葉山の語も柳之助には十分に判じかねて、

「どの御馳走？未だ何も有りはせんぢやないか。」

それを理窟ぽく、眞になつて言ふのが、姫松には餘程可笑くて、

「貴方や、御覽なさいな、這麼にお酒だの、種々お肴だの、電氣燈だの、藝者だの、有るぢやありませんか。」

「御馳走さ。」　と葉山は窃と顧で藝者を指したが、姫松は煙草を吸付けてゐたので知らずにゐる。

藝者が御馳走は柳之助にも解つたが、之に就いて何とか言へとは、何と言ふのであらうと、藝者の方と葉山とを見合せて、遽に口を開きかねてゐる。

「よく見たまへ、肯てゐるだらう。」

柳之助は正直に眤と姫松の顔を眺めるので、

「あら、貴方可厭よ。」　とハンカチィフで黒子の邊を隠しながら、首を縮めて斜に葉山の方を見込むで、

「貴方、這麼人の善い方に那樣悪智恵を付けるものぢやありませんよ。貴方こそ肯てゐる癖に。」　と嬉しさうにしてゐる。

「乃公のにてゐるのは土鍋のお粥さ、長々の疾病でね。」

「あら、然うすりや。」　と姫松は忽ち居直つて、

「私は水を汲むだり、お香々を切つたり……。」

「指を切つたり、血を出したり、乃公が舐めて遣つたり、結いて遣つたり。」

「嘘ばつかり。」　と異に紮みかける。葉山は面白半分、

「物は試しぢやないか、切りもしないで何が解るものか。」

「私は隨分切るわ！星さん。」

彼は此家での變名を星と云ふ。それは一座の同伴は皆各自に持物が有るのに、葉山ばかりは未だに月と見たのがないと云ふので、お若が此名を付けたのである。

「切つてもらはう、切れるなら切つてもらはう、然し薄く切つておくれよ、私は齒が悪いから。」

出し抜れた姫松は悔しさうに默つて了つて、在合ふ盃の冷えたのを把つて自暴に呷と飲む。

「餘り見事！是はお重ねだ。然し體に障ると誰かゝ共雖儀だよ。」

と注いで遣る。

姫松は昂然として、

「御心配には及びません、土鍋でお粥を煮てくれますとさ。」

「畜生め！お香々なら乃公が切らうよ。」

「どうぞ成るたけ薄く。」

「いや、今度は此方が自暴に飲む番か。」　と自分の前には盃が無いので、隣のを拾はうとすると、

「誰に肖とるのだ、僕には解らんよ。」　と今まで視てゐたやうに、柳之助はやう〳〵言出す。折から壜に拳を打つてゐた座敷で、調子を低く、ツヽン　ツンノ〳〵　チツチリン　チリレン　ツンテン　ツトチン〳〵チン去りし女房のツヽンツン形見とてツトチン〳〵〳〵行燈に殘せし、針のあと、わが子を膝に、引寄せて、男なみだの、もらひ乳。

柳之助は熟と聽いてゐた樣子であつたが、別に何とも言はなかつた。言ひたいことの有る葉山も先控へて默つてゐると、姫松が纔に、

「好いのね。」　と呟く傍から、又もや「更行く鐘」を唄出す。

聞捨にならぬ美音が手に取るやうなので、有繋に此方でも水を打つたやうにしてゐたが、旋てそれもチリレン　ツンテン　ツトチン〳〵と納るのを切掛に、葉山はしみ〴〵藝者の横顔を眺めてゐた目を突如と外して、

「肖てゐるのが解らない？是が？是が解らないかい。」

「解らん。」　と柳之助は又一目視て首を掉る。

「是がだよ、是が解らない事があるものか。えゝ情無い目だ。能く見給へ、ようく！」

「可厭よ、もう、星樣、どうせ土鍋でお粥ですからさ。」　と姫松は小氣味を悪がつて、外方を向いて了ふ。

柳之助は益稀有な目をしてゐるのを、葉山は少し〴〵焦燥氣味で、

「もう解つたらう。如何だい、肖てゐるだらう。」

「もう星樣、私は澤山よう。」　と姫松は衝と起つて、座敷の外へ遁出した。

「未だ解らないのかい、是は怪しからん！君は醉つてゐるからだ、……。」

「醉つとるより腹が減つとる。」

「うむ、然うだ。それぢやまあ腹を拵へてから、能く見給へ。」

早速手を鳴せば、漸く今來たと云ふので、姫松とお若が料理を運込む。柳之助は得たり賢しと、五皿と云ふものを前に並べて、夢の如くスウプを吸つて了ふと、息を吐かずに肉叉と食刀を十文字に構へたが、梭を投るやうに左右に一上一下するのを、感心して視てゐた姫松は、

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ。而して第一召上るのゝ速いこと。」

「そこへ惚れたか。」　と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなものゝ合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は窃と顔を擧げたが、藝者は葉山の方を瞶めてゐるので、又窃と食事に掛かる。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く岡惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、嗤付きたいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那樣に異う有仰らなくつたつて、御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繋に意外の挨拶に姫松も今は勘忍袋の緒が切れたやうな聲をして、

「はあ、有仰いとも！」

「言ふよ。」

「仰有いな!! 憤れつたい。」

「迷惑……。」

姫松は瞥然と見る。

「どころかい。」

「何ですつて？」

がちやんと物の破れたやうな音がしたので、二人とも吃驚して見向けば、柳之助が肉叉と食刀を皿の上に投

出したのである。而して窄袴を緩めながら、

「あゝ、食つた、食つた！」

「さあ腹が出來たら見たまへ。」　と葉山は忽ち女の方を餘所にすると、姫松は茫然して、又今に構つて〳〵れるのを心待にしてゐたが、急には那樣氣色も無いので、不滿さうに靄神の襟を弄つてゐた。

腹の出來た目で見ても、誰に肖てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怀へかねて「頻さんに生寫」と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なか〳〵蓋然とも爲ぬのみか、

「頻さんに!?」　と呆れられて、

「然う！」　とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合ぬ馬鹿々々しさを、柳之助は聲高に笑つたのである。葉山は又、是程肖てゐるものを、本人にあらざるよりは之より肖やうがあるものではない。彼の目は如何かしてゐる。其も知らずに他を笑ふなどゝは以ての外と、小癪に障らぬでもなかつたが、左も右も面々が見る目の事、肖ぬと見たものを是非肖てゐる事に爲る事もならず、

「何故是が肖てゐないだろう。」　と持餘して拋出したやうに言へば、

「何故でも肖て居らんものぢやないか。」

僞でもなく柳之助は肖てゐぬと見たのであるが、葉山は見れば見るほど肖てゐるので、如何しても彼の言が信じられなくて、

「本當に肖てゐないかい。如何しても然うは見えないかい。」

と冗くも訊ねた。柳之助は頑として――葉山は實に彼の自分に向つて此時ほど頑とした事を見なかつたのである。

「何處が肖とるのだ？君は如何かしとるよ。」

葉山は決して自分の目が如何かしてゐるとは信ぜぬ。其通りに柳之助とても自分が然うとは信ぜぬ。

「これは證據裁判となつた。」　と葉山が呟くと、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

問に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に肖たのやら、肖ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたの

が、後には段々むづかしくなつて、岡惚の星さんは機嫌を損じたやうな顏色。食べる物さへ食べて了へば可恐い事は無いと云はないばかりに、彼木訥漢の急に氣の强くなつた面の憎さ。左も右も捨てゝ置いたら悪からうと、

「酷いわ、貴方がたは。他の顏を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非伺ひませう。」　と姫松は急遽して壁際に寄せてある三絃を取りに起つたのは、是からたつぷりと思の丈を糸に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聽いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」　といふ聲を聞くと、姫松は三絃を挈げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「歸すもんでゝか。」

「でも此人が歸ると云ふから。」

「私は此方は留めはしないわ。」

「さあ、葉山。」　と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も强ひては歸りたがらぬ樣子を見て往きつ復りつの區域を次第に擴げて、遂に襖の外へ出て了ふ。

（三）の一

例より早く退けて柳之助は還つて來たが、彼は出入ともに何と下へ言葉を掛けるでもなく、下宿屋の階子を昇降するやうに、すうと出て行つて、すうと入つて來て、直に二階の居間へ引籠るのである。お類の居た頃は、出るにも歸るにも、其姿を見て何とか言はねば氣が濟まぬやうに、搜出しても一々辯るのであつたが、此に來てからは、弗と那樣事は無くなつて、無挨拶極るのを「現金な男だ」と葉山は言つてゐる。お種も慣れて了つて今は格別怪みもせぬ。柳之助は机の上へ帽子とポートフオリオを投出して、上衣を脫がうとする所へ、婢が昇つて來て、

「あの奥樣が、お茶がはいりましたから入らつしやいまし。」

呼れゝば猶豫をするでもなく、直に婢の跡から降りて茶の間へ行けば、お種は葉山の爲るやうに茶器を並べて、姿勢までが似てゐるやう、傍には保が大人しく遊むでゐたが、柳之助が入つて來ると、睫毛の長い、黑晴勝の、圓い目を擧げて、餘り可愛がつてくれぬ小父さんをば、何爲に來たらうと云ふ樣子で睨と打目戍つた。其の狀は彼が馴染の理髮床にある西洋畫の「犬の鼻頭へ葡萄を出してゐる子供」の額に善くも似てゐたので、「坊や。」と言ひながら其傍に坐ると、忽ち俯いて、後が可恐さうに母親の方を見向いて了ふ。

「今日は薩摩煎が出來ますから。」　とお種は錫の直截の茶壺を取擧げる。

「あゝ、然うですか。」　と柳之助は例の通り話が無い。

「昨晩は御愉快でしたさうで。」

柳之助は少しく赤面した。出掛に妻君は、早く歸るやうに、と心配さうに言つたのを記憶してゐる。それに歸つたのが十一時。彼は早く歸るやうにお類に言はれて、曾て早く歸らなかつた例は無い。十時と云つたのを十一時にでも歸れば、翌日お類は快々としてゐる。お種も心地は同じであらうと思へば、何氣無く茶

に呼れるさへ、餘り肩身は廣く覺えぬのである。

「何爲、愉快ぢやなかつたです、那麽事は。」

「何と云ふ藝者が參つたのです。」

「何と云ふのですか。」

「三味線でも彈いて騷ぎましたか。」

「三味線などは全然彈かずに、唯喋つとるばかり。あれぢや何の爲に呼むだのか更に解らんですな。御馳走を爲ると云ふから、甚麽御馳走かと思つたら、那麽ものは御馳走ぢやないです。而してお類に肖とる、肖とると云ふのですが、なあに何處も肖とりやせんので。」

「然うださうでございますね。拙夫では大相善く肖てゐる、其を貴方は全然肖てゐないと有仰るが、決して那樣事は無いから、是非私に見せたいなどゝ言つて居りました。」

「肖とるものですか。あれは全く妄で、唯那麽事を言つて僕に挺つたに違無い。」

「いゝえ、那樣事はありませんよ。」

「然し肖て居つたら……。」　と柳之助は不圖考へて、

「妙でせうな。」

其曉には柳之助は如何するであらうか、とお種も差當つて妙に考へた。

「肖て居つた所で藝者ぢや……。」　と柳之助は苦笑をする。

「然うですとも。」　とお種は屹と頷いたが、そのまゝ話は途切れて、二人ともぽつ〳〵と薩摩煎に手が出る。誰に話を爲るにも、相對では柳之助は其人と面を合せることを得爲ぬので、別けて馴染の薄いだけ目を翳せてゐる。折々見向けば眩ゆさうにして、可成庭の方を見い〳〵、やがて億劫さうに言出した。

「然し、藝者でも可いですから、適には氣の紛れるものがあると大變好いと思ふ時もあるですな。酒が所好だと酒でもがぶ〳〵飲むですけれど、然うは飲めず。僕は別に娯樂と云ふ事が無いですから、其が實に困るです、毎日々々唯不愉快で。」

長吁を吐いて、見るとも無く保の顏を眤と視てゐれば、いつか又彼方を向いて。母親の膝を枕にしたのを、彼は猶一瞬もせずに瞳を据ゑてゐる。

「それは然うでせうとも。宅へお出なすつた時分より、此頃では却つてお痩せなすつたやうですよ。」

「然うですかなあ。」　と柳之助は蒼黒い頬の邊を撫でゝ見る。

「少しは御保養もなさいまし。ちつとも元氣が無くてゐらつしやる、殿方はそれでは可けません。恁して折角お伴れ申したのですから、甚麼事をしても御氣分を復してあげなければならないと、拙夫も始終然う申して居ります。」

お種の聲は優しげながら命令する力を有つやうに、柳之助は何と無く其が胸に浸みたのである。

「はあ、自分も元氣の無いのは知つとるです、不愉快でゐるのは可厭なのです。……如何したら此心地が一洗したやうに皆忘れて了へるでせうなあ。生替つて來たいですよ！」

援を乞ふが如く彼はお種の面を鋭く眺めた、その苦悶は非ぬ方を見てゐられるほど弱いものではなかつたので。

「親は無し、同胞は無し、係累も責任も何も無い體だから、實は死でも可いのです。」

お種は慌忙しく、

「那樣事を有仰るものぢやございませんよ。何ぼ奥樣の事だから可いと申しても、それでは貴方は依樣女子の爲に身を果すのではございませんか。それでも殿方の……。」　と保を膝に掻載せて、

「あれ、大相生意氣な事を申しました、つい喋過ぎまして。」

「いや、然うでないです、決して那樣事は無いですよ。何卒言つて下さい、十分に言つて下さい。言つて呉れる者が無いから、僕は何時までも同じ事を考へて、獨で苦むで居るのです。遠慮無く言つて下さい、僕は喜むで聽きます。ねえ、言つて下さい。甚麼に言つても可いです、無論僕が餘り思過ぎて居るのです、自分も共は知つとるですから、喜むで聽きます。」

誠は溢るゝばかり面に露れて、お種は寧ろ可恐しく覺えた。

（三）の二

夙てお種は柳之助の餘りに女々しいのを善くは思はぬのである。抑も男の涙を流すのは、決して其妻を失つた時などではない、それが又戀しいや、可懐いで、羸れるまでに心を惱ませて可いものであらうかと考へてゐたから、柳之助の所作は馬鹿々々しいと思ふほど氣に合はぬので。男といふものは、もつと仡然としても

らひたかつた。然も無くては、女といふものが、氣の弱い、物に動ぜ易い、迷の深い、事に臨めば怯れ勝のもので、左右に獨立の難しいのを、傍から支へて、手を牽いて、仆れぬやうには誰が扶けるのである？

其は皆男の役、その男が柳之助のやうに弱くて如何するのであらう。男としての價値は少しも無いではないかと、彼は此點に就いて專ら柳之助を非難するのである。

とは謂ふものゝ、此世に唯一の樂としてゐた最愛の妻を亡つた柳之助をば、何で可憐と思はぬことがあらう。痩衰へて元氣も無く、齒々としてゐるのを見るに就けて、それまでに思込むでゐる心の中は甚麽であらうと想へば、女々しいのは別にして、謂はうやうも無く可憐でもある。

偏屈ではあるが、謹直な、溫和な、潔白な、熱心な、眞率な、眞に憐む所とては微塵も無い人物と思ふほど、お種は誰救はぬ其人の苦艱をば、手も着けずに見ては居られなかつた。出來るだけは扶けたい意で、勿論お類樣が傍に附いてゐるやうな譯には行かずとも、他人としての世話の出來る限はと、靴下の踵の先まで氣を着けて、陰ながら善くしてゐたのである。

他人がそれまでに心配をしてゐるものを、知つてか、知らずか、柳之助はお類の外には神も佛も無いやうに、

義理も人前も管はず、始終苦々しい顏をしてゐるのは、餘りと云へば世話効の無い、と能く勘辨はしてゐながら、折に觸れては心地を惡くもする。其とても畢竟餘り女々しいから起る事と考へれば、猶更その女々しいのが堪へられぬほど憎くもあれば、齒痒くもあつたが、決して色にも口にも出さなかつた。適には夫までに呟く事はあらうけれども、怀へ〳〵て柳之助に對しては其不快を洩すやうな粗忽は無かつたのである。

同居してから柳之助がお類の事で浸潤話をするのは今日が初發と云つても可い、又逃げるやうにしてゐる柳之助が同感を求めやう理も無い。未だに彼はお種に打解け得ぬけれど、外に居て見た葉山の妻と、今は朝夕を共にするお種とに對する感情の良違つたのは事實である。彼の舅に仕へる具合、保を愛する樣子、夫を待ふ鹽梅、他に對するから下に臨む調子、一家を治むる技倆まで——固より那樣事を注意する柳之助ではないが——一所に居れば、見るともなしに長い間には自づと目に入る、彼は人の妻として非難すべき點は無いと見たのである。從來は故無く嫌つてゐたものゝ、實は其人は一家の主婦として皆むべき所は無いのである。

人の妻であつて、人の妻として缺けたる所が無ければ、其人は寧ろ敬すべきもの。

其よりも直接に彼の感情に影響したのは、同居する以上は主よりは多く妻君の世話になるものを、知らぬ顏

では濟まぬといふ考量、彼の無貪着は、杓子あたりで給仕の動靜を察るやうな工夫は無いが、善くされると惡くされるとが解らぬほどの仙人でもなければ、お種の深切にしてくれるのが決して見えぬのではなかつたから、猶更其に對して感謝の意を表する必要を知らぬのではない。まして其人は敬すべき妻君であるからは、少しも猶豫する所は無いのである。

それでもお種に親むのは、何と無く氣の進まぬ所から、然う思ひつゝ猶且遁げるやうにしてゐた。尤も彼は世間の誰にも大方恁云ふ調子で接するので、他から嫌はれるのも全く此點、其代には一旦好かれさへすれば飽くまで好かれるのも此點である。

此頃では柳之助はお類の事を噫氣にも出さぬやうになつた。實は葉山から堅く封じられたので、言へば益々忘られぬ種であるし、言つたとて復らぬ事を、もう〳〵君も言うな、二度とは我も聞くまい、と或時屹と言渡されたので、柳之助も其後は愼むでゐるのであるが、その苦辛は忍ぶに餘る。當時の彼の身の上は、富も、名譽も、榮達も、學理の發明も、海外留學も、何も外に所望と云ふは無い、唯一件、言ひもし、聽かれもして幾分の憂を忘れたい。せめては其が彼の心を慰める、一つより無い道、其道を塞がれたのは、彼に取つて

は呼吸を碍げらるゝほどの苦悶であつた。

如何に然うかとて、打解けた間でなければ、言ふ効も聽かれる効も無し、お種に向つて訴へやう心はさらさら無かつたから、他には諦めもしたやうに見えながら、胸の中では一層焚ゆるばかりに思亂れて、此二週間を過したのである。今日料らずもお種に其の事を言はれて見れば、有繋に嬉しくないことは無い。設ひ然ほどに打解けた間でないにもせよ、一面には敬すべき人、一面には親まねばならぬ人の口から出たのであれば、而して彼は其事に就いて熱心に忠告してくれさうな語氣であつたので。もし其事に就いてならば、如何なる言でも柳之助は喜むで聽くのである。人が有つて、忘れて了へと誨へるならば、自分も復らぬ事は忘れたいのである、喜むで忘れる、忘れる方法を聽きたいのである。

彼は其思に同感を求めたいばかりではない、隨分攻擊を受けても苦しからず思つた。熱心なる抗擊ならば、冷淡の同感よりは幾何望ましからう。左にも右にも其事の噂ならば、彼の心の一時を慰むるに足るのである。久しく慰められもせず、涙にばかり曝されてゐた彼の心は、忽ち死灰の中に一點の熱を起して、不覺に悸きつゝ、彼は逼つてお種の口を開かせたのである。逼られてお種も思ふ旨を話した。

其主意は依様、復らぬ事は諦めるより爲方は無いと云ふに過ぎぬけれど、其言ふ事の裏に、姻家の母でも、葉山でも、最愛のお類でも、なか〳〵此場合には、恁くまでに弱果てた心を劬り得まい、と身に沁みて感じた點があつた。其は優しい聲でもなければ、可懇い語でもない、不朽の道理でもなし、高い教でもなし、畢竟は彼が男に仕へるのも、子供を愛しむのも、夫に册くのも、下に臨むのも、皆其同一なる誠（？）があつて、彼の心を動かしたの外は無い。

話は不圓又昨夜の噂に轉つて、例の肯てゐる、ゐないの問答になつたが、其末に柳之助は恁う言出した。

「僕の目には如何しても然う見えんのだから爲方が無いです。那様ものよりはもつと善く肯とるものがあるですから、二三日内に其をお目に掛けませう。」

「へゝえ。」　とお種の不思議さうに目を瞪はるほど、陰に得意で、輕々しく説明を與へる氣色も無い。

「それは何でございます。」

彼は逾誇りかに笑を含むで、

「まあ、何ですか、其時まで言はん方が可いですな。一寸解らんでせう。」

とお種の判じかねてゐる様子を見て、

「解りますか。然う、少し考へれば解るかも知れません。」

と然も興あり氣に子供染みた喜笑を爲る。

「何でございます。」

問はれるほど猶惜むで、

「解りませんか。」　とばかりで、なか〳〵打明けさうにも爲ぬ。而して其を樂みさうにしてゐる彼の洒落は餘りに無邪氣なので、お種は馬鹿々々しいのと執固いのを可厭がつて、

「はあ、解りません。」　と手短に言つて了つても、柳之助は未だ興有りげに持扱つて、

「解りませんか。」

「解りません！」

彼は常に其夫の洒落や贅言を惜むことは夥しい。談話の中に無用の諂語を交るのは、愚弄するも同じときまで

に考へてゐるのに、一言や二言の洒落ではない、全で一つの謎を懸けたのであるから、例も夫に洒落られて、懊惱なると必ず默つて了ふやうに、又默つて了つたのである。然うとは心着かぬから、可厭がられてゐる謎を柳之助は猶も面白さうに續ける。

「それは大きいものです、隨分大きなものです。」

お種も萬更拋つても措かれぬので、

「へゝえ。」

未だ解つたらしく見えぬので、彼は勿體さうに一歩を進める。

「而して角いものです。」

默つてゐるお種の顏を見い〳〵、

「大きいもので、角いもの、解りましたか。」

「へゝえ。」　とお種の挨拶は、最早應答と謂ふよりは唯聲であつた。聲とよりは太息の碎片と謂ふのが寧ろ適當かも知れぬ。

「其の方が肖とるです。一番那で葉山君を驚して遣らなければ。二三日の内です。然う、丁度此位の大ささです。」

指頭で盞の上を畫つて、其跡を見ながら首を傾げて、

「隨分大きい。」

顏を擧げて、

「一寸解りますまい。」

（四）の一

柳之助が前觸をした二三日内もはや明日あたりとなつた。忘れたのか、氣にも留めぬのか、お種は別に何とも言はずに居ると、夕飯の膳に坐るや否や、

「明日ですよ、此間お話したものは。」　柳之助は然も其人の待ちに待つ事でも注意するやうに顏を見ると言出した。お種は生得の昂然とした調子で、

「はあ、然うでございましたね。」

「明日です。」

「明日何だい、此間お話したものだなどゝ暗號電信を打つたりなにかして。」

と葉山はお種から聞いたのを忘れて了つてゐる。一言心着けられて、

「うむ、あの「解りませんか」事件、彼がいよ〳〵明日？それは面白いね。然し、君の目が腐つてゐるのだから、是が本當の駄目だ。あの〳〵お肯てゐるのを、「何處が肯てゐる？」とは何事だらう。女の方は見ずに物ばかり食つてゐる人物だから可厭になるよ。」

「まあ明日のを見て〳〵れ給へ、此間の讐を復るのだから。」

「へゝ反討にならないやうに用心するが可い。」

「然し君は何でも難すから、何せ難すだらう。難されても僕は管はん、自身が善いと信じたら、それで善いのだ。」

「それで善いとも。誰も然うだらうぢやないか。私だつて善いと思へばこそ這樣細君にでも添つてゐるのぢやないか。」

お種よりは柳之助が極を惡くして、顏の遣端に困り果てる、細君は又始つたと云ふ體で、默つて聽いてゐる。

「今話をすると實に嘘のやうで、少々氣が尤めるけれども、私が嫁を娶ふと云つて騒いだ最中には、一時に八軒から申込が有つて、如何だ〳〵と拂曉から媒人が玄關に詰掛けて、我勝に話を付けやうとするので採めるね、始末にいけないから、番札を渡して會ふ事にしたが、近所では噂だつたさうだ、葉山樣の玄關は嫁取のやうぢやない、藥取だ！」

細君も柳之助も笑はされた。葉山も可笑しかつた口角を改めて、

「其よりもつと偉い話がある、横濱物產會社の支配人をしてゐる、それ、あの木澤ね、」

「えゝ、澁井樣の御親類の。」　とお種も知つてゐる。

「あの木澤、もう其方此方四十だらうが、財は有るし、嬌飾すと來てゐるから若い。妻君の歿なつたのは去年の秋の末だつたかな。」

好加減に聞流してゐた柳之助も急に身に沁みて、

「はあ、何で死んだのかい。」

「子宮病だ。子宮病だの、胃病だの、熱病、卒中、赤痢などゝ來ると、まことに死榮のしない病氣さね。そこで此間中類に繼聘を探してゐると云ふ噂だつたが、いや、候補者の有ること〳〵、それが、木澤の所望は初婚のものに限ると云ふのだよ。財の力だね、四十面を提げてさ、十五年も添つた先妻があつたのだ、それで初婚の候補者が腐るほど有るとは、日本の婦人も好い度胸になつたものさ。

歐羅巴では七十にもなる伯爵の所へ花の苔の十八ぐらゐのが喜んで適くなどは珍しくないさうだ。其を考へると、人氣は悪い國に違無い。借老同穴の契と云ふのが本文なのに、後家になるのが山で嫁入をするとは好い畜生だ。

成程財は貴いのには極つてゐるが、然う又拘られても世の中は面白くなくなるよ。第一生娘などゝいふものは錢勘定や米の直を知らないのに限る。財さへ有れば「ひよつとこ」でも老夫でも御出なさいでは、生娘のことがあるものか、賣女だ。

那麼所へ嫁に適かなければならないなら、私は淵川へ身を沈めると物も食はずに泣通すやうな魂が無ければ可頼くないぢやないか。それが本當の生娘さ。」

「貴方、あれ、御酒が零れますよ。」　とお種は夢中で辯じてゐる夫に心着ける。心着けられても猶且夢中で、

「いよ〳〵木澤の所へも嫁が極つたさうだが、十九才とは如何だい。男はもう四十だ、四十に十九！　悔しいぢやないか、え、餘りだね。それで、身分も悪いのぢやない、小金も有るさうだ、何でも麻布邊の可也にしてゐる官吏の娘で、高等女學校を卒業して、ピアノなども鳴すし、女子普通の業は立派に出來て、箱入の無疵なのだ。寫眞を一寸見たが、好い器量さ。少し意地は悪さうだけれど、何處へ出したつて見事な花嫁だ。まあ考へて見たまへ、是が食ふに窮る身分ぢやなし、不具でゝもあるぢやなし、年が更けてゐるぢやなし、そんなら出戻ぢやなし、年が十九で、箱入でさ、教育があつて、器量好で、相應な身分なのだよ、いくら陽氣が悪いつて男旱は爲やしまいし、何も好き好むで那麼小父さん見たやうな所へ……噫、情無い奴だ！　若い娘の身空で色も戀も無しに、慾の一點張とは如何だい！　然云ふ匹婦の腸こそX光線でお願ひ申すのだ、而して寫眞版に取つて、娘のある家へ一枚づゝ配つて置きたいね。」

言はれても〳〵酒を零し〳〵葉山は仇のやうに罵つた。

「女も然うだけれど、その木澤と云ふ人も……然うな、世間のものは妻を失ふと、直に又娶ふやうだけれど、那は如何云ふものか知らん。死で了ふと直に忘れて了ふのかね。」

葉山の不平は花嫁に在つたが、柳之助は却つて男の方の了簡が聽きたいので。十九で二度目の所へ嫁入る娘よりも、十五年も添つた妻の一周忌も爲ぬのに後妻を迎へる男の心を疑ふのである。

「それは別問題だ。」

「別問題だ。然し僕は常に疑つとるのだから、聞してくれ給へ。」

葉山は手を揮つて、

「もう止さう。明晩の前講と致さうよ。」

獨で葉山の辯じてゐる内に、柳之助は匆々と食事を了つて、此時は膳を離れて、次の間で卷莨を吃してゐたが、獨語のやうに、聞かせたいやうに、

「直に後を娶ふ人が能く有る。」　と壁に靠れて、目を瞑つて、斷々に煙を吹きながら、其語を默讀するやな體であつた。

雲時は葉山も物を言はず、連に飯を食ふ氣勢がして、折々お種が給仕をするらしい物音。隱居所には保の聲が聞にて、急に頓つた迹とて夜の更けたかと思はれる閑寂を、熟と柳之助は聞澄してゐたが、やがて何氣無く目を開くと、眞晝を欺くランプの光は鮮に夫婦の姿を照して、舞臺の幕が開いたやうに、今更異しくも目を慈れる。

愉快らしい夫と滿足さうな妻とは見好げな一間に相對つて、夫は外の勤から歸つて暢々としてゐれば、妻は一日の事を寛々物語らうと、誠を籠めた膳調をして、待つ待たれつした二人は安樂の天地に憂世を忘れてゐる。嗚呼、夫婦一日の樂は夜食に在る。目の前に那麼樂しげな夫婦が居れば、一間隣には這麼傷い獨身が、其樂の無い外に更に一の悲を懷いて、暗い處に蹲つてゐる。ランプの光は夫婦ばかりを照して、殆ど自分の所へは來も爲ぬ。彼等は明い所に樂むでゐるのに、自分は暗い所に竦むでゐる。何ぞ世に在る我身の上の此居所と相似たるや、幸の光は此身を照さぬのである。彼等は樂むのに自分ばかりは悲む。何故に同じ人間でありながら此幸不幸があるのであらう。如何にせば昔の幸を取復し得るであらう。考へても〳〵、唯物可恐いほど傷くばかり覺えて、或は此黯澹い所に閉籠められたまゝ、遂に葬られて了ふやうな氣がして、居耐らずに明

い方へ飛出すと、
二人の驚いたこと！

（四）の二

此夜は思寄らずも柳之助には格別不愉快なるものであつた。二人を驚かして明い處へ割込むだ所で、その樂しげなのが頑たれるでもなく、二人は二人だけ、自分は自分で、暗い所に居たのと異らぬのである。

其實葉山もお種も自分達の方は措いて、柳之助に話掛けるやうに、やうにと努めたのであるが、彼は一向嬉しくもなくて、心の中には、

自分は二人の樂を知つてゐる、彼等は決して自分の此苦は知るまい。嘗て葉山が大醉して年始に飛込むだ事があつた、其時類樣と二人で非常に介抱した事がある。類さんが氷嚢で葉山の頭を冷しながら、二時間も附切に枕頭に附いてゐた、自分は衣類を脱せたり、夜具を出したりして、大騒をやつた。それでも二人して騒いでゐるのは樂であつた。二人が心を一つにして、互に手足の如く動いて、或一つの事を二人して半分づゝ爲るのは、一種の謂ふべからざる幸が自から其中に在る。二人は今如何に幸であるか知れぬ。大醉の葉山は其

時前後も知らなかつたが、自分は今知過るほど何も彼も知つてゐる。大醉したやうに此悲がもつと劇しく、もつと急であつて、寧ろ前後を知らなかつたならば、此不愉快は覺えぬかも知れぬ。此悲がもつと劇しく、もつと急であつたらば、自分は甚麼になるのであらう！（彼は果して其を願ふのであらうか。此悲の大醉は發狂である、その醉覺の水は無論自殺でなければならぬ。彼は自殺を喜ぶ狂人ではなかつた、發狂に樂まむとするほどの變人でもなかつた。然し、彼は何を樂に生きてゐるのか、生きてさへ居たらば失つた樂が又得られるのかと、常に考へては迷つてゐたのである。）二人の幸なのに就けて、自分の苦は？葉山の大醉は一時であつたが、自分の憂目は是から長く、或は一生續くのである。

怎思ふと猶更他の幸を見るに忍びかねて、彼は遽に起つて、二階の居間へ還つたが、還つて見れば、なかなか遲つて來るがものは無くて、暗黑の中に唯一個心を引込めたランプが有るか無きかの悲しくに、其載せてある机の上だけを照すばかり。而も其光を受ける物は一樣に死顔の色をして、傍へ寄つたらば然ぞ身毛も竪たうと冷たげに見える。此微寂しい影の中に白銅鍍の寫眞立が漸う隈取つて、筆筒の側に飾つてある、俤は圓髷で紋服の半身、誰のと問ふまでもない。

柳之助は行くよりランプを屹と明くして、坐ると寫眞を眤と見入つてゐたが、其目は瞬くのを忘れたやうに、姑く瞪つてゐる間に、机掛の花唐草の上に滴々と露を零した。始めて其時瞬を爲ると與に、兩臂を張つて机の上に俯いたまゝ、容易に顔を擧げずにゐたが、やがて思切つた體で振仰けば、涙は頰の邊まで濡してゐる。左の掌で腹立しげに其目を拳拂ふと、ランプの火屋は響を作して、裂けて頽れて落ちる、火は翻られ黑煙を噴く、慌忙しく吹消せば、お類の寫眞も、机も本箱も、二階も我身も、有つたものは皆無くなつて、唯一面の闇い中に柳之助は身動もせずに沈としてゐた。何を考へてゐたのやら、火屋の破片の冷徹るまでも、其儘に居竦つてゐると、何時來たのか階子の口で例の元氣な聲、

「や、眞暗だ、如何したのだ。」

柳之助は萎縮れた聲をして、

「待つてゐたまへ、待つてゐたまへ。」

「如何した、如何した。」

（五）の一

今日はと前觸をした今日であるのに、柳之助は何も持たずに歸つて來たので、お種も有繋に尤めずには措かなかつた。彼は失望に堪へぬ險澁い顔をして、

「もう二三日待つて下さい。」　と言ふさへ殘念さうな、其氣色を見てお種も、

「はあ、然うですか。」　で濟して了つたが、今日には限らぬ、毎でも歸つて來ると、不思議に機嫌を惡くしてゐる。別して不思議なは、朝出て行くのに斷て那樣事は無い、顔の色なら言語なら、朝は割合に汗々して、謂はゞ樂しげに心の急がれる風がある。それが歸つて來ると憔悴として、門を入るも脚の重いやう、或は然も無く歸ることも數の中には有つたなれど、朝出る時に氣の濟さぬらしい樣子の見えた例は前後に一度でも無い。

不圖恁う見出した以來氣を着けると、往と還の容體は版で捺したやうに、いつも〳〵同しである。それは持つてゐられるステッキ、あのステッキでも知れる。往は飛ぶやうで、還は引摺る、と年寄の耳ながら閑さに聞出した隱居所の舅が面白い證明。

返す〳〵もお種は不思議でならぬ。何故に出て行く時は機嫌が好くて、歸つて來れば苦い顔をするのである

やら。女氣の思過して見れば、餘り好い心地は爲ぬのである。歸つて來るのは誰の家である？その家へ歸るのが不愉快となら、不愉快の因は其家に無ければならぬ。此家の何處か不愉快で、何が氣に入らぬのか。もしお類さんが此家に居ないからとならば、學校へ行つたとて居るではなし、又始終鬱ぎ通してゐるものが、毎日の勤が何の面白からう、誰にしても意勝になるが當然である。然も此家が可厭さうに、出て行く時は冴々として、歸來と云ふと憔悴してゐる、之には何ぞ理が有らう。

それとも塒に還る鳥の疲れた翼に飛ぶさへ意く見えるのか、但は例の變人ゆゑかと種々に判じたが、固より何も當推量、唯疑の無いのは其事實で、

「眞に御父樣の有仰つた通り、成程其に違無い、ステッキの音からして然うだ。」

左にも右にも仔細の有りさうな、不思議な、けれども其より未だ心得られぬのは、學校の出勤を意らぬのが、不思議の中での不思議と謂ひたい。箸を持つさへ力無げに大息ばかり吐いて、如何に快々してゐる那裏でも、決して學校を休むだことが無い、休まうとしたことさへ無い。人に言を交すさへ物憂さうにして居るものが、如何して面倒な教授が出來やう、學校へ出る氣が出やう。彼人の氣では、學校も出勤も抛つて、思ふさま鬱

いで居さうなものを、是ばかりは願に掛けて一日でも疎にせぬのは不思議の中の不思議と謂はうか、不思議の上の不思議と謂はうか。迚も有りさうも無い事、出來さうも無い事！、之に就けても熟く變人に違無い、とお種は思ひに思つたのである。

此日の不機嫌は別けて甚しく、昨日までの氣色は何處へやらであつたが、翌朝も同樣で、其睡げな顏はいと ど恨が有るやうに、其恨をば又抑へるやうに下座敷の椽を踏散しながら、お種を見ると、

「僕はどうも病氣です。」

葉山に呼れて茶の間へ入れば、

「僕はどうも病氣だ。」

苦痛を洩すのか、不機嫌の辯疏をするのか、左にも右にも自分から平生の氣分ではないことを訴へながら、不相變柳之助は學校へ出て行くのである、而してステッキの音も例に依つて飛ぶやうに。お種は呆れる張合も失して、これで歸來は甚麼であらう、と午後の退學を待つてゐると、謂ふまでも無く引摺りながら、悄々門を入つて來たが、お種に逢つて始めて出した言は、

「僕はどうも病氣です。」

一度ならず二度までも病氣と聞いては案じられる。委しく容體も訊ねて、然うならば然うの樣に爲ねばならぬ、と其意で始めた話の中に、お種は竟に日頃の不思議を言出したのである。有繋に柳之助は當惑の體で、

「はあ、朝出る時は然うですかな。歸つて來る時は那樣風に見えますか。」

姑く考へて居て、

「然し實際然うです。今の所では何も樂は有りません、學校へ出るのが……何故樂？其理ですか、」

と苦笑をして、

「學校の仕事は割に面白いですよ。それは何です、氣分の惡い時は面白くはないですけれど、それでも內に獨で惘然して居るよりは未だ可いです。教場に居ると大勢を相手にして、學問以外の事は全く考へんですね、それが大變善いです。內に歸つて來ると、紛れる事が無いから、始終類の事ばかり考へるやうになるです。學校に出て居ると其が無いです。

是ばかりは實に姻家の母の賜だと僕は常に思ふです。類の亡くなつた當座、僕は學校も罷めて了はうと思つて、もう打遣かして長く休むで居たです。葉山君にも隨分言はれたですけれど、聽かんで居つたのを、到頭姻家の母に勸められて出たのが發端でしたが、それから今日まで、貴方も知つとる通り、恁して病氣をしとるやうな顏をして、心地も快くないですけれど、僕は一日も休むだ事はありません、實際行かん方が不愉快なのですから。若し學校が無かつたら、僕は本當の病氣になつて了でふせう。

葉山君にも貴方にも非常にお世話になつて居るです、今度お宅に來てから一層貴方の御厄介になつて居るです。それに內に歸つて來ると、不愉快な顏ばかりして居つて、僕は甚だ相濟まんです。」

縫に頭を下げたのも、お種には在るよりは可哀に見えて、口には言はぬ心の底までも、それで讀めたやうな想がする。

「何卒是は病氣だと思つて恕して下さい。」

其聲は重く沈んで、聽く身は緊しく壓へられるやうに覺える。

「此間も貴方から忠告を受けました、自分も其は承知して居るけれども、それで依樣可かんです。どうも病氣です、恁云ふ病氣ですから、管はずに拋つて措いて下さい。」

聞けば不思議でも偏屈でもなくて、這樣可憐も世には在るものか。人の執るべき務は誰苦に爲ぬものは無い。三十になつても四十になつても七日に一日の日曜を皆樂にする。大人氣無いやうに思はれるが、務となれば何仕事もそれ程に辛いものである。彼人も學問が所好だとて、衆が一日の日曜を思ふやうに、六日の務を喜ぶのでもなからうに、其辛い務をば未しも樂にする身は甚麼思であらう。何程働いても、彼人ばかりは衆と違つて、待つ日曜が無い、其上に七日の間務めるにも勝る辛さが片時も胸を離れぬのであるから、其辛さよりは他の可厭がる務をばせめてもの樂にしてゐる。同じ人間でありながら、他の苦を漸う樂にしてゐる其辛さは凡そ如何ほどであらう！それで堪へられるものか、堪へられぬものか、彼人は日曜無しに一週間を他の倍も倍も働くと異らぬのである。

自分にも病氣だと言ふ。あれで病氣にならなくつて如何せう、鬱がなくつて如何せう、痩せなくつて如何せう、不機嫌でなくつて如何せう、偏屈にならなくつて如何せう。

とお種は後で獨り考へては、自分も曳入れられて鬱いでゐた。

彼は柳之助の女々しさを嫌ふよりは殆ど憎むばかりで、其點に於ては毫も假す所は無いのである。今の歎も

悲も憂さも辛さも皆其ゆゑとは識つてゐる、けれども其樣子を見、其心根を聞いては、酷らしく道理ばかりで責めもならぬ、其は其、可憐さは可憐さで、其可憐さの極は、彼の罪すべき女々しさ〻へも一時幾と忘れたのである。

我胸一つに置餘してか、ステッキの音を聞知つた舅にも此事情を話すと、老の氣は更に脆くも打涙ぐむで、

「あゝ、御氣毒な事たのう。それは能くまあ面倒を見てあげるが可い。私は婆樣に別れてもう十年になるが、今でも時々、あゝ生きてゐたらばと思ふ事がある。其當座は忘れられんものだ、と云うて大切な體を那麼事で傷してはならない。お前たちも何分氣を着けてあげるやうに、のう。」

爾後は飛ぶやうなステッキの音のする朝々、お種は獨で情無い思をしてゐた。彼が歸つて來ての不機嫌も、內に居ての苦い顏も、引續いて始終見せられるけれど、從來偏屈とばかりに勘辨をしてゐたものが、何も病ゆゑと、今では優しい思遣になつたのである。

お種にはゝや忘れられてゐた再度の二三日內の期限も今日といふ日彼の歸來が例より晩いので、例は晩い葉山の方が先に歸つて、その噂をしてゐると、檻々と玄關へ横付にした車がある。婢は取次に出た樣子、聞えるの

は柳之助の聲、

「おや、驚見だよ、車にのつて來た、如何したのだらう。」

鰻が天上でもしたやうに驚いた葉山の顏色。其顏をお種は屹と覗て、

「御病氣か何かぢやないのですか知らん。」

「行つて見な。」

（五）の二

お種の出るまでも無く柳之助は傚々と奥へ入つて來た。新聞紙に包むで涉繩を廿文字に掛けた竪三尺許の扁い物を重さうに提げて、お種を見ると口を衝いて、

「出來たです、出來たです。」

常は寢のやうな目も霧々しく、擧止さへ何と無く郤含んでゐる。お種は呆氣に取られて、

「何でございます。」　と其物の何よりは、今日の彼の何が判にたい面色。葉山は小机を引寄せて、其に大美濃の罫紙の假綴を六七册、膝の上にブック仕立の小厚い版本を披げて、會社の調物をして居たが、柳之助

が閾際に立つて、其傍に件の包が壁に寄掛けてあるのを、振向いて横から眺めながら、

「何だい、大きな物を。うむ、それで車に乘つたのか。何を買つて來たのだ。」

「驚見さん、何でございます。」

「えゝ、今見せます。」

彼は忙しげに其包を明の好い方面へ立直して、繩を解き始めたが、未だ帽子を冠つたまゝでゐるので、お種は背後から徐と取つて茶棚の上に置いた。旋て覆の新聞紙を引剝すと、柳之助は一歩左側へ寄つて、二人の面前に其物を顯はしたのである。四つの目は忽ち注ぐ。

「能く肖とるだらう。」　と柳之助は左臂を張つてコートの腰に拳を付けて、右の手で眼鏡の端を抑へながら、連略をして二人の顏を眄した。是は敎場に於ける彼の得意を表す體度で、他の答を聞くまでは、眼鏡に手を觸れては始めに見た點を變へずに視るのである。

葉山の先笑を含むで迎へたのは、お類の立姿を七分の半身に寫した油畫の肖像。額緣は唐草摸樣を浮彫にした分厚の西洋木地で、大さと云ひ、裝飾と云ひ總體に仰山らしく出來てゐる。

繪姿は柳之助の最も善いと云つて居る寫眞を手本に、歸寧の風俗を寫したので。高島田に結つて、「桃の實に仙雀」の挿込、高い前髪の陰に牡丹形の櫛の端が見えて、見事に髮が出てゐる。額の廣い、濃くない一字眉の、小さい目の鋭く澄んだ、鼻狀は凖繩で、好く緊つた唇頭の愛らしい、頰から顋の邊の四合した、小造の細面は慧しげに、又何處と無く淋つてもゐる。稍横向に、片手は椅子に掛けて、右を袖に引入れて、白襟に縮緬の三枚襲、上は水色の「丸に四方木瓜」の紋服、下着は鳩羽鼠の更紗で、帶は葡萄色地に金茶の網目を織出して、銀鼠で細く光琳千鳥を一群づゝに、處々唐松を地色で配つてある。綠々と絡つた緋の花簪の帶揚は胸の邊に雲鶴の形を見せて、帶留の金具は柳の輪の中に金色の一輪椿。

畵は水彩風に見面好く塗つて、飽くまで綿密に筆を用つた、俗氣の多い、仕入染みたるものであるが、寸分差はず寫得たとて、柳之助は至極の滿足で、二度まで期日を遲らしたゞけの事は有ると、言分無しに引取つて來たのである。

「まあ大相好く出來ましたこと。」　お種は物珍しさうに眺めてゐる。其顏を見い〳〵柳之助は自分も覗込んでは、

「宵て居るでせう、ねえ、隨分能く宵て居るでせう。」

葉山は元來這油畵なるものが大の所惡で、月の中の兎と油畵の善いのは、話ばかりで見たことが無いと力んでゐるのに、別して善くないのを見せられたのであるから、一も二も無い、癪けさまに皮肉が言ひたくて敵はぬのを、やう〳〵推怵へて、寧ろ拙惡加減を拜見する氣でゐたが、柳之助が得意で喜んでゐるものを彼が物ではあるし、猶更非は付けられぬので、無理に一箇所を取立てゝ、

「なるほど能く宵てゐる。」　と左も右も言つたのは、御座つてゐると知りつゝ目を瞑つて鵜嚥にする想。何とか言はれるに相違無いと、毎度の事ゆゑ柳之助も其覺悟でゐたに、恁う聞いては逾得意で、

「好く出來とるだらうか、上手に畵いてあるかね。」

葉山は是に於いて益言ひたい、それを最一つ推怵へて、

「宵てゐるから可いやね。」　と無據に答へる。

「誠に能く宵てゐらしやるではありませんか。御髮がねえ、好く出來てゐます。」

「然うですかな。」　と柳之助は額の側に立つてゐたのが、不知お種と並むで見物の一人となつて了つてゐ

る。

「何だな馬鹿々々しい、畜を看ておて髪の出來を譽める奴も無いものだ。同じ譽めるのなら御器量を譽めるが可いぢやないか。」

お種は挨拶ぶりに少しばかり笑を含む。急に憶出したか柳之助は、

「さあ、君如何だ、是で此間の仇を復つたらう。」

「仇とは？仇と呼れる覺は無い。」

「有る。君は宵て居もせん藝者を……。」

「うむ、あの一件かい。」

「君は反討にすると云つたぢやないか。」

葉山は怀へ次手に最一つ怀へて、澁々ながら、

「それは爲ても可いけれど。」

「出來んだらう。」

言ひたい口の蠕々するのを頬に撫廻して、

「いや、どうも恐入つたよ。」

爾時お種は始めて、柳之助の面上に心の底の打解けた餘波が自から寄せるやうな笑の浮ぶのを見た。旋て彼は油畜の正面の壁に兩膝を抱へて靠れながら、餘念なく眺盡してゐる間に、夢見る如く吾を忘れて了ふと、其繪姿の鋭く澄むだ目は忽ち可懷さうに動いて、堅く結むだ唇も綻びる、横顔をさへ振向ける、傍に寄つて來さうにしては、又イむで嬉しげな樣子をして、遂には物を言懸けた。彼は記憶の出來ぬほど種々の話をした、樂しく過去つた事やら、待たれる行末の事やら、睦しい今の事やら。然し、彼は此半年の身に積る歎も、胸に餘る悲も、世は闇の如き淒寥も、それらの事は全く覺の無いやうに捨てゝ置いて、他愛無い私語ばかりに醉されてゐたのである。彼は幻に語つてゐるお類をば、此世に亡い人とは思はなかつた。或時此夫婦は此樣に倚添つて、此樣に樂しく、此樣に話をしたのである、今彼は其の或時の柳之助で、お類とても百年も生る偕老の妻でこそあれ、泉下の魂と思はうか、まして是が畜などゝは。噫、それも一瞬の後！空想の樂は盡きて、憂世は終に憂世に返り、畜になつて了ふのである。

此幻の醉は長く醒めずにはおなかつたが、醒めての後も常よりは冴々として、多時雑談に時を移したが、話の中も彼は間がな隙がな目を遣つて、唯油畫に執着してゐた。

彼が見さへすれば、其肖像は必ず微笑を含む、必ず物を言ふ、畫と思へば可恐しいまでにお類は活動してゐる。葉山は又見れば見るほど拙いものに思つた。彼の思ふほど或は拙くはないかも知れぬが、左も右も善い出來でないのは事實。「これを二階の座敷へ懸けられるのか。」と葉山も肚の中では隨分閉口してゐたのである。

座敷の道具としては然もあらうけれども、是で柳之助の觀好に不足は無いので、強ひて又其巧拙を論じたなら、彼の前にはお類の肖像の名畫は恐らく一面も無い。當時お類の肖像を完全に寫し得る畫家は誰であらう。若くは當世でなくとも、日本でなくとも、希臘、伊太利、佛蘭西、乃至全歐羅巴のあらゆる古來の名匠中にも誰が在らう。天下にお類を畫いて其人を寫得るものは柳之助一人ではあるまいか。彼は其妻を畫くに於ては、古今絶無の名匠と謂はねばならぬ。彼は水の上でも、闇の中でも、處を嫌はず自在に寫得るけれども、唯筆を用ゐて形に現す術を知らぬ。故に此油畫は假に其術を備つたまでの事で俤だに眞を寫して謬が無くば柳之助には其が名畫。お類をだに畫いた圖であれば、彼には世間に一人の名匠も無いかはりに、又一面の惡畫

も無いのである。

「實に好く出來た、ねえ、好いぢやないか。」　と柳之助は又言出す。葉山は顧みて他を言ひたさうに、

「好いよ、好い。」

「之を懸けたら又一層引立つだらう。」

此拙いのが引立たれたら事だ、と益閉口して、今日ばかりは葉山も小さくなつて、徐々調物に懸り始めたが、柳之助は獨で油畫を眺めてゐる。

葉山は折々目を轉しては樣子を見ると、何時見ても猶且眺めてゐる。其體を見れば、心の中が思遣られる、思遣れば傷しくもある。世間には喧嘩ばかり爲てゐる夫婦、性の合はぬ夫婦、折合の付かぬ夫婦、義理で添つてゐる夫婦、夫婦でありながら夫婦の効の無い夫婦が幾多もある。その中の一人に換へて、せめてお類は死したくなかつたと思つた。

「どれ、持つて行かう。」　と柳之助が額を取りにかゝれば、

「もうお歸りかい、ぢや合乘でも申付けやう。」

「何故？」

「夫婦連で歸るのぢやないか。」

柳之助は弗と嬉しかつたので、

「うむ、まあ然うだね。」　と言ひは言つたが、惘然立つて考へてゐるので、

「何を考へてゐるのだ。」

「いや、もう行かう、行かう。」

額を引拖へて、屢蹼出て行くと、莎繩が縶むで四五尺も後を引摺つてゐる。

「もし、もし、奥様の御帶が解けてゐますよ。」

（五）の二

築地ホテルに社員の送別會があるとて、葉山は日の沒暮に出掛けたが、歸つて來たのは、世間も寢鎭つて、其車の響は三町四方へも聞える頃、好い心地に搖れて一睡した爲めに、大方醉も醒際の沒寒さうな風をして

「何時だ、大分更けたやうだ。」　と居間へ通る。

「彼此一時でございます。」　とお種は火鉢の前面へ座蒲團を直す、燈の下には疊紙を披げて、小供の衣服が縫掛けてある。其をば一寸推遣つて、

「お茶を淹れますか。」

「何卒ね。」　と鼠縮緬の襟卷を脫つて、繋糸織に塑八丈の二枚下著の襟を合せ〳〵、身を細くして火鉢の緣に兩臂を掛ける。

「恁云ふ事と知つたら、折を挈げて來るのだつけ。」

「毎でも那樣事を言つてゐらつしやる。」

「何爲志は有るのだけれど、如何も彼の折と云ふ奴は挈げつけないと誠に恰好の惡いものでね、男風だつて萬更でもなし、一寸好い服裝をしてゐても、翅々彼奴を挈げて行く所を見ると、まあ大概の岡惚は帳消になりますよ。」

「貴方などは些と帳消になつた方が可いのぢやございませんか。」

「痛入ります！」「女房の妬くほど亭主持てもせず。」然し其位に思つてゐなければ、亭主が茶屋へ行つたのを

一時になるまで夜延をしながら待つてゐの、歸つて來るとお茶を召上れなどゝ、恁うお手厚くは參りますまい。噫、俺は今晩發起した、お前が死だら驚見と二人で尼になつて了はう。」

「私は急には死ません。」

「まあ然う有仰らずに、せめて一月ばかり。」

「然うすれば如何なさるのです。」

「然うしたら少しは女房の有難味が解るかと思つてよ。」

「本當には爲ませんから。」

葉山は笑つた後を煦にして、

「いや、何の彼のと云つて、女房を麁末にしては濟まない。生きてゐれば不足を言ふやうなものゝ、死なれたら大きに不自由を爲ます。驚見を見るに就けても、大事に爲なければ謬さ。是から精々心懸けて、大事に爲やう、大事に爲やう。」

と黒魚子の紋付の羽織を脱捨てゝ、黒博多の盲獨鈷の帶を解きかけながら、出て行際に、

「さあ奥樣、お寢みなさいまし。お風でも召すと可けません。」

「馬鹿にしてゐらつしやる。」　とお種は直に其羽織を取つて壓むでゐると、廊間の方で、

「お陰樣で煖い〳〵。」　と聲のする傍から、保が喃々言出す。

「貴方、起きますよ。」

葉山が嫌してゐれば、直に又寢付いた樣子。お種は夫の衣類を始末して、それから茶の間を片付けて、自分が寢支度をした頃には、葉山は鼾を立てゝ居る。

階子口への通路の扉が翻つてゐるので、お種は鎖めに行つて偶然瞻げると、二階から明が射してゐる。柳之助は必ず燈を消して寢るのである。もう二時と云ふのに起きて居やう筈が無い、寢忘れたのであらう、と火元を氣遣つて階子を昇つて、窃と襖を啓けると、柳之助の枕頭に若い女が悄然と立つてゐる、と見たお種は一時に體溫を失つて、逆竪つ身毛は全身に鍼を立てられる想、處々の肉は異しげに顫つて、聲は出ず、進退は取れず、目も眩れて立竦むでゐたが、忽ち氣を取直して見定めれば、心の迷でも何でもなく、床脇の壁にお類の油畫が寄掛けてあるので。柳之助は床の間を枕にして、其傍にランプは恰も油畫を照すやうに置いてあ

るから、一面に隱々として黯澹い中に、其繪姿の物凄さは陰火に現れた影かとも見ゆる。

直に油畫と氣は着いても、お種は猶且傍へ寄るのは無氣味であつたが、思切つて衝と入る途端に、柳之助の夜着が蠢々と動いたので、覺えず飛退つて、疑懼目を着けてゐれば、又動く。

「驚見さん、お目覺でゐらつしやるのですか。」

聲を聞くと、柳之助は枕を擡げて、顏を振向けたが、裾の方に居るお種には、夜着の襟に隱れて見えなかつた。枕頭へ廻つて、見ると、目は泣腫れて、涙は仍夥しく霑つて、密に啜上げてゐる。

「貴方、如何なすつて？」

物を言はうにも彼は涙に吭を塞がれて急には聲も出ぬのを、お種は待ちかねて又訊ねるので、柳之助は顏を背けながら、

「何爲又考出して……あゝ、もう、もう泣きはせんです。」

彼は嘗てお種に言はれた事がある、其に對しても此始末は面目無いので。お種とても此で何と言つたら可いのやら言に窮つて、何を考るともなく控へてゐた。柳之助も姑く默つて、此方に顏を向得なかつたが、

「もう泣きはせんですから、何卒行つて下さい。」

「はい。」

「もう思ふまいと思つとるですけれど、此油畫を見たら又種々の事を憶出して、吁！」　と彼は打俯した。

「然う貴方のやうに思つてゐらしつたつて爲やうが無いちやございませんか。」

打俯したまゝ又泣いてゐるらしい。

「餘り然う思窮めてゐらつしやると、お體のお毒でございますよ。」

急來る涙の間から彼は聲を振搾つて、

「何故僕は恁でせう！」

身を顫しては、

「何故僕は忘れる事が出來んでせう！」

旋涙を咬緊めながら、柳之助は床の上に起直つて、我と我身を責めてゐる。彼の苦み呻く後に餘所々々しく立つてゐるのは誰？是ほどに戀焦れてゐる夫を目の前に置きながら、何處を風が吹くと云ふ顏をして、他

は如何あらうと、自分ばかり綺麗にしてゐれば其で可いのか、餘りの薄情も、畜であれば所爲も無いが、所爲も無い其畜が憎いほど、お種は沁々柳之助が慘しかつた。

「もう決して思はないと有仰つて置きながら、猶且恁云ふ物をお拵へなさるから、何にも成りは致しません。今晩も之を御覽なすつて、憶出してゐらつしやるのでせう。それでは幾許忘れやうと有仰つたつて、忘れやうが無いではございませんか。何と思召して恁云ふ物をお拵へなすつたのでございます？」

柳之助は目を擧げると、寢衣姿でありながらお種は一點の亂した所も無く、屹と容を正して、力を籠めて視てゐられるので、慌てゝ居住を直して、

「實は是は疾に註文したので、其が漸く出來て來たのです。貴方にも從來度々言はれたのに、又這麼所を……どうも面目無いですな。然し、如何して知れたでせう、下へ聞えたですか。葉山君は起きて居られるのですか、あゝ、然うですか。」

彼は涙を拂つて、襟を掻合せた。

「僕は今まで人の死ぬのを這麼に悲しいものとは思はんでした。世間には妻に死なれたものは、何も僕ばかりと云ふではないですものな、其を僕ばかり這麼に悲しがるのは、考へて見ると可慙しいです。葉山君も言つたですけれど、僕のやうに何日までも〳〵思切れずに愚痴ぽく泣いとるものは無い。然うでせう、然うだらうと自分も思ふです。然し、僕は決して思切れんのぢやないですよ、思切ることは十分に思切つとるです。思切つたのと忘れられんのとは僕は別だらうと考へるです、如何ですかね。もう死で了つたものは如何したつて爲方は無い、で思切つとるです、然し、始終考へん事は無いですね。それが何も死で了つたものが思切れんで考へるのではないですよ、唯考へては悲しくなるのです。世の中には種々不愉快もあるですけれど、死だもの〳〵事を考へるほど、そりや不愉快はありませんな。葉山君は善いです、貴方が居つて。貴方も善いです、葉山君が居るから。僕は此油畜、油畜の外には、外には何も……。」

と言ひも敢ず顔をば袖に摺付ける。

「それはお察し申さないではありませんけれど、貴方のやうに然う思つてゐらしつたら、御體に障ります。もう現在障つてゐらつしやるではございませんか、ですから猶々氣が閉ぢて、其が爲に、不知紛れて了ふものも附絡つてゐる理でございます。全く御體を不良してゐらつしやるのです、腸もお不良なつて居るのでで